栃木県埋蔵文化財調査報告第190集

横倉戸館遺跡

一般国道４号（新４号国道）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査

１９９７．３

栃木県教育委員会
㈶栃木県文化振興事業団

横倉戸館遺跡

よこくらとだて

一般国道４号（新４号国道）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査

１９９７．３

栃木県教育委員会
㈶栃木県文化振興事業団

序

本県を縦貫する４号国道は、本県の産業や経済を支える基幹道路として重要な役割を果たしてまいりましたが、交通量の増加に対処するため、建設省は新４号国道の建設を計画いたしましたが計画路線部分には多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、道路建設に先立ち記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

小山市の南東端に位置する横倉戸館遺跡は、平成２年度に発掘調査調査を実施し平成７年度から平成８年度にかけ整理作業を行ってまいりました。そしてこの度、横倉戸館遺跡発掘調査報告書として刊行する運びとなりました。

本遺跡は、旧石器時代から江戸時代にかけての各種の遺構・遺物が発見されております。特に縄文時代後期のものと思われる埋甕は、当時の人々の埋葬方法を窺い知るものとして、小山市域の歴史に新たな資料を加えることになると思います。

本報告書刊行にあたり、歴史研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓蒙並びに教育機関の参考資料として広く活用して頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行まで多大な御指導・御協力をいただきました建設省宇都宮国道工事事務所・関係機関・各位に対し、厚くお礼を申しあげます。

平成９年３月

栃木県教育委員会

教育長　石　川　　格

目　　次

序　文
目次・例言・凡例

第１章　発掘調査に至る経緯および経過 …… 1
第１節　発掘調査の経緯 …… 1
第２節　発掘調査の経過 …… 6
（１）発掘調査の実施 …… 6
（２）発掘調査の組織 …… 7

第２章　遺跡の環境 …… 8
第１節　地理的環境 …… 8
第２節　歴史的環境 …… 11

第３章　発掘調査された遺構と遺物 …… 18
第１節　旧石器時代の遺物 …… 18
第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 20
（１）埋甕 …… 20
（２）遺構外出土の遺物 …… 23
第３節　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 31
（１）古墳時代中期の竪穴建物跡 …… 31
（２）近世の土坑と墓 …… 38
（３）遺構外出土の遺物 …… 40

第４章　まとめ …… 44
第１節　旧石器時代 …… 44
第２節　縄文時代 …… 44
第３節　古墳時代 …… 44
第４節　古代以降の調査成果 …… 48

参考文献 …… 49
写真図版 …… 53
報告書抄録 …… 77

挿　図　目　次

第１図　新４号国道路線と発掘調査遺跡（栃木県）位置図（1/200,000）…… 5
第２図　横倉戸館遺跡と周辺の遺跡（1/80,000）…… 9
第３図　横倉戸館遺跡　周辺地形図（1/6,000）……10
第４図　横倉戸館遺跡　調査区配置図（1/2,000）……16
第５図　横倉戸館遺跡　北半部全体図（1/300）……17
第６図　横倉戸館遺跡　旧石器 ……19
第７図　横倉戸館遺跡　SK－03　遺構・遺物 ……21
第８図　横倉戸館遺跡　SK－04　遺構・遺物 ……23
第９図　横倉戸館遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器）…27
第10図　横倉戸館遺跡 遺構外出土遺物（縄文時代の石器）…29
第11図　横倉戸館遺跡　SI－01　遺構・遺物 ……32
第12図　横倉戸館遺跡　SI－02　遺構 ……35
第13図　横倉戸館遺跡　SI－02　遺物 ……36
第14図　横倉戸館遺跡　SK－01　遺構 ……38
第15図　横倉戸館遺跡　SK－02　遺構・遺物 ……39
第16図　横倉戸館遺跡　遺構外出土遺物（古墳時代以降）42
第17図　古墳時代の土器比較図（１）……46
第18図　古墳時代の土器比較図（２）……47

表　目　次

第１表　一般国道４号（新４号国道）改築工事に係わる埋蔵文化財包蔵地一覧表 … 3
第２表　調査工程表 …… 4
第３表　SI－01　出土遺物 ……33
第４表　SI－01　古墳時代中期　出土遺物数一覧表 …33
第５表　SI－02　出土遺物 ……36
第６表　SI－02　古墳時代中期　出土遺物数一覧表 …37
第７表　横倉戸館遺跡出土銭 ……39
第８表　遺構外出土遺物 ……40
第９表　遺構外出土遺物数一覧表 ……43

写　真　目　次

図版１　縄文時代　埋甕
　SK－03　遺構確認状況（北西から）
　SK－03　セクション（南から）
図版２　縄文時代　埋甕
　SK－03　遺物出土状況（南から）
　SK－03　完掘（南から）
図版３　縄文時代　埋甕
　SK－04　（北東から）
　SK－04　セクション（北東から）
図版４　縄文時代　埋甕
　SK－04　遺物出土状況（北東から）
　SK－04　完掘（北東から）
図版５　古墳時代　竪穴建物跡
　SI－01　セクション（東から）
　SI－01　遺物出土状況（東から）
図版６　古墳時代　竪穴建物跡
　SI－01　遺物出土状況（東から）
　SI－01　完掘（東から）
図版７　古墳時代　竪穴建物跡
　SI－02　セクション（北から）
　SI－02　セクション（東から）
図版８　古墳時代　竪穴建物跡
　SI－02　セクション（北から）
　SI－02　完掘（東から）
図版９　近世　墓壙
　SK－01　セクション（南東から）
　SK－01　完掘（南東から）
図版10　近世　墓壙
　SK－02　遺物出土状況（南東から）
　SK－02　完掘（南西から）
図版11　旧石器時代　出土遺物
　旧石器
　縄文時代　埋甕使用土器
　SK－04　埋甕使用土器
図版12　縄文時代　埋甕使用土器
　SK－03　埋甕使用土器（粘土積上げ休止面の刻み）

SK－03　埋甕使用土器
図版13　縄文時代　遺構外出土遺物
縄文土器　１群～５群
縄文土器　６群～７群
図版14　縄文時代　遺構外出土遺物
石器（石鏃・磨製石斧・石匙・スクレイパー）
石器（打製石斧・石核・礫器・石皿）
図版15　古墳時代　遺構出土遺物
SI－01－１
SI－01－２
SI－01－３
SI－01－４
SI－01－６（裏面）
SI－01－６（表面）
SI－01－７（断面）
SI－01－７（表面）
図版16　古墳時代　遺構出土遺物
SI－01－８（内面）
SI－01－８（外面）
SI－01－９（内面）
SI－01－９（側面）
SI－01－９（底面）
SI－01－５
SI－02－１
SI－02－２
図版17　古墳時代　遺構出土遺物
SI－02－３（脚部内面）
SI－02－３（側面）
SI－02－４
SI－02－５
SI－02－６
SI－02－７
SI－02－８（表面）
SI－02－８（裏面）
図版18　古墳時代　遺構出土遺物
SI－02－９（表面）
SI－02－９（裏面）
近世　遺構出土遺物
SK－02－１～６
SK－02－１～６錆着状況
古墳時代　遺構外出土遺物
遺構外－１（側面）
遺構外－１（杯部底面）
遺構外－３
図版19　古墳時代　遺構外出土遺物
遺構外－２（側面）
遺構外－２（底面）
遺構外－４（内面）
遺構外－４（側面）
遺構外－４（底面）
遺構外－５
遺構外－６
遺構外－７
図版20　古墳時代　遺構外出土遺物
遺構外－８
遺構外－９
遺構外－10（内面）
遺構外－10（外面）
遺構外－12（外面）
遺構外－12（底面）
遺構外－13（外面）
遺構外－13（底面）
図版21　古墳時代　遺構外出土遺物
遺構外－14（表面）
遺構外－14（裏面）
遺構外－11
遺構外－15（上面）
遺構外－15（下面）
古代　遺構外出土遺物
遺構外－16
中世　遺構外出土遺物
遺構外－17（内面）
遺構外－17（外面）
図版22　中世・近世　遺構外出土遺物
遺構外－20（内面）
遺構外－20（外面）
遺構外－18（内面）
遺構外－18（側面）
遺構外－21（外面）
遺構外－21（側面）
遺構外－21（内面）
遺構外－19

例　　言

1．本書は、栃木県小山市大字横倉字戸館795～797番地ほかに所在する横倉戸館遺跡の発掘調査報告書である。遺跡略号は「OYT」である。

2．発掘調査は、一般国道4号（新4号国道）改築工事にともなう事前調査である。

3．調査は、建設省の委託事業であり、栃木県教育委員会事務局文化課の指導により、財団法人栃木県文化振興事業団が実施したものである。

4．本遺跡の調査および整理報告期間は以下の通りである。

調　　査　1990（平成2）年4月2日～1991（平成3）年3月31日

整理報告　1996（平成8）年4月1日～1997（平成9）年3月31日

5．発掘調査は、財団法人栃木県文化振興事業団文化財調査部調査第2課（1990年度当時）の岩上照朗・赤羽孝浩が担当した。

6．整理・報告書作成作業は、財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査部調査第2課で行い、内山敏行・亀田幸久が担当した。

7．本書の執筆と作成の分担は次のとおりである。

第1章第1節　岩上照朗　　第3章第1節・第2節　亀田幸久・内山敏行

その他の執筆および全体の編集　内山敏行

遺構の写真撮影は岩上照朗・赤羽孝浩、遺物の写真撮影は亀田幸久・内山敏行が行った。

8．発掘調査と整理作業に関して、次の方々から御指導・御協力を頂いた（敬称略）。

建設省宇都宮国道工事事務所・栃木県教育委員会文化課・小山市教育委員会・小山市立博物館

9．今回の発掘調査については、本書を正式報告とする。

10．本遺跡の出土遺物・資料類は、財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センターに保管している。

11．発掘調査および整理作業の参加者は次の通りである。

（発掘調査）遠藤江美子・奥貫ミイ・佐山みよ・鈴木キクイ・染谷モン・館野キヨ子・中村金三・中村しま子・中村セイ・中村ミヨ・中村米子・中山孝子・中山トヨ子・宮田基司・山中さわ・山中タイ・山中マツ江

（整理作業）赤荻タマエ・荒井光枝・生駒幸子・池沢恵子・池沢ヨシ子・池杉映子・池田留美子・板垣きみ子・岩本文子・上杉玲子・大平洋子・大滝久子・奥貫ミイ・川村太加子・北島洋子・北野登美子・小瀬洋恵・佐伯智恵子・佐山延子・菅原澄子・鈴木キクイ・鈴木則子・鈴木典子・関ハル・瀬野佳代子・高橋春恵・高橋ユリ子・館野キヨ子・鳥山初枝・鳥山泰子・中野里子・中村しま子・根本ひろ子・信末シナ・長谷川明美・藤田八重子・峯容子・宮野美智子・山口啓子・山滝光枝・山中菊枝・山中さわ・山中治子・山中真弓

凡　　例

〔遺　構〕

方位　図中の方位は、小縮尺の地形図（第１図・第２図）では真北を示す。大縮尺の地形図（第３図・第４図）と遺構の図面では座標北（国土調査法に基づく平面直角座標第Ⅸ系のＸ軸方向）を示す。

縮尺　遺構図の縮尺は、竪穴建物跡と土坑を1/60、埋甕を1/20とした。

標高　遺構実測図に示した断面水準線の数値は、東京湾の平均海面を基準とした海抜標高を示す。

遺構名　遺構種類は、竪穴建物跡をSI、土坑と埋甕をSKの略号で表し、各種類ごとにそれぞれ通し番号をふった。なお、現地調査時の遺構名称・番号を変更しないでそのまま使用している。

〔遺物の実測図〕

縮尺　旧石器時代の石器と古墳時代の石製品は2/3、縄文時代の石器は1/2または1/3、縄文土器の拓本・断面は1/3、完形または図上復原の縄文土器は1/4、土師器および古墳時代以降の土器は1/3、近世の銭は1/1とした。これは原則であり、例外もある。

器質　繊維入りの縄文土器は断面網かけ、繊維のない縄文土器と土師器・土師質土器・瓦質土器・陶器・石器・石製品は断面白抜きで示す。

器面調整と施釉　古墳時代以降の土器では、撫での範囲を破線、削りの範囲を実線で示し、必要に応じて削りの方向を矢印で示す。施釉陶器の釉の範囲は一点鎖線で示した。

〔遺物の記載〕

色調　土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1967『新版 標準土色帖』の12版（1992年）を用い、必要に応じて色相・明度・彩度も表示した。焼成当初の色調に近い部分で観察し、二次的についたスス・おこげ・加熱赤化・塗彩は別の特徴として扱う。

胎土　混和材の多少を基準に、「粗い／やや粗い／やや緻密／緻密」とする。分類基準は次の通り。

・混和材が鉱物・岩石の場合：長径0.5mm未満は「細砂」、0.5～2.0mmは「砂」、2.0mm以上は「礫」とする。ただし、雲母の場合は「細片」・「片」・「粗片」とする。

・鉱物・岩石以外の場合：長径0.5mm未満は「細粒」、0.5～2.0mmは「粒」、2.0mm以上は「粗粒」とする。

・混和材の色は「灰・白・黒・赤・透明」とする。半透明のものは「透明」に含めた。明確なものは鉱物名を記したものもある。

焼成　「硬質／やや硬質／やや軟質／軟質」に分類する。その種類の遺物として普通のものは特に記載しない。高温で焼き、陶器質により近くて硬いものが「硬質」で、芯に黒色が残らないことが多い。

遺物の出土数　竪穴建物跡については、出土遺物数を一覧表で示した。

・器質（土師器・須恵器など）と器種ごとに、口縁部・底部・高杯脚柱部など、特定部位の破片数を集計した。

・体部の破片は、数を数えないで、単に「有」とだけ示した場合が多い。破片の大きさや土器の壊れかたによって極めて大きく変動する体部破片数は、口縁部破片数や底部破片数にくらべると定量的な意味が低い。例えば、１個の甕の胴部は、３片にでも50片にでも、どのようにでも壊れて出土する。口縁部や底部の場合はこれほど誤差が大きくない。

・複数の破片が接合した土器でも、すべて接合する前の破片数で示している。

・異なる時期の遺物の混入品は集計から除外し、「混入」と明記して一覧表の下の欄で簡単に紹介した。

第１章　発掘調査に至る経緯および経過

第１節　発掘調査の経緯

４号国道は、関東・東北を貫く我が国における最重要幹線のひとつである。栃木県においても、ほぼ中央部を縦断するように設定されており、小山・宇都宮・矢板・黒磯市など５市７町を結ぶ最も長大な幹線となっている。交通量も他を圧して多く、近年の地域開発を契機として今後更に増加が見込まれる路線である。しかし、各市町の中心部を通るため、交通量の増加に対し、例えば現道の拡幅で対応することは極めて困難な状況にあった。とくに、宇都宮市以南の地区については、市街化の進行が著しく現国道の拡幅は不可能に近い。これらの状況を踏まえた建設省においては、新たな路線の策定が急務とされ、昭和39年度より国道４号バイパス（新４号国道）として計画線の調査及びそれに関する諸事業に着手していたところである。

計画路線の大略決定に従い、昭和44年７月７日付け宇国発第2041号により建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所長より栃木県教育委員会教育長あて、国道４号バイパス（新４号国道）建設計画が提示された。併せて、当該路線上の埋蔵文化財の有無とその位置並びに取り扱いについて照会がなされている。

県教育委員会は、これを受けて宇都宮国道工事事務所（以下「国道事務所」と略す）と密接な連絡をとるとともに、道路建設予定地内の埋蔵文化財所在調査を実施した。実施時期は、昭和44年７月～８月と昭和53年９月の２回にわたり、主として県教育委員会事務局文化課職員がこれに当たった。初回は、主に国道50号以北に関わる地区について実施し、昭和44年９月４日付け文化第258号により国道事務所長あて回答している。昭和53年は、主に国道50号以南の地区についての所在調査を実施した。この結果、以下の16箇所に及ぶ埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」と略す）を確認した。

宇都宮市地区：

久部台古墳群	（宇都宮市石井町所在）	猿山遺跡	（宇都宮市下栗町所在）

南河内町地区：

薬師寺南遺跡	（河内郡南河内町薬師寺所在）

小山市地区：

鷹の巣前遺跡	（小山市鉢形所在）	本郷前遺跡	（小山市鉢形所在）
向野原遺跡	（小山市中久喜所在）	八幡根東遺跡	（小山市中久喜所在）
八幡根遺跡	（小山市中久喜所在）	横倉遺跡	（小山市横倉所在）
横倉戸館遺跡	（小山市横倉所在）	横倉宮ノ内遺跡	（小山市横倉所在）
田間東道北遺跡	（小山市田間所在）	西裏遺跡	（小山市田間所在）
塚崎遺跡	（小山市塚崎所在）	金山遺跡	（小山市東野田所在）
大境遺跡	（小山市東野田所在）		

遺跡所在調査終了後、これらの取り扱いについて建設省と事前協議に移った。1991（昭和66）年度供用開始を目処とする建設スケジュールと遺跡調査スケジュールとの間の調整を図ったわけである。その際、発掘調査より報告書刊行に至るまでの作業工程の概要を示し、建設省側の理解と協力を要請した。何回かの打ち合わせを実施したが、対象とする発掘調査対象面積がかなりの数量にのぼること、それに見合うだけの調査担当職員確保の困難さ、建設計画の緊急性などから、協議はしばしば難航した。

種々の議論を重ねた結果、大筋で次のような合意が成立した。新４号国道の全線開通は昭和66年度を目標

とすること。新４号国道の開通は本県行政の立場からも重要事項のひとつであることから、発掘調査をこれに向けて効率良く実施するよう調査体制を整備していくことなどであった。具体的には、発掘調査は工事優先地区に応じ、用地取得の進捗を考慮しながら進めることとした。取り敢えず、小山市地区と小山市以北地区と県内全線を二分割して発掘調査を実施することとなった。これは、小山市以北地区の南河内町～宇都宮市間の工事を建設省としては先行させたいとの要望と、同時に用地取得についても当地区では既に交渉中であり、早期に達成できるとのことによる。これを受けて県教育委員会では、南河内町に所在する薬師寺南遺跡と宇都宮市に所在する猿山遺跡・久部台古墳群の発掘調査を優先させて実施することになった。

薬師寺南遺跡については、昭和48年度から50年度まで計３次にわたる発掘調査を実施している。その後、整理作業・報告書の作成を順次行い、昭和54年３月、栃木県埋蔵文化財調査報告第23集「薬師寺南遺跡」として公刊した。猿山遺跡・久部台古墳群については、昭和49年度から53年度まで発掘調査を実施し、昭和56年３月、栃木県埋蔵文化財調査報告第38集「猿山遺跡 付久部台古墳群」として報告書刊行がなされている。

次いで、小山市地区内所在の各遺跡についても、その取り扱いについて建設省側と打合せが実施された。その結果、小山市地区内を一般国道50号を境としてその以北と以南に分け、優先工事区域である以北より、発掘調査を実施することになった。発掘調査は、鷹の巣前・本郷前・向野原・八幡根東・八幡根の５遺跡について、昭和55年度より58年度まで４年間にわたり実施した。このうち、鷹の巣前・本郷前・向野原の３遺跡については、昭和60年３月、栃木県埋蔵文化財調査報告第70集「一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　鷹の巣前遺跡・本郷前遺跡・向野原遺跡」を刊行し、一連の作業が完結している。尚、新４号国道に係わる各遺跡の概要・調査期間等については第１表に掲載した。

新４号国道改築工事関係の発掘調査は、昭和48年度より平成３年度まで実施した。この間昭和56年度は、県段階の埋蔵文化財行政にとって大きな転機となった年度である。

それ以前まで、調整・発掘調査・遺物等整理・報告書作成という一連の流れを県教育委員会文化課文化財調査係において一手に担っていた。昭和56年度は、効率的な埋蔵文化財行政を企図し、４月１日をもって財団法人栃木県文化振興事業団が発足した。以後、各種開発行為との調整協議は、主として県教育委員会が担当し、発掘調査・整理作業・報告書作成を当事業団が実施するとの明瞭な役割分担が整い、より緻密な埋蔵文化財行政が可能となったわけである。これにより、国・公社・公団に関わる発掘調査については、県教育委員会の指導・推薦を受けた当事業団が、当該諸機関と直接に受委託契約を締結する方向が定められた。第１表各遺跡のうち、薬師寺南遺跡から向野原遺跡までは当事業団発足以前のものである。八幡根東遺跡以後の発掘調査等については、当事業団がこれに当たっている。

尚、平成３年４月１日には埋蔵文化財センターが下都賀郡国分寺町に開所した。埋蔵文化財の調査研究及び保存・資料普及事業の充実を図り、より広範な埋蔵文化財行政の成果を高めようとするものである。当事業団事務局内にあった文化財調査部がこれに移行し、以後の発掘調査・整理作業・報告書作成は当センターで実施することになった。

さて、当事業団が設立された昭和56年度以降の調査の経過について記述する。調査工程を第２表に提示する。発掘調査対象地はすべて小山市地区にあり、旧石器・縄文時代から近世初期にかけての各時代の遺跡が所在する。当初の調査面積は約25万㎡に及び、計10箇所の遺跡が対象となっている。

調査は、八幡根東遺跡から着手している。次いで、昭和57年度八幡根遺跡と進むわけであるが、第２表調査工程表の通り、昭和58年度から59年度にかけて現地での調査は一時中断している。これは、国道50号以北の道路建設工事を優先したいとの建設省側の意図によるものであった。つまり、この両遺跡は国道50号の

第１表　一般国道４号（新４号国道）改築工事に係わる埋蔵文化財包蔵地一覧表

番号	遺跡名（旧名称）	所　在　地	種　類（時代）	面　積（㎡）	主　な　遺　構	調査・報告（報告書）
1	久部台古墳群	宇都宮市石井町 久部	古墳群（古墳）	18,500 （全対象面積）	円墳３基、前方後円墳１基	昭和50年度調査 昭和56年度報告書刊行 （第38集）
2	猿山遺跡	宇都宮市下栗町 さるやま	集落跡（奈良～平安）	27,400 （全対象面積）	住居跡61軒、掘立柱建物跡８棟、円形周溝遺構３基、その他井戸跡、ピット群等	昭和49～53年度調査 昭和56年度報告書刊行 （第38集）
3	薬師寺南遺跡	河内郡南河内町 大字薬師寺	集落跡（古墳～平安）	18,000 （調査面積）	住居跡130軒余、掘立柱建物跡３棟、円墳１基、方形周溝墓、その他井戸跡、土坑等	昭和48～50年度調査 昭和53･54年度報告書刊行 （第23集）
4	鷹の巣前遺跡	小山市大字鉢形 字鷹の巣前		13,750 （調査面積）	遺構なし	昭和55年度調査 昭和60年度報告書刊行 （第70集）
5	本郷前遺跡	小山市大字鉢形 字鷹の巣前	集落跡（旧石器・平安）	28,200 （調査面積）	旧石器ブロック２ヶ所、住居跡５軒、その他土坑等	昭和55年度調査 昭和60年度報告書刊行 （第70集）
6	向野原遺跡	小山市大字中久 喜字上野原	集落跡（古墳）	28,200 （調査面積）	住居跡５軒、その他土坑等	昭和55年度調査 昭和60年度報告書刊行 （第70集）
7	八幡根東遺跡	小山市大字中久 喜字八幡根	集落跡（旧石器～古墳・平安）	上層25,100 下層16,100 （調査面積）	旧石器ブロック９ヶ所、同炉跡２ヶ所、住居跡62軒、井戸跡４本、掘立柱建物跡３棟、その他土坑等	昭和56～57年度調査 平成７年度報告書刊行 （第181集）
8	八幡根遺跡 （中久喜遺跡）	小山市大字中久 喜字八幡根	集落跡（旧石器～古墳・平安）	7,700 （調査面積）	住居跡68軒、井戸跡２本、土坑44基	昭和57年度調査 平成８年度報告書刊行 （第189集）
9	横倉遺跡 （長谷遺跡）	小山市大字横倉 字戸館・長谷	集落跡（旧石器～古墳・室町）	10,000 （調査面積）	掘立柱建物跡12棟、地下式壙１基、井戸跡15本、溝跡９条、土坑164基、不明遺構・ピット群等	平成２年度調査 平成７年度報告書刊行 （第182集）
10	横倉戸館遺跡	小山市大字横倉 字戸館	集落跡（旧石器・縄文・古墳） 墓地（縄文・江戸）	5,000 （調査面積）	住居跡２軒、埋甕２基、墓２基	平成２年度調査 平成８年度報告書刊行 （第190集）
11	横倉宮ノ内遺跡 （横倉宮の内遺跡）	小山市大字横倉 字宮ノ内	集落跡（旧石器・縄文・平安・室町） 墓地（室町）	19,600 （調査面積）	住居跡10軒、掘立柱建物跡８棟、井戸跡57本、地下式壙18基、方形竪穴１基、その他土坑等多数	平成２～３年度調査 平成６年度報告書刊行 （第161集）
12	田間東道北遺跡 （宿尻遺跡）	小山市大字田間 字東道北	集落跡（旧石器～古墳・平安） 館・墓地（室町）	10,000 （調査面積）	住居跡10軒、土坑191基、堀跡６条、火葬墓１基、地下式壙２基、井戸跡13本	平成元年度調査 平成５年度報告書刊行 （第149集）
13	西裏遺跡 （谷中島遺跡）	小山市大字田間 字西裏	集落跡（旧石器～古墳）	11,400 （調査面積）	住居跡44軒、円形周溝遺構８基、方形周溝遺構２基、溝跡、土坑等	昭和63～平成３年度調査 平成７年度報告書刊行 （第180集）
14	塚崎遺跡 （西浦遺跡）	小山市大字塚崎 字東畑	集落跡（旧石器・縄文・古墳）	12,000 （調査面積）	旧石器ブロック３ヶ所、礫群２基、住居跡６軒、土坑127基、溝跡３条、現代の炭窯２基	平成元～３年度調査 平成５年度報告書刊行 （第150集）
15	金山遺跡 （東野田遺跡）	小山市 大字東野田 字金山・大門前	集落跡（旧石器～近世） 製鉄関連遺跡（平安） 墓地（中世）	57,100 （全対象面積）	旧石器ブロック12ヶ所、礫群１基、方形周溝墓１基、住居跡482軒、掘立柱建物跡117棟、井戸跡140本、鉄生産関連炉１基、地下式壙82基、方形竪穴20基、土坑1930基、溝跡39条、柱穴列10ヶ所、中世道路跡２、水田１、ピット群等	昭和60～平成３年度調査 平成４～８年度報告書刊行 （第135,148,160,179,187,188集）
16	大境遺跡 （六軒遺跡）	小山市大字東野 田字六軒	製鉄関連遺跡（平安）	5,400 （調査面積）	溝跡４条、土坑３基	昭和60・62年度調査 平成４年度報告書刊行 （第136集）

※　これは建設予定路線内の遺跡について北から列記したものである。

北側に所在する遺跡であること、これより以北の遺跡調査及び用地取得が終了していること、国道50号が新４号国道全線の大きな結節点であることなどによる。２年間の中断の後、昭和60年度金山遺跡の調査を再開した。尚、昭和60年度には、茨城県との境に位置する大境遺跡の調査も併せて実施した。

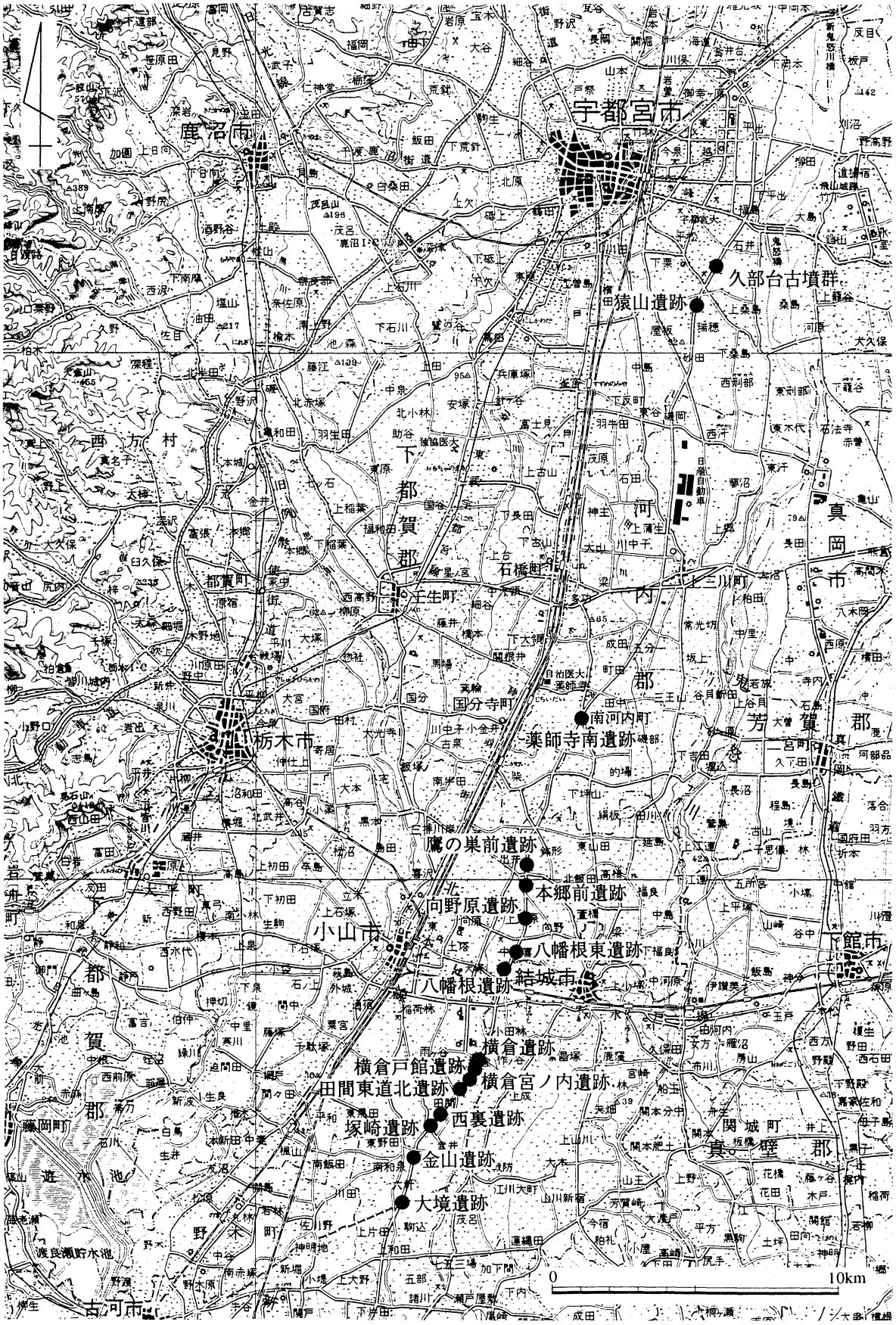
金山遺跡については、当初都合３年間の調査期間を設定していた。しかし、確認した遺構・遺物量ともに予想量をはるかに上回り、調査開始間もなく調査予定期間の見直しが必要となった。また、その他の遺跡数及び調査対象面積と調査担当者数を勘案すると、国道全線開通昭和66年度内という計画に支障をきたすのは明らかとなったのである。この問題を解決するために必要なのは、今後調査対象とする各遺跡のより具体的な内容を確認し、それに沿って調査担当者数・経費などの調査計画を練ることである。具体的には、本調査以前に試掘を実施し、それによって得られた資料をもとに調査計画を見直すことであった。こうして、昭和62年度より、金山遺跡等の継続的な調査と併行して調査対象各遺跡の試掘を実施した。次いで、試掘の結果を基に、担当者の員数・調査経費・調査対象面積の確定（各遺跡の調査面積は、結果的には第１表のように移行した。）等調査計画の見直しを図った。同時に、出土遺物量などを勘案して、将来の整理・報告書作成の日程を見越し、整理作業の一部（出土遺物の水洗・注記・復元など）についても同年度より開始した。

新４号国道改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成３年度をもってほぼ終了し、暫定二車線ではあるが、当初の予定どおり平成４年４月全線供用開始したのである。

約20年にわたる新４号国道関連の発掘調査の間は、前述のように本県埋蔵文化財行政が大きく変容・発展する時期であった。金山遺跡発掘調査開始以後をみても、調査期間は７年間に及び、この間埋蔵文化財セン

第２表　調査工程表

番号	遺跡名（旧名称）	昭和56年	57	58	59	60	61	62	63	平成元年	2	3	調査担当者
7	八幡根東遺跡												川原由典、藤田典夫
8	八幡根遺跡（中久喜）												川原、藤田
9	横倉遺跡（長谷）								試掘				岩上照朗、片柳茂、進籐敏雄、赤羽孝浩、本田剛弘
10	横倉戸館遺跡								試掘				岩上、赤羽
11	横倉宮ノ内遺跡（横倉宮の内）								試掘				岩上、飯田誠、進籐、斎藤弘、片柳、須藤孝浩（旧姓赤羽）、本田
12	田間東道北遺跡（宿尻）							試掘					岩上、菊井和美、進籐、本田
13	西裏遺跡（谷中島）							試掘					岩上、飯田、本田、仲山英樹
14	塚崎遺跡（西浦）							試掘					岩上、柳瀬安栄、飯田、菅谷豊、片柳、須藤、津野仁
15	金山遺跡（東野田）												岩上、金田隆、阿部茂、柳瀬、飯田、菅谷、小田部信男、須籐、津野、仲山、（嘱託）松本昌久、（補助員）三沢京子
16	大境遺跡（六軒）												岩上、阿部、松本
受託費（千円）		19,191	29,725			60,814	41,107	100,999	139,342	198,770	183,361.63	156,554.84	



第１図　新４号国道路線と発掘調査遺跡（栃木県）位置図（1 / 200,000）

ターの設置に伴う組織改変も断行された。併せて、調査担当者の異動などもあり、一貫した体制のもとに調査が遂行されたとは言いがたい。但し当事業団としては、新４号国道開通の重要性を鑑みて、より多くの努力をこの事業に注いできたのもまた事実である。

これらに関する整理・報告書作成作業は、発掘調査の終了に引き続き平成４年度から本格的に開始している。但し、新４号国道関連の諸遺跡出土の遺構・遺物は、膨大な量にのぼる。平成４年度は金山遺跡Ⅰ（Ⅰ～Ⅲ区）・大境遺跡、平成５年度は金山遺跡Ⅱ（Ⅳ区）・田間東道北遺跡・塚崎遺跡・石神遺跡（拡幅工事高根沢町）、平成６年度は金山遺跡Ⅲ（Ⅴ区）・横倉宮ノ内遺跡、平成７年度は金山遺跡Ⅳ（Ⅵ区～Ⅷ区）・西裏遺跡・八幡根東遺跡・横倉遺跡を刊行した。平成８年度は、金山遺跡Ⅴ・金山遺跡Ⅵ・八幡根遺跡・横倉戸館遺跡（本書）を刊行予定である。

尚、本章以降の各遺跡名は、『小山市遺跡分布図・地名表』（小山市教育委員会 1978）に登録された遺跡名称を使用する。従って、建設省との受委託に関わる契約遺跡名とは異なっているわけである。しかし、地名表登録遺跡名は永久保存される遺跡基本台帳に記載されたものであることから、こちらを使用するのが望ましい。建設省には、その旨を了解していただいている。遺跡名称の変更は以下のとおりである。

六軒遺跡→大境遺跡、　東野田遺跡→金山遺跡、　西浦遺跡→塚崎遺跡、
谷中島遺跡→西裏遺跡、　宿尻遺跡→田間東道北遺跡、　横倉宮の内遺跡→横倉宮ノ内遺跡、
長谷遺跡→横倉遺跡、　中久喜遺跡→八幡根遺跡

発掘調査・本書の作成にあたり、建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所及び栃木県教育委員会の御指導を受けるとともに、長期間にわたり種々の御協力を戴いた。ここに記して謝意を表する次第である。

第２節　発掘調査の経過

（１）発掘調査の実施

試掘調査　1988（昭和63）年度に、国道路線内の他遺跡とともに、横倉戸館遺跡にも試掘調査を行った。この時は、20m間隔でグリッドを設定し、各グリッドごとに１ヶ所ずつの坪掘りを行った。この時には、遺構は確認されていない。

文化財保護法の手続き　埋蔵文化財発掘調査届出（57条）は、（財）栃木県文化振興事業団が調査主体となり、1990（平成２）年４月２日から1991（平成３）年３月31日までの期間に記録保存調査をおこなうことで「横倉戸館遺跡」として届出し、同年５月22日付け文化第151号で栃木県教育委員会教育長から文化庁長官へ進達した。文化庁側の文書番号は、同年10月２日付け委保第５の962号である。

調査の手順　発掘調査は、1990（平成２）年４月２日から1991（平成３）年３月31日まで実施した。調査は、南西に隣接する横倉宮ノ内遺跡に先だち、北に隣接する横倉遺跡とほぼ同時に行なっている。表土除去を行なったのちしばらく期間をあけて、10月にグリッド杭を設定し、11月から遺構確認と遺構調査を開始した。遺構実測図の作成は1991年１月までで終了し、さらに、出土遺物の水洗・注記作業などを行なった。

調査対象面積は5000㎡である。台地上の表土を重機で除去し、ローム層のすぐ上の漸移層（暗褐色土層）で遺構を確認した。遺構・遺物が確認されたのは、調査区の北半部（第５図に示した範囲）である。SI－02・SK－02とその付近の攪乱の埋土中などには旧石器時代の遺物も認められたが、今回の発掘調査区内では文化層は確認されていない。調査区の南半部は浅い谷の中に入る。ここにもトレンチを設けて表土を除去したが、遺構・遺物が見られなかったので、その時点で調査を終了した。

遺構は、竪穴建物跡（記号ＳＩ）と、土坑および埋甕（両方とも記号ＳＫ）に分け、それぞれ検出順に番号をつけた。原則として、竪穴建物跡は十文字にセクションベルトを残し、土坑は埋土を半截して調査を行った。

調査用グリッド　国土調査法に基づく平面直角座標（公共座標）第Ⅸ系に合わせて10m間隔の方眼を設定した。方眼杭の設定は測量業者に委託して行なった。

調査区北半部の各杭には第５図に示したように１から24までの通し番号を与えた。１・２杭は第５図の外になるが、３・４杭からそれぞれ北へ10mの所にある。各グリッドの名称は、そのグリッドの北西隅にある杭の番号を用いて「Ｇ９」または「９グリッド」のように表示する。調査区南半部にも10m方眼杭を設定したが、結局、遺構・遺物は検出されなかった。

記録の方法　遺構平面図は、10m間隔の方眼杭をもとにして、１m方眼の水糸を張って作成した。縮尺は竪穴建物跡と土坑を1/20、埋甕を1/10で作成した。必要と判断された遺物については、出土状況を平面図に記入した。

遺構平面図のほかに、必要に応じて土層断面図および遺構外形断面図を作成した。また必要と判断された遺物については、出土した標高も計測した。遺物の出土標高値と、その付近の遺構断面図の底面の高さから、遺構の底面・床面から遺物までの高さを整理作業時に計算して、遺物観察表の右端に記載した。調査区内の水準測量は、No.19杭の上面標高値（31.891m）を原点に使用した。この原点までの水準測量は、測量業者に委託して行なった。

整理作業　発掘調査資料の整理作業は、1996（平成８）年度に行なった。建設省と（財）栃木県文化振興事業団との間で締結した、新４号国道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託契約期間は1996年４月１日から1997年３月31日までである。このうち、横倉戸館遺跡の整理作業は、八幡根遺跡の整理作業に引き続いて、主に11月から実施した。

（２）発掘調査の組織

発掘調査（1990（平成２）年度）

主体者　財団法人栃木県文化振興事業団

理事長 小菅　充　　副理事長　荒井　守　　専務理事　大塚弘司

常務理事　大塚土四・岡田喜三・野中ハツエ

事務局長　金枝紀夫　　文化事業部長兼経理課長　樋山勝也

文化財調査部長兼調査第二課長　竹澤　謙

調査第二課　主査　岩上照朗、主事　赤羽孝浩

整理作業（1996（平成８）年度）

主体者　財団法人栃木県文化振興事業団

（本部）理事長　石川　格　　副理事長兼専務理事　丸橋武男　　常務理事　大島幸久・西川　淨

事務局長　関田紘一

（埋蔵文化財センター）

常務理事兼埋蔵文化財センター所長　大島幸久　　管理部長　斎藤　進

調査部長兼資料整理課長　大金宣亮

調査第二課長　岩淵一夫、技師　内山敏行・亀田幸久

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

横倉戸館遺跡は、栃木県小山市大字横倉字戸館に所在する。今回報告する調査区は字戸館795,796,797番地にあたる。栃木県域の南端近くに所在する小山市と、茨城県域の西端に近い結城市との県境を南北方向に流れる江川が開析した谷に面し、この谷の西側（小山市側）の台地上にある。江川は、小山市周辺では西仁連川（にしにれがわ）とも呼ばれている。

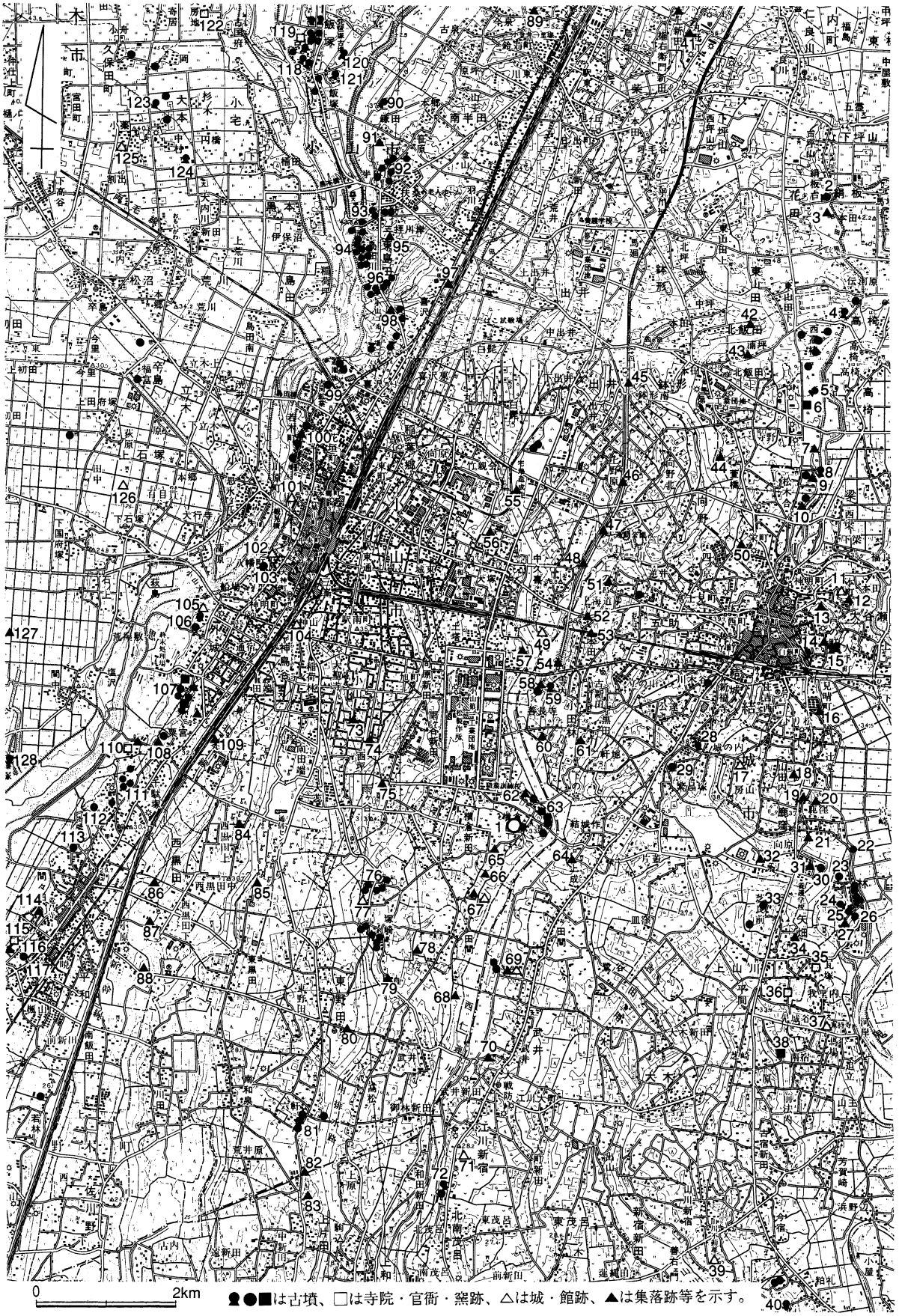
この台地は、関東平野の北部を東方（太平洋側）へ流れる田川・鬼怒川と、南方（東京湾側）へ流れる思川・旧利根川水系の間に広がる。ただし、利根川の流路は、現在は鬼怒川と合流して太平洋側へ流れるように、変更されている。横倉戸館遺跡のある台地は、栃木県域側では「小山台地」と呼ばれ、宝木段丘面に属する。また、対岸の茨城県側では「結城台地」と呼ばれ、鬼怒川西岸にひろがる下総台地の最北端部にあたる。小山市・結城市は、中央部の小山台地と結城台地上に市街地が立地し、東を鬼怒川低地、西を思川低地ではさまれた平坦な地形である。関東平野の北縁まではまだ距離があるので、丘陵や山地は北方の栃木市・宇都宮市付近まで見られない。

横倉戸館遺跡の東に接する江川の開析谷はここから上流12km付近から始まる。本遺跡付近では開析谷の谷底から台地上面最高部までの比高差は約７m である。谷底平野の幅は約300mで、「ヤト田」と呼ばれる谷水田に利用されている。この谷の下流は、南へ向かって流れ、下総台地を開析して茨城県岩井市・水海道市にまたがる菅生沼で飯沼川へ合流し、千葉県野田市で現在の利根川に入る。本来はこの付近で鬼怒川に合流していたのだろう。

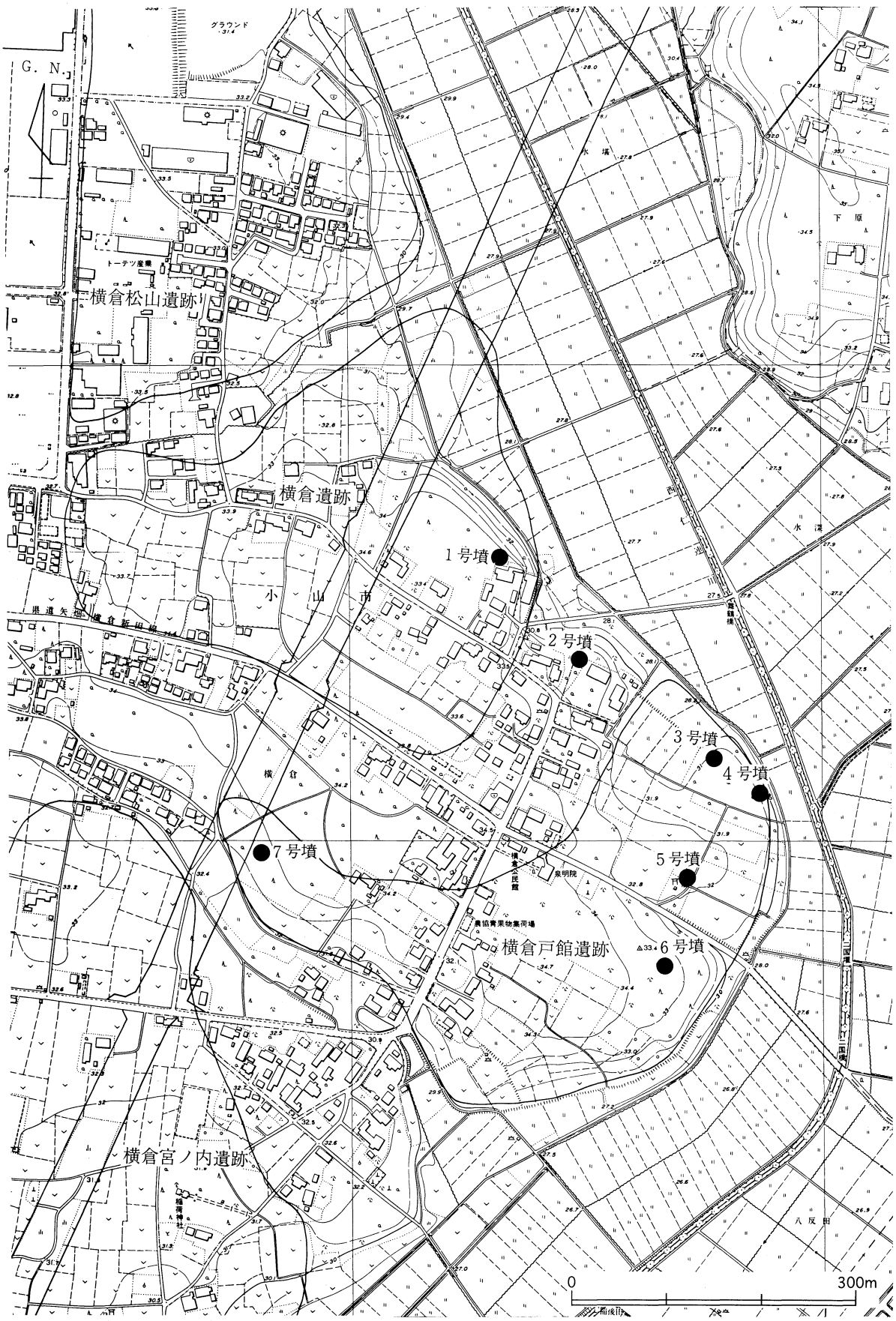
横倉戸館遺跡のある地点では、舌状に伸びる台地が東側の江川（西仁連川）の谷へ突き出している。台地の南北幅は約500mである。台地上面の標高は30～34mでおおむね平坦で、台地の周辺部が谷へ向かって傾斜する。遺跡のすぐ南側には、江川の開析谷から西へ、幅40～50mの小規模な浅い小支谷が入る。今回の発掘調査区はこの小支谷に面する南斜面で、横倉戸館遺跡の中では西に外れた位置である。

第２図　横倉戸館遺跡と周辺の遺跡

1 横倉戸館遺跡
2 別処山古墳
3 絹板大六天遺跡
4 絹４号墳
5 梁3号墳
6 梁13号墳
7 寺野東遺跡・梁古墳群
8 松木合浅間塚古墳
9 松木合A遺跡
10 柳下A遺跡
11 結城城跡
12 本町遺跡
13 鷹部屋遺跡
14 曽我殿台遺跡
15 曽我殿台古墳群
16 観音台(見晴町)遺跡
17 城の内館跡
18 峯崎遺跡
19 西原遺跡
20 東浦遺跡
21 坂の上遺跡
22 保戸塚古墳
23 林愛宕塚古墳
24 古山八幡塚古墳
25 上山川瓢箪塚古墳
26 備中塚古墳
27 才光寺遺跡
28 天神山塚古墳
29 繁昌塚古墳
30 富士見浅間塚古墳
31 向原遺跡
32 沼尻向遺跡
33 須久保塚古墳
34 北坪遺跡
35 結城八幡瓦窯跡
36 結城廃寺
37 東持寺館跡
38 上山川愛宕山古墳
39 山川綾戸城跡
40 粕礼鷺山古墳
41 柴工業団地内遺跡
42 飯田浦遺跡
43 小山添遺跡
44 西ノ台遺跡
45 本郷前(鷹の巣前)遺跡
46 向野原(上野原学園北)遺跡
47 八幡根東遺跡
48 八幡根遺跡
49 中久喜城跡
50 四ッ京遺跡
51 上ノ宮遺跡
52 上海道遺跡
53 本田北遺跡
54 本田遺跡
55 西山遺跡
56 溜ノ台遺跡
57 下犬塚遺跡
58 小田林遺跡・小田林古墳群
59 神明塚古墳
60 善長寺遺跡
61 塚越遺跡
62 横倉遺跡
63 横倉戸館古墳群
64 中曽根遺跡
65 横倉宮ノ内遺跡
66 横倉本郷遺跡
67 田間東道北遺跡・宿尻館跡
68 田間前畑遺跡
69 権現遺跡・三蔵神社館跡
70 香取前遺跡
71 水書氏屋敷跡
72 北茂呂稲荷塚古墳
73 萩山遺跡
74 雨ケ谷中島遺跡
75 雨ヶ谷宮遺跡
76 塚崎古墳群
77 塚田館跡
78 西裏遺跡
79 塚崎遺跡
80 金山遺跡
81 六軒古墳群
82 大境遺跡
83 上片田B遺跡
84 西黒田遺跡
85 亀屋遺跡
86 五料遺跡
87 治松遺跡
88 六本木遺跡
89 北台遺跡
90 本郷古墳
91 成沢遺跡
92 北上野・成沢古墳群
93 大日山・佐敷山古墳群
94 東島田古墳群
95 東原遺跡
96 喜沢古墳群・桑57号墳
97 喜沢海道間遺跡
98 日光道西遺跡
99 稲葉郷古墳群
100 烏久保遺跡
101 小山城跡
102 長福城跡
103 長福城跡古墳
104 神鳥谷曲輪
105 鷲城跡
106 外城古墳群
107 宮内古墳群・宮内北遺跡
108 宮内遺跡
109 宮内東遺跡
110 千駄塚浅間遺跡
111 千駄塚浅間山古墳
112 牧ノ内古墳群
113 間々田八幡古墳群
114 乙女不動原北浦遺跡
115 乙女不動原瓦窯
116 乙女不動原亀田遺跡
117 大塚山古墳
118 飯塚古墳群
119 飯塚埴輪窯跡
120 琵琶塚古墳
121 摩利支天塚古墳
122 下野国府跡
123 鳴虫堂古墳
124 篠塚稲荷古墳
125 御城跡
126 石塚館跡
127 井岡遺跡
128 藤塚古墳



第２図　横倉戸館遺跡と周辺の遺跡（1 / 80,000）



第３図　横倉戸館遺跡　周辺地形図（1 / 6,000）

第２節　歴史的環境

横倉戸館遺跡は、旧石器時代～古墳時代と平安時代・中世・近世にわたる遺跡である。『小山市遺跡分布図・地名表』（小山市教育委員会1978）によると、横倉戸館遺跡は市遺跡番号349番、規模500×400mの散布地で、縄文後期・弥生後期・古墳前期・古墳後期・中世・近世の各時期の遺物が採集されている。また、『小山市史　史料編　原始・古代』では「戸館遺跡」として紹介し、「縄文時代後期の加曽利Ｂ式土器の破片多数と磨石、弥生時代後期の二軒屋式土器片、古墳時代前期の五領式の器台形土器・甕形土器・壺形土器など刷毛目痕を有するもの多数、そして古墳時代後期の鬼高式土器の破片、さらに中世、近世の陶磁器類も出土している」と述べている（竹澤1981, p.560）。

今回報告する発掘調査の結果、これらに加えて、旧石器時代、縄文時代早期の野島式期と後期の称名寺式・堀之内１式期、古墳時代中期、平安時代前半期の遺物が確認された。

横倉戸館遺跡に集落が営まれた各時代について、周辺の歴史的環境を解説する（第２図）。

今回調査した竪穴建物が横倉戸館遺跡に作られた古墳時代中期には、ここから東へ５kmの結城市林・上山川地域（第２図23・26・30）、西へ８kmの小山市寒川地域、北北西へ11kmの小山市飯塚周辺（121）に大形の前方後円墳や円墳がある。寒川地域と林・上山川地域の中間に横倉戸館遺跡が所在し、この付近には時期不明の円墳がいくつか見られる（63）。

奈良時代・平安時代には、下都賀郡の国分寺周辺地域に下野国府（122）・国分寺、横倉戸館遺跡から北北東へ14kmの薬師寺地域に下野国河内郡家と下野薬師寺、間々田地域に下野国寒川郡家（110）、下総国結城郡の上山川地域に峯崎遺跡（18）と結城廃寺（36）がみられ、それぞれが各郡の中心地として続いている。中世にはそれぞれ小山氏と結城氏の本拠地であったことは良く知られている。横倉戸館遺跡は、下野・下総両国の境付近の開析谷に面した集落遺跡である。

次に、各時代の遺跡を紹介する。

旧石器時代

横倉戸館遺跡でもこの時代の遺物が認められているが、器種や出土層位は不明である。

八幡根東遺跡（47）では浅間板鼻軽石付近で９箇所のユニットからナイフ形石器・彫器・削器が出土した（亀田編1996）。本郷前遺跡（県調査区）（45）では、ソフトローム中のブロック２ヵ所からナイフ形石器・尖頭器・掻器・彫器が出土している（川原他1985）。周辺では、本郷前遺跡の別地点や、西ノ台遺跡（44）で尖頭器が採集されている（小山市史編さん委員会1981, pp.520,546）。寺野東遺跡（7）では３枚の文化層が確認された。赤城－鹿沼軽石層のすぐ上には剥片など７点があり、浅間板鼻軽石の上下の文化層からも、多数のナイフ形石器などが検出されている（岩上他1994a）。

小山市域南部では、塚崎遺跡（79）でＡＴ層の上下からナイフ形石器を伴う文化層が検出された（岩上他1994c）。金山遺跡（80）でも、小型化したナイフ形石器を伴うソフトローム上位のブロックと礫群、田原ローム中に４箇所、宝木ローム中のＡＴ層より上で３箇所・下で２箇所と、複数時期の遺構・遺物が調査され、層位不明の角錐状石器も見られる（岩上他1991）。出土層位がわからない資料としては、横倉遺跡（62）で石核と剥片（小筆編1995）、横倉宮ノ内遺跡（65）でナイフ形石器と彫器（岩上他1995a）、田間東道北遺跡（67）でナイフ形石器と削器（岩上他1994b）が確認され、宮内遺跡（108）でナイフ形石器・尖頭器・削器などが採集

されている（小山市史編さん委員会1981, pp.257-262）。結城市域では才光寺遺跡（27）で尖頭器が知られている（鶴見・安田1980, p.37）。

縄文時代

〔早期〕横倉戸館遺跡では野島式期の土器が出土している。ただし、今回の調査区ではこの時期の遺構は検出されていない。

六本木遺跡（88）で撚糸文期の住居跡が調査され、撚糸文系土器が横倉遺跡（62）や金山遺跡（80）でも出土している。条痕文系土器は、北坪（34）・八幡根（48）・小田林（58）・横倉（62）・権現（69）・千駄塚浅間遺跡（110）で知られ、乙女不動原北浦遺跡（114）でこの時期の炉穴が調査されている。

〔前期〕関山式期の住居が乙女不動原北浦遺跡（114）で２棟知られる。黒浜式期には横倉宮ノ内（65）・田間東道北（67）・萩山（73）・塚崎（79）の各遺跡で住居跡が調査され、中曾根（64）・香取前（70）・雨ヶ谷宮（75）・千駄塚浅間（110）・乙女不動原北浦Ｂ地点（114）の各遺跡でも遺物が知られる。

〔中期〕寺野東遺跡（7）は大規模集落で、中期の住居跡70棟以上と、700基以上の土坑が調査された（岩上他1994a）。絹板大六天遺跡（3）では阿玉台～加曽利ＥⅠ式期の袋状土坑と住居跡、溜ノ台遺跡（56）で中期後半の土坑、雨ヶ谷宮遺跡（75）で中～後期の竪穴住居跡・袋状土坑・土坑群、乙女不動原北浦遺跡Ｃ地点（114）で住居跡２棟が調査されている。この他にも遺物が採集された遺跡は多い。

〔後期・晩期〕横倉戸館遺跡では、今回の調査区で称名寺式期の埋甕が２基調査され、他に堀之内１式期の遺物がある。調査区よりも東方では加曽利Ｂ式土器も採集されている（竹澤1981）。

江川の流域では飯田浦（42）・小山添（43）・横倉（62）の各遺跡で後期前半の遺物が採集されている。周辺地域では、溜ノ台遺跡（56）で後期初頭の住居跡が１棟知られる（竹澤他1990）。寺野東遺跡（7）では後期前半の水場遺構１箇所と住居跡約30棟が調査され、後期後半～晩期には外径165ｍの環状盛土遺構が形成されて大量の遺物が出土している（岩上他1994a）。このほかに小山市域では乙女不動原北浦遺跡で後期安行式期～晩期の住居と、晩期前半を中心とした土壙墓群、井岡遺跡（125）では後期中葉～晩期中葉の土壙墓などが調査されている。結城市域では本町（12）・鷹部屋（13）・東浦（20）遺跡で後期前半の遺物が知られ、後期後半から晩期では松木合Ａ（9）・坂の上（21）などの遺跡が知られている（鶴見・安田1980）。

弥生時代

横倉戸館遺跡でも弥生後期の土器が採集されている（竹澤1981）。ただし、今回の発掘調査区からは出土していない。

前～中期の遺跡は少ない。自治医大周辺地区の発掘調査で、小規模な遺跡の状況が知られてきた。柴工業団地内Ｂ地区（41）では、中期の住居２棟と、前期後葉～中期前葉の再葬墓が６基以上知られている（中山他1981）。

後期になっても、集落数や、一集落あたりの建物数も少ない。柴工業団地内遺跡Ｂ地区（41）で２棟、八幡根東遺跡（47）で２棟、金山遺跡（80）で１棟、乙女不動原北浦遺跡Ｂ地点（114）で１棟、その南西の乙女不動原亀田遺跡で２棟が調査されている。また、田間東道北遺跡（67）では集石を伴う後期前半の長方形土坑１基と円形土坑１基がある（岩上他1994b）。江川の谷に面する遺跡としては、この他に八幡根遺跡（48, 内山他1997）、権現遺跡（69）、香取前遺跡（70）で遺物が知られる（鶴見・安田1980）。

古墳時代

〔前期〕横倉戸館遺跡では古墳時代前期の遺構が確認されていないが、遺構外出土遺物の中に前期の遺物が認められている。前期の集落は、寺野東（7）・柴工業団地内Ａ地区（41）・西山（55）・下犬塚（57）・善長寺（60）・西裏（78）・塚崎（79）・金山（80）の各遺跡が調査されている。結城市域では、四ツ京遺跡（50）で遺物が知られる（今井1980）。寺野東遺跡は大規模集落である（岩上他1994a）。下犬塚遺跡では方形区画溝の中に竪穴建物跡が群在し（福田他1992）、「豪族居館」とする意見もある。西裏遺跡（斎藤編1996）では小銅鐸が発見されている。

前期古墳は横倉戸館遺跡の付近には確認されていない。ここから北東へ14kmの南河内町三王山古墳群に前方後方墳の三王山南塚１・２号墳と方墳の朝日観音１号墳がある（南河内町史編さん委員会1992）。また、溜ノ台（56）・治松（87）・金山の各遺跡と牧ノ内古墳群（112）では、古墳前期のいわゆる方形周溝墓が調査されている。

〔中期〕和泉式期～鬼高式期初頭にあたる中期の集落は、横倉戸館遺跡の他に、柴工業団地内Ａ地区（41）・向野原（46）・西山（55）・八幡根（48）・本田（54）・溜ノ台（56）・善長寺（60）・田間東道北（67）・萩山（73）・西裏（78）・塚崎（79）・金山（80）・亀屋（85）・五料（86）・成沢（91）・喜沢海道間（97）・乙女不動原北浦（114）・乙女不動原亀田（116）の各遺跡が調査されている。成沢遺跡では辺長約57mの方形区画溝を伴う中期中～後葉の竪穴建物群が調査され、一般に「豪族居館」とよばれている（大金他1993）。

また、江川流域には手工業生産遺跡が集中している。石製模造品製作遺跡は特に多く、向野原・西山・八幡根・善長寺・田間東道北・西裏・塚崎・金山（Ⅳ区・Ⅹ区）の各遺跡が調査されている。未発掘の田間前畑遺跡（68）でも滑石製剣形品や臼玉の未製品が多く採集できる。江川流域から離れた亀屋遺跡（85）では中期前半に製作している。江川流域では中期後半に多く、滑石を使う典型的な製品の生産はTK-47型式期まで続く。古墳時代中期の鍛冶工房跡は西裏遺跡（斎藤編1996）、鍛冶関連遺物は喜沢海道間遺跡（97）で知られている。

中期の有力古墳は、横倉戸館遺跡から東へ５kmの林・上山川地区に多い。向原富士見浅間塚古墳（30）は箱式石棺と木棺に剣・蕨手刀子・滑石製刀子などを副葬し、径46mの円墳の可能性がある（鶴見・竹内1995, pp.41-42,82-83）。林愛宕塚古墳（23）は墳長40mの前方後円墳で、中期末葉（TK-23～TK-47型式並行期）の鉄鏃等を出土した（今井1980, pp.116-120）。備中塚古墳（26）は墳径73mの大形円墳である。第２図の外になるが、横倉戸館遺跡から西８km（127の西隣）の寒川古墳群に、中期前～中葉の鶴巻山古墳（墳径60mの円墳）と中期後葉の茶臼塚古墳（墳長77mの前方後円墳）があり、西方７kmの間々田大塚山古墳（116, 径30m）も中期後葉の可能性がある（小山市史編さん委員会1981）。また、小山市飯塚地区では中期末に墳長120mの摩利支天塚古墳（121）が出現する。

中期後半の初期群集墳では梁古墳群（7）があり、松木合浅間塚古墳（8,墳長35m）も一連の古墳群に含まれる。大日山６号墳（93）と、喜沢古墳群（96）の桑57号墳とが、穴窯焼成のＢ種ヨコハケの埴輪を伴う。横倉戸館遺跡で今回報告する地区のすぐ東にある横倉戸館古墳群（63）にも、中期古墳を含む可能性がある。石室に用いたと思われる石が全く発見されていないことと、戸館４号墳の一部が崩された時に直刀数振とともに固まって粘土が発見されたことから、中期の可能性が指摘されている（森田1981）。

〔後期・終末期〕後期・終末期の集落は、八幡根東（47）・八幡根（48）・田間東道北（67）・金山（80）・善長寺（60）の各遺跡が調査されている。八幡根遺跡では、７世紀前～中葉に土師器を製作している（内山他

1997)。

古墳時代後期の江川流域には、西山（55）・小田林（58）・横倉戸館（63）・塚崎（79）・北茂呂（72）の各古墳群がある。大形古墳はなく、中小の前方後円墳としては江川対岸の小田林神明塚古墳（59,墳長22m）と北茂呂稲荷塚古墳（72,墳長40m）がある（今井1980)。横倉戸館遺跡の今回の調査区の東にある横倉戸館古墳群には墳径20～37mの円墳が７基ある。ただし、上に述べたように、横倉戸館古墳群は中期古墳を含む可能性もある。田川西岸では後期の小形前方後円墳が多く、別処山古墳（2）・絹４号墳（4,墳長30m）・梁３号墳（5,墳長41m以上,鈴木1993）がある。

後期古墳は思川流域の方が密度が高く、飯塚（118)、成沢・北上野（92)、佐敷山・大日山（93)、東島田（94）・稲葉郷（99）・外城（106）・宮内（108）・牧ノ内（112）・六本木（88）・間々田八幡（113）の各古墳群がある。外城古墳群の北方にある長福城跡（102）のSD-1は埴輪を伴う推定径36mのやや大きなものである（岩上他1995b)。牧ノ内古墳群は終末期まで安定して継続する。

後期の前方後円墳では、後期初頭の琵琶塚古墳（120,墳長123m）の北方に下毛野地域の後～終末期の最高首長墳が後続して作られる。奈良時代に結城廃寺を造る林・上山川地区では、古山八幡塚古墳（24）や上山川瓢箪塚古墳（25,墳長48m）がある。古山八幡塚古墳は現状から判断すると墳長75m以上の規模と考えられ、結城郡域では最大の後期古墳である。

終末期の方墳は田川流域に多い。梁13号墳（6,辺長40m以上,鈴木1993）が大きく、上山川愛宕山古墳（38,辺長20m,今井1980）も方墳の可能性がある。寺野東遺跡では奈良時代まで方形墓が続く。思川流域では牧ノ内古墳群のように大半が円墳で、宮内５号墳（108,辺長35m,鈴木1994）のようにやや大きな方墳もあるが、千駄塚浅間山（111,径70m）のような円墳の方が大きい。このような終末期古墳の形態差は上流の壬生・上三川地域でも同様で、田川流域は方墳が一定数あり（上三川町多功大塚山古墳・西赤堀遺跡など)、思川流域では円墳が多い（国分寺丸塚古墳・壬生町藤井古墳群など)。東関東の千葉・茨城県域に終末期方墳が多いことや、田川が東関東の鬼怒川水系、思川が西関東の旧利根川水系であることと係わるのだろう。

奈良時代・平安時代

横倉戸館遺跡の位置は、下野国寒川郡の付近にあたると考えられる。今回の調査区では平安時代前半の土師器が少量出土しているだけで、奈良時代・平安時代の遺構は認められていない。東北方の小山市高椅地区（7）周辺が下総国結城郡高橋郷、東方の結城廃寺（36）周辺が結城郡結城郷、西方の小山市牧ノ内古墳群（112）周辺が下野国寒川郡真木郷の中心にあたると考えられている。

集落遺跡は、寺野東（7）・柴工業団地内Ａ地区（41）・本郷前（県調査区）（45）・八幡根東（47）・八幡根（48）・西山（55）・溜ノ台（56）・金山（80）・宮内東（109）遺跡などが調査されている。特に金山遺跡（津野1993-1997）は大規模である。寺野東遺跡では８～９世紀代の竪穴建物91棟が調査され、方形周溝遺構や灰釉短頸壺を用いた火葬墓を含む墓域も伴う（岩上他1994a)。

千駄塚浅間遺跡（110）は下野国寒川郡家の可能性が指摘され、峯崎遺跡（18）は下総国結城郡家に関係する遺跡か、あるいは寺院とする意見もある。下野国府（122）は横倉戸館遺跡から北西へ12kmの距離にある。

寺院では結城廃寺（36）が近く、12～13km上流には下野薬師寺・下野国分寺・国分尼寺がある。西山遺跡（55）では遺跡の一部で８世紀中～後葉の竪穴建物跡４棟を調査し、８世紀中葉の２棟から「寺」の墨書土器が合計９点出土している（秋山1988)。八幡根東遺跡（47）では竪穴建物跡から瓦塔が出土している（亀田編1996)。

古代の道路遺構としては、北台遺跡（89）で東山道が調査されている。下野国府から下野薬師寺の方向へ向かう経路である。

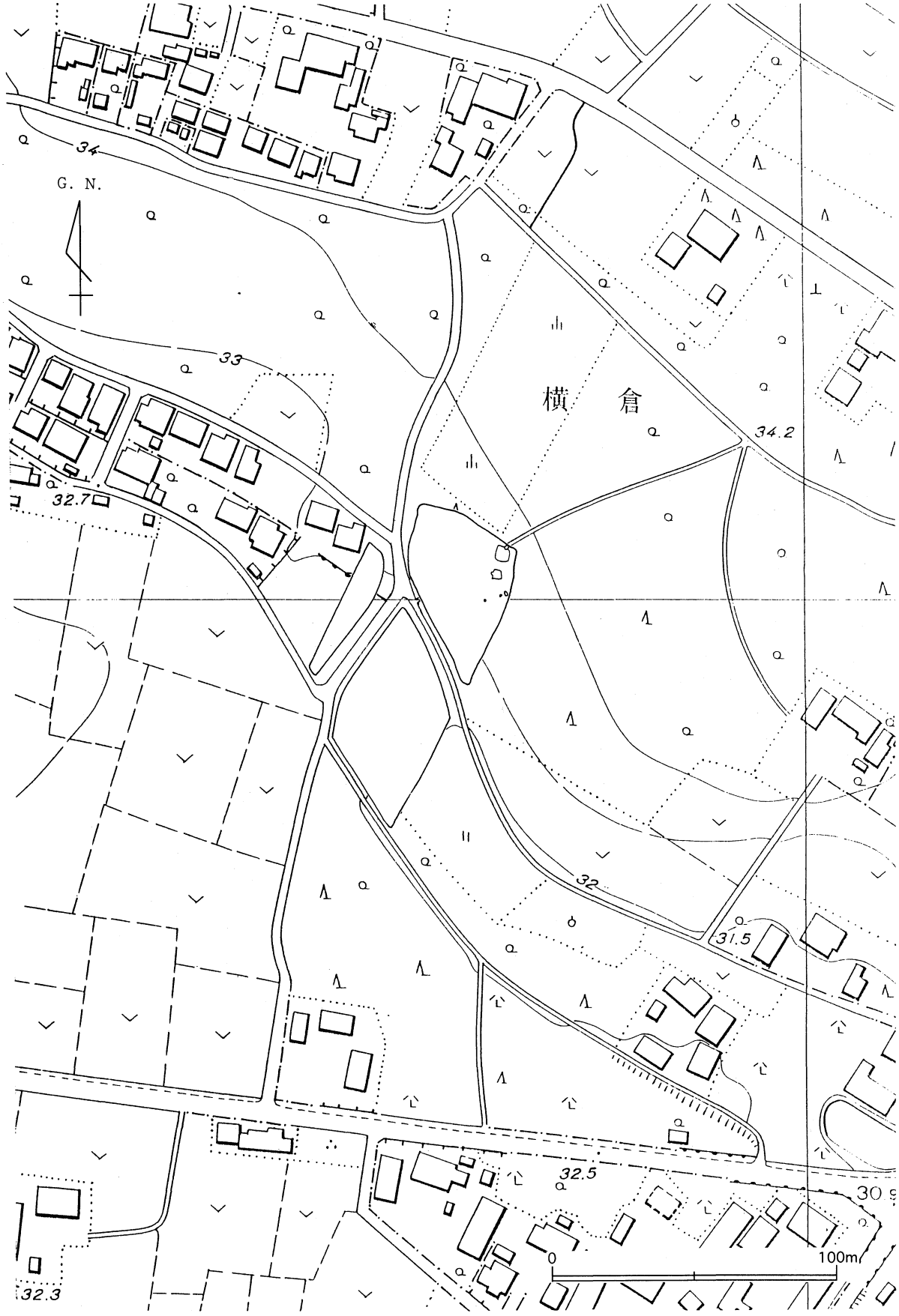
手工業生産遺跡は、乙女不動原瓦窯跡（115）が下野薬師寺、結城八幡瓦窯跡（35）が結城廃寺に供給した奈良時代の瓦専業窯である。須恵器は、奈良時代では南東約30kmにある茨城県新治村の窯跡群からこの地域に製品が多く供給される。平安時代になると横倉戸館遺跡から真南へ12kmの地点に三和窯跡群が成立し（阿久津1992)、この地域の須恵器の主体は新治窯製品から三和窯製品に転換する。八幡根東遺跡（47）では９世紀代に土師器を製作している（亀田編1996)。平安時代の製鉄関連遺跡には金山（80）・大境（82）の両遺跡がある。

中世

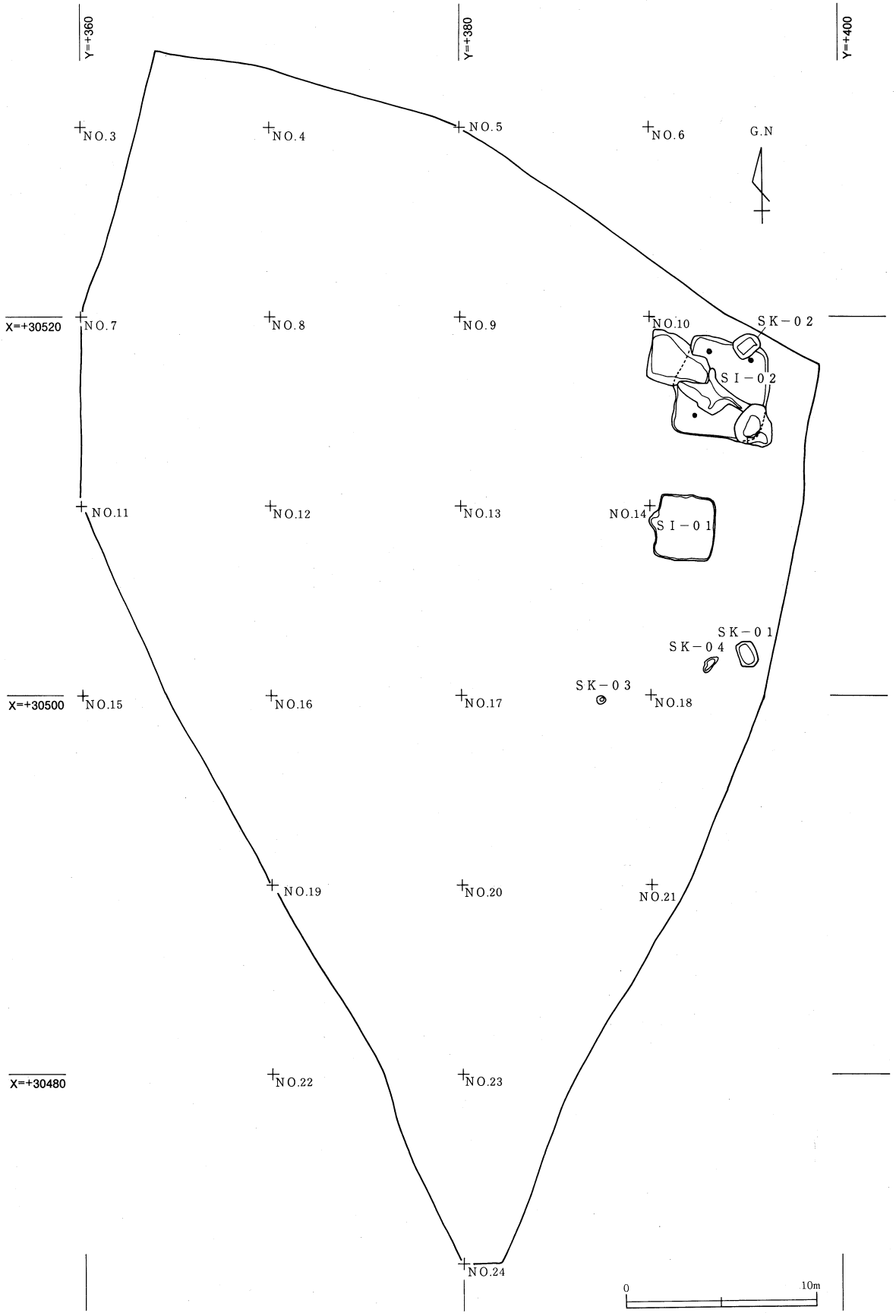
横倉戸館遺跡ではこの時期の遺構は確認されていないが、今回の調査で遺構外から在地産土器が少量出土している。北に横倉遺跡（62)、南に横倉宮ノ内遺跡（65）が隣接している。横倉遺跡では、掘立柱建物跡と調査区外の堀・土塁から、館跡とそれに隣接する集落の可能性が指摘され、13～16世紀の遺物が少量みられる（小筆編1995)。横倉宮ノ内遺跡は14～15世紀の屋敷地と16世紀の大規模共同墓地（土壙墓群）と考えられている（岩上他1995a)。さらに南方の田間東道北遺跡（67）では館（宿尻館）の溝の外に14～15世紀の土壙墓群が伴う（岩上他1994b)。

小山市域には、小山氏関連の中世城郭が多く見られる。鎌倉時代の小山氏の館は神鳥谷曲輪（104）にある。鷲城（105）が14世紀以前には小山氏の本城で、結城氏の援助で再興した小山氏は小山城（祇園城）（101）を本城とした。長福城（102,岩上他1995b）は、両城をつなぐ城と考えられている。中久喜城（49）は小山政光の築城と伝え、1381年の小山義政の乱では鷲城の支城であり、戦国期には結城氏が居城した。塚田館（77）は小山長村の三男小山宗光が居城し、塚崎と田間を領して塚田氏と称したという。

江川（西仁連川）の対岸の下総側では、結城氏関連の遺跡が知られる。城の内館（17）が結城氏の館で、結城城（11）が本城とされる。東持寺館（37）は、結城氏の一族である山河氏の鎌倉時代の居館であり、古墳時代の林古墳群や古代の結城廃寺（36）に隣接している。山河氏の戦国時代の居城が山川綾戸城（39）である。



第４図　横倉戸館遺跡　調査区配置図（1 / 2,000）



第５図　横倉戸館遺跡　北半部全体図（1 / 300）

第３章　発掘調査された遺構と遺物

第１節　旧石器時代の遺物

横倉戸館遺跡においては、旧石器時代の遺構や文化層は調査されていない。しかし、他時代の遺構や、調査区内から出土した遺物の中に旧石器時代と考えられる遺物が認められたので、ここで報告する。

遺物の分布

ここで報告する７点の遺物（第６図）のうち、採集・出土位置が分かる遺物は６点である。この内訳は、珪質頁岩および流紋岩製の５～７が10グリッド内（SI－02とSK－02の埋土中）から出土し、黒曜石製の１・３がそのすぐ西に隣接する９グリッドから出土している。この他に、３グリッドから黒曜石製の２が出土している。なお、グリッドの位置は第５図のとおりである。

出土遺物（第６図、写真図版11）

１～３は黒曜石製。１・３は微細な剥離痕を持つ剥片で、２は石核である。

１は使用痕のある剥片。下縁部全体の両面に微細な剥離痕が連続して明瞭に見られ、使用痕と考えられる。背面上端の角部を細かく剥離していて、下縁を使用するために棟部の角を落とした可能性がある。この剥片を取るよりも前に石核を調整する剥離が、背面の右側方向から連続して見られるので、この剥片は打面再生剥片を使用したものかもしれない。右側縁には背面側から急角度の剥離が見られるが、これは石核の段階で加えられた剥離と判断した。背面の左下にはやや風化した面を残す。打面も、やや風化した面の可能性がある。高原山産の黒曜石で、顆粒状の結晶がやや多く、あまり質は良くない。長さ3.0cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm、重さ8.93g。９グリッドから出土。

２は石核。左図の面に自然面を残し、最後の剥離はこの面に、図の上下方向から行われている。これ以上の剥片を取ることが難しいほど小形で、残核と考えられる。１に比べると良質でやや透明感のある黒曜石で、信州産の可能性もある。長さ2.9cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm、重さ5.09g。３グリッドから出土。

３は微細な剥離痕のある縦長剥片。左側縁全体の両面と右側縁中央部の腹面に微細な剥離痕があり、使用痕跡の可能性もある。２枚の明瞭な礫表面を背面に残す。石核を剥離した面を打面として、２～３回目の加撃で剥離した剥片と考えられる。不均質な部分が多数の細い筋状に入る乳白色気味の黒曜石で、あまり質は良くない。信州産と考えられる。長さ3.2cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ2.64g。９グリッドから出土。

４は横長剥片。打面や背面には剥離以前の石核に加えられた剥離も多いので、打面再生剥片の可能性がある。下縁の右寄りに微細な剥離痕が認められ、使用痕であろうか。わずかに紫灰色気味の流紋岩で、比較的緻密で良質である。長さ3.0cm、幅5.2cm、厚さ1.2cm、重さ8.82g。出土したグリッド名ではなくて「90.07.31」という日付の注記があり、表土除去作業等の際に出土したものと思われる。

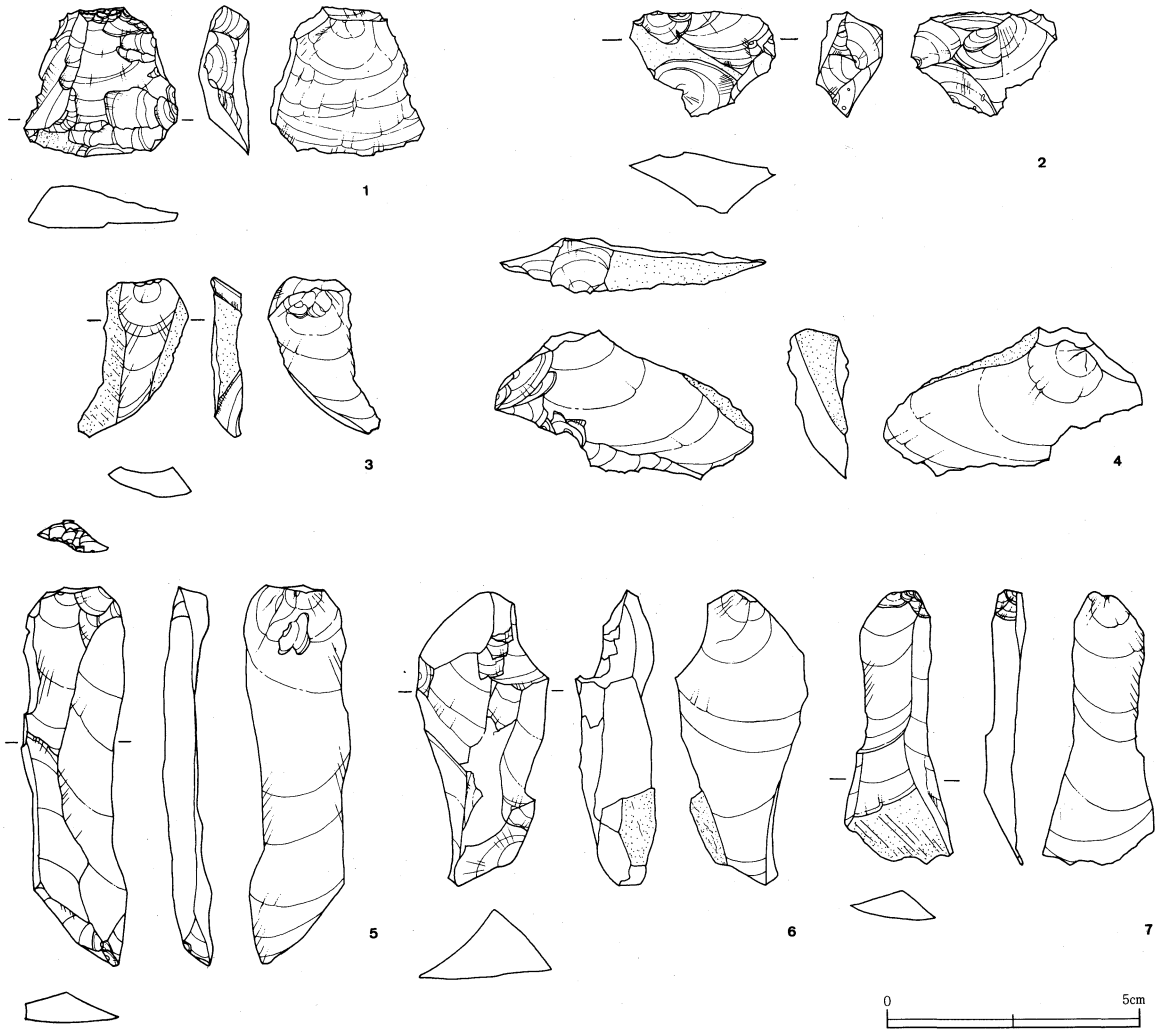
５～７は、10グリッドの北半部にある後世の遺構から出土した縦長剥片である。５・６は流紋岩製、７は珪質頁岩製。

５は使用痕のある縦長剥片。剥離前にやや細かい打面調整を施す。両側縁に微細な剥離痕が連続して明瞭に見られ、使用痕と考えられる。この痕跡は、右側縁全体の両面と左側縁上半の背面にやや多い。黄白色・緻密で一見すると珪質頁岩に似るが、斑晶鉱物を含むので流紋岩と判断する。長さ7.7cm、幅1.9cm、厚さ0.8cm、重さ11.8g。SI－02（古墳時代の竪穴建物跡）から出土。

６は厚手の縦長剥片。背面右半と左半の剥離面の境界が高い稜をなし、断面三角形になる。石核の角部を

除去した際の角付き剥片の可能性がある。流紋岩（または珪質凝灰岩）で、キメは細かいがやや軟らかいので、背面に剥落・破損が見られる。長さ6.0cm、幅2.6cm、厚さ1.4cm、重さ15.2g。SI－02（古墳時代の竪穴建物跡）から出土。

７は縦長剥片。剥離前にやや細かい打面調整を施す。打面は除去していない。背面下縁に自然面を残す。両縁に微細な剥離痕が認められ、使用痕の可能性がある。珪質頁岩であるが、比較的軟らかく、あまり良質ではない。長さ5.5cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm、重さ4.2g。SK－02（近世の墓壙）から出土した。



第６図　横倉戸館遺跡　旧石器

第２節　縄文時代の遺構と遺物

（１）埋甕

本遺跡からは２基の埋甕が検出された（SK－03・04）。時期はいずれも後期前葉のものと思われる。

ＳＫ－０３（第７図、写真図版１～２・12）

縄文時代後期の埋甕で、土坑内に深鉢形土器を１個だけ埋設したものである。

遺構の位置は、17グリッドの北端である。東北東へ６ｍのところに、同じく縄文時代後期前半の埋甕であるSK－04が所在する。今回の調査区内では、この２基の埋甕の他には縄文時代の遺構はない。SK－03と重複する遺構はない。遺構確認面は、ソフトローム層のすぐ上を覆うローム漸移層（暗褐色土層）である。

掘形の平面形はやや整わない円形で、土器に沿った形状に掘ったものと考えられる。不注意により図化前に断ち割ってしまったので、南半分の掘形は推定線で図示した。南北よりも東西に少し長かった可能性があるが、確実ではない。遺構確認面での規模は長径44cm、短径の推定値38cmである。底部付近では平面がやや隅丸方形気味になり、底面での規模は長径10cm、短径の推定値が９～10cmである。遺構確認面から掘形底面までの深さの残存値は14cmである。土器の上部の大半を失うので、本来はもっと深かったはずである。

掘形の断面形は逆台形で、壁面の傾斜は下部が急で、東西両側で約45°、北側で約80°である。上部は少し緩くなり、35°前後の傾斜になる。掘形底面はほぼ水平で、底面中央の標高は32.38mである。

遺物出土状況　深鉢が単独で埋められている。他の遺物は認められなかった。土器は掘形の底面に正立して据えた状態で胴部下半の全周が残っている。胴部上半は耕作などで撤去されたらしく、破片が数点しかない。口縁部の少し下の破片が１片だけあるが、口縁部は残っていない。

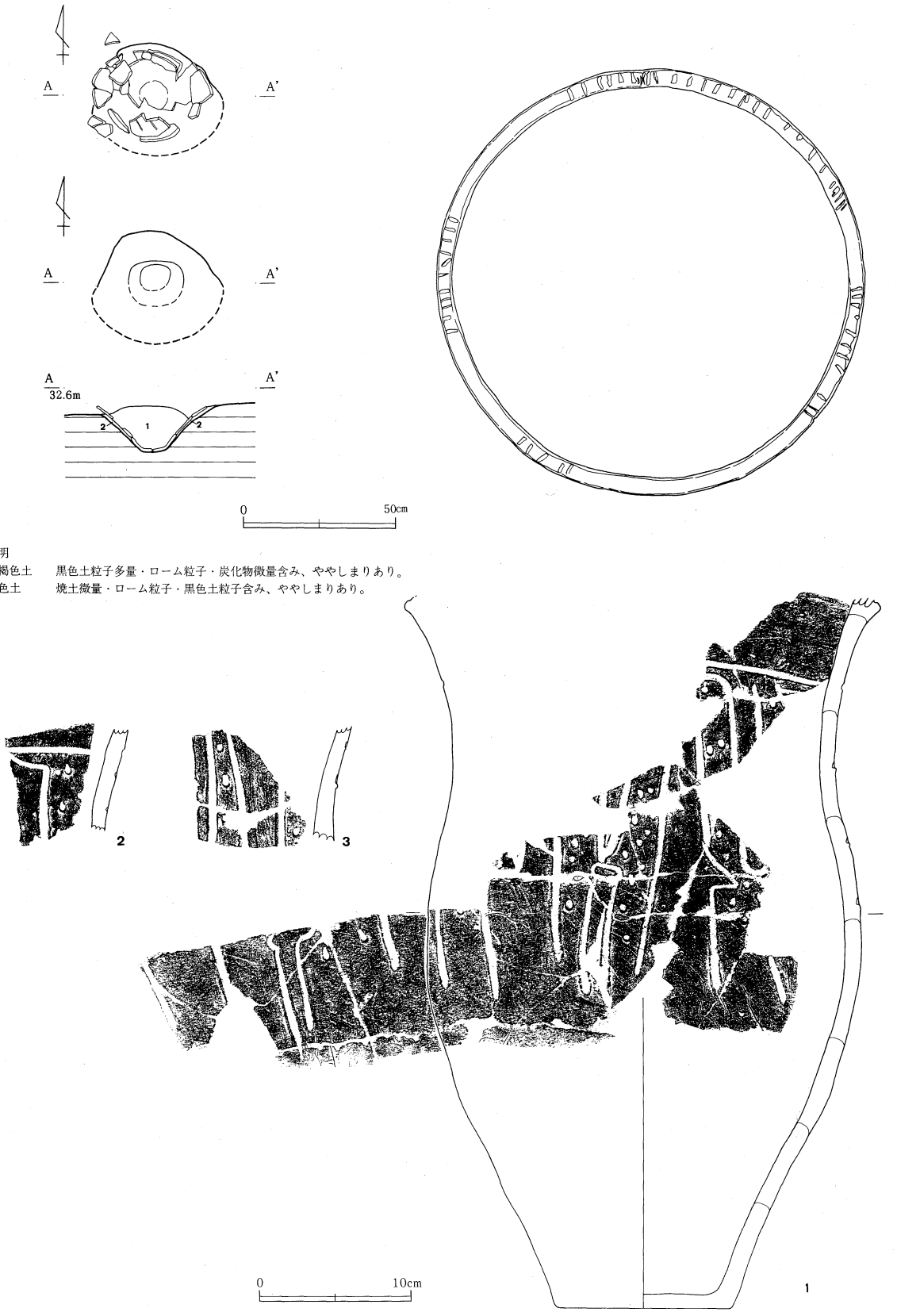
土器内の埋土（１層）は、炭化物を若干含んでいた。土器の内面には明確な炭化物（オコゲ）が見られないので、土器からはがれ落ちた炭とは考えにくい。掘形と土器との間を埋める土（２層）には、炭化物は認められなかった。しまりがやや強くてローム分が多い点はどちらの層も同じだが、１層の方がやや暗い色調である点で明らかに異なる。１層が人為的に埋めた土なのか自然流入土なのかは、明らかにできなかった。

出土遺物　器高50cm程度の深鉢形土器である（第７図１）。第７図２・３も１と同じ個体で、残りが悪い胴部上半の状況を示しているので、参考として図示した。１とは直接には接合できない。

口縁部はほとんど残っていない。１箇所だけ残る口縁端面付近を見ると、外側へ傾く広い斜面にし、そこに横位の太い沈線を一条入れる。この横線よりも上の状況は、破損しているので不明であるが、波状口縁であった可能性がある。

文様は、すべて先端が太くて丸い棒状工具で描く。口縁付近の斜面から6cm下を横位の線で区画した下に、残りの悪いＪ字文が２単位見られる。Ｊ字は下端の左右２箇所を下へ開放してここから沈線を垂下し、全体としてＫまたはＲ字状にする。Ｊ字文の１単位あたりの横幅は比較的狭いので、全周で８単位前後が推定される。第７図１に残存するＪ字の上端は、口縁部下方の横位区画線と平行する位置で閉塞または開放しているが、第７図２ではＪ字の上端部が横位区画線に対して斜めに左へ上がってゆく。この部分で器の厚さは特に変化せず、口縁部の突起の有無や、突起と文様との関係は不明である。Ｊ・Ｋ・Ｒ字形の帯状文様内には列点を充填する。列点は、沈線と同じ工具を上から下の方向へ刺突して施す。

この土器は、粘土紐の積み上げ休止面で接合を強化するために施した刻み目が明瞭に見られる。土器断面図に示した７箇所にあり、底部から上へ６～８cmごとに６箇所、口縁付近の斜面から下へ１cmの所に１箇所



土層説明
1　暗褐色土　　黒色土粒子多量・ローム粒子・炭化物微量含み、ややしまりあり。
2　褐色土　　焼土微量・ローム粒子・黒色土粒子含み、ややしまりあり。

第７図　横倉戸館遺跡　SK－03 遺構・遺物

確認できた（写真図版12上）。

器面調整は、外面の文様部分では箆削りのままである。内面の胴部と、外面口縁部の横位区画線より上方は横方向に密に磨く。胴部中位に垂下する沈線の間が比較的広くて列点を充填しない所と、胴部下位の無文部分には縦位の磨きを施す。したがってこの磨きは施文後に文様を避けて施している。底面は内外面とも多方向に磨く。

外面には火に掛けて使用した痕が認められる。明瞭な炭化物（オコゲ）は、内面には見られない。

胎土は緻密で、白色粒・細粒がやや多く、石英と長石の砂を若干含む。焼成は良好でやや硬質で、色調は淡黄色である。

ＳＫ－０４（第８図、写真図版３～４・11）

SK－03と同じく縄文時代後期の埋甕で、土坑内に深鉢形土器を単独で埋設したものである。

遺構の位置は、14グリッドの南部である。西南西へ６ｍのところに、同じく縄文時代後期前半の埋甕であるSK－03が所在する。すぐ東に隣接するSK－01は、SK－02とよく似ていることからみて江戸時代の墓壙と考えられる。SK－04と重複する遺構はない。遺構確認面は、SK－03と同じくローム漸移層である。

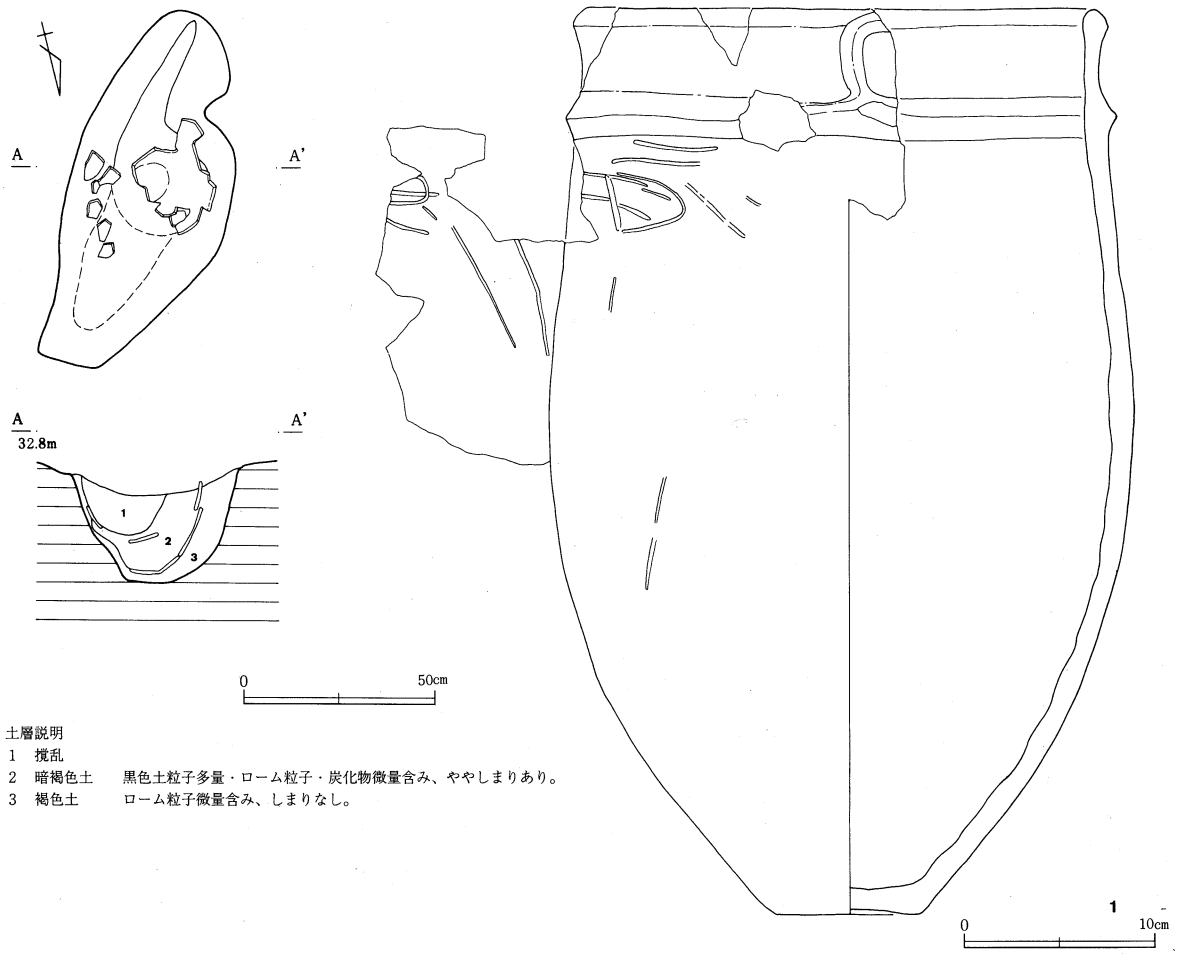
掘形の平面形は北東－南西方向に細長い不整楕円形である。土層断面図の１層が木の根による攪乱であることから推定すると、細長い攪乱が埋甕と重複しているのを一緒に調査・図化してしまっている可能性も、全く否定することはできない。たいへん残念であるが、この点については明確なことがわからない。

少なくとも掘形の東西壁面は、土器に沿って一回り大きく掘ったものと考えられ、西壁は土器の部分が丸く外側へ飛び出している。遺構確認面での規模は長径99cm、短径44cmである。底面も同様の不整形で、土器の底部を据えた付近はわずかに丸く掘りくぼめていた可能性がある。不手際により、掘形の底面を図化する前に断ち割ってしまったので、北半分の底面は推定線である。底面の規模は長径が推定87cm前後、土器付近で短径が25cmである。遺構確認面から掘形底面までの深さの残存値は28cmである。土器の口縁部の約半周を失うので、本来はまだ深かったと考えられる。東西方向の掘形の断面形はＵ字状で、壁面の傾斜は東西両側の上部が約75°でやや急である。底部は少し丸みを持ち、最も深い底面中央の標高は32.42mである。

遺物出土状況　深鉢が単独で埋められている。他の遺物は認められなかった。土器は掘形の底面との間に少し土層をはさんだ上に底面を据え、西壁側に傾けた状態である。胴部下半の全周が残り、胴部中位～口縁部はおよそ半周が残る。胴部中位は攪乱（１層）により、また口縁部は耕作などで失われたと考えられる。

土器内の埋土（２層）は、炭化物を若干含んでいた。土器の内面下部には、あまり明確ではないが炭化物の痕跡があるので、土器からはがれ落ちた可能性もある。掘形と土器との間を埋める土（３層）には、炭化物は認められない。しまりが弱く、ローム粒を含む点は２・３層ともに共通し、土質や色調は互いによく類似する。２層が人為的に埋めた土なのか自然流入土なのかは、明らかにできなかった。

出土遺物　器高約48cmで、胴部よりも口がわずかに狭くなる、細長い深鉢形土器である（第８図）。断面が三角形の低い隆帯が口縁部と頸部を一条ずつ横位にめぐり、両方の隆帯の間に右へ開くＣ字状の貼り付け文を持つ。頸部の隆帯は器面に貼りつけて作るが、口縁部は成形時に粘土をやや厚く積んで外面を隆帯状に肥厚させている。口縁部は２分の１周弱が残り、Ｃ字状の貼り付け文が１箇所現存し、その対面にもＣ字状文の裾の高まりがわずかに残るので、Ｃ字が２単位あった可能性がある。この両者の中間の口縁部も欠けているので、４単位の可能性も否定はできない。残存する口縁部は平縁で、Ｃ字の上の欠損部が高まっていたとしても、ごくわずかであろう。二条の隆帯の間は横撫でされている。



第８図　横倉戸館遺跡　SK－04 遺構・遺物

胴部外面は全面が篦削り調整のままで、胴部上～中位にはやや不規則な沈線文が描かれる。沈線は、先端にわずかな角を持つ篦または棒状工具で浅く施している。底部外面は篦削りまたは撫でと考えられるが、磨滅して不明瞭である。内面は篦削りの後に全面を横撫でしている。

火に掛けて使用した痕が外面下位に明瞭に認められ、外面上位から中位にかけてススが付着する。内面下部には、炭化物（オコゲ）そのものは見られないが、それが付いていた痕跡が見られる。

胎土はやや粗く、白色粒・細粒多量と、石英と黒色の細砂を若干含む。焼成は良好でやや硬質で、色調は浅黄橙色である。

（２）遺構外出土の遺物

遺構外から出土した縄文時代の遺物をここで報告する。出土位置が判明している場合は、出土したグリッド名も記載した。グリッド名の記載がないものは、出土位置が不明であり、表面採集あるいは表土除去などの際に出土した遺物と思われる。

縄文土器

（第９図・写真図版13）

第１群土器　早期撚糸文系土器（第９図１）

本群に属する土器はこの１点が確認されたのみである。口縁部には幅１cm程の無文部を有し、以下１段Ｒの細く浅い撚糸文が施される。器面は外面は平滑だが、内面は荒れており、削られた可能性がある。胎土には白色粒子および砂粒を多量に含み、焼成は良好でにぶい黄褐色を呈する。

第２群土器　早期沈線文系土器（第９図２）

本群に属する土器はこの１点が確認されたのみである。２は貝殻の腹縁圧痕を施文する。胎土には黒色細砂および白色細粒を少量ずつ含む。焼成は良好・硬質で明赤褐色を呈する。13グリッドから出土した。

第３群土器　早期条痕文系土器（第９図３～12）

本群に属する土器は計25点が確認された。出土した位置が判明するものを見ると、３グリッド付近から出土したものが多いようである。

１類　太めの沈線文を施すもの（３～５）

３～５は同一個体と思われる。３は平口縁で、断面内削ぎ状を呈する口唇上に丸い棒状の工具による押圧が巡り、小波状を呈している。口縁部には幅１cm程の無文部を有し、以下太めの縦位の沈線による区画内に、同様の工具による斜位の沈線が充填される。３と５では、斜線を充填する区画の右側の区画内の、口縁部上端から下へ1.5cmの位置を、丸い面を下に向けた半截竹管で斜め下方から１箇所ずつ刺突している。口唇部の押捺や口縁部の施文も、同じ半截竹管を用いている可能性がある。内面には幅広の条痕文が施されるが、外面には殆ど見られない。３～５の焼成はやや軟質で、にぶい黄橙色を呈する。胎土に少量の繊維と、若干の白色細粒・石英および少量の黒色細砂を含む。３点ともに３グリッドから出土した。

２類　条痕が施されるもの（６～12）

６は胴部の弱い屈曲部（あるいは隆帯か）に、やや浅い刺突を持つ。内外面には幅の狭い条痕を浅く施す。焼成はやや軟質でにぶい黄橙色を呈し、胎土中には若干の繊維と、白色細粒・石英の細砂を少量含む。27グリッド出土。

７は平口縁で、口縁端部の断面形が弱い尖頭状になる。外面は、幅がやや狭い明瞭な条痕を斜位に施し、内面には条痕が見られず繊維の脱痕が多い。焼成は良くやや硬質で橙色を呈し、繊維が多く、白色細粒を若干含む。１グリッド出土。

８は断面形に角を持つ箆状の工具で、口縁端部に刻みを入れる。外面はやや強く擦痕または条痕状に調整し、この方向を横位と考えると、図示したように口縁部が波状になる可能性がある。焼成は良く硬質で明黄褐色を呈し、繊維と白色細粒およびチャート砂を少量含む。１グリッドから出土した。

９～11は胎土・焼成からみて同一個体の可能性もある。やや幅広で浅めの条痕を、外面で斜位、内面で横位に施す。この条痕は３～５の内面の条痕に類似し、胎土・焼成・色調・出土グリッドも３～５と共通する。10は胴部がやや屈曲する。９・10は橙色、11はにぶい黄橙色で、３点ともに焼成は良く硬質で橙色を呈し、微量の繊維と少量の白色細粒を含む。ともに３グリッドから出土した。

12は内外面ともに粗雑な浅い条痕を斜位に施す。全体に粗雑で器厚が一定せず、器面に繊維の脱痕が多い。焼成は良く橙色で、繊維とチャート角礫を多量に含む。１グリッドから出土した。

第４群土器　前期興津式土器（第９図13）

本群に属する土器はこの１点が確認されたのみである。

13は、外面側にやや尖る口縁端面を、太い半截竹管の内面側で、斜め右上から連続して刺突する。この施文具は径1cmの竹管を半周に割り、端面は垂直である。破片右半部では、径3mmの半截竹管で平行沈線を口縁部下に描く。その下に、径6mmの半截竹管で上下２段に施文する。竹管内面の角を器面に押して右へ引き抜くように施文し、竹管内面中央部が器面に当たらないので列点状になる。焼成はやや軟質気味で色調は灰黄色を呈し、白色細粒若干と、石英および黒色細砂を少量含む。

第５群土器　中期阿玉台Ⅳ式土器（第９図14）

14は頸部下位から外へ開く部分に断面カマボコ形の低い隆帯を貼付し、その下2cmの範囲と隆帯上に１段Ｌ横回転の無節縄文を施した後、隆帯の下に沿って有節沈線を施す。有節沈線は破片左下半部にも浅く施文され、その下部に隆帯の剥離したような痕跡が認められる。工具を強く右側へ傾けて器面を刺突しながら右側へ施してゆく。色調は橙色を呈し、焼成は良好で硬質である。白色細粒と石英および長石の細砂を少量含み、雲母は見られない。20グリッドから出土した。

確実な縄文中期の土器はこの１点しかない。縦位の磨消縄文を施す小片もあるが、中期とは断定できない。

第６群土器　後期称名寺式～堀之内式期の土器（第９図15～34）

本群に属する土器は計19点が確認された。

１類　把手を持つもの（15・16）

15は把手上半部の中央に円孔が貫通する。黒色細砂が多く、白色粒子も少量含み、焼成は良いが、やや軟質気味で浅黄橙色を呈する。

16は把手上半部に貫通する円孔を持ち、下半部中央の凹みを取り巻く直線と弧線を丸棒状工具で描き、その両端を深めに刺突する。外面中央には縦位の隆帯を貼付する。白色細粒と長石の砂を多量に含み、焼成は良いがやや軟質気味で、にぶい黄橙色を呈する。

15・16は称名寺式土器の把手部と考えられる。

２類　端部に沈線または突起を持つ口縁部破片（17～20）

17は波状口縁の波頂部より右側の口縁部上端面に、先端が丸みを持つ棒状工具で深い沈線を持ち、波頂部寄りの沈線末端部をさらに深く刺突している。橙色および浅黄橙色を呈し、白色粒子を多量に含み、焼成は良い。17グリッドから出土した。

18は粘土紐を縦に貼った高い突起を持ち、突起部の横断面形は隅の丸い菱形に近い。口縁部上端から下へ2cmの位置に横位のやや太い沈線を持つ。沈線は粘土が軟らかい時点でかなり雑に施している。にぶい黄橙色を呈し、石英砂をやや多く含み、焼成は良く硬質である。

19は波状口縁の波頂部の右側に大きな円孔を貫通させる突起を持つ。口縁部外面に厚く粘土を補充して肥

厚させた上に二条の凹線をめぐらし、突起付近で円形の刺突２箇所を縦列させる。内外面を比較的丁寧に横位に磨いている。多量の白色細粒と若干の石英細砂を含み、焼成は良好・硬質でにぶい橙色を呈する。８グリッドから出土した。

20も波状口縁の可能性がある。平坦な口縁上端面の中央に１本の深い沈線を入れ、破片の左端部で沈線の末端をさらに深く刺突している。外面は丁寧な横位の磨きを施し、内面は篦削りの後に横撫でを行う。石英の細砂を若干含み、焼成は良く硬質で淡黄色を呈する。13グリットから出土した。

17・19・20は称名寺式期または堀之内１式期のものと考えられる。

３類　口縁部から頸部に横位および弧状の隆帯を持つもの（21）

21は頸部でやや広く外に開く。頸部に横位の隆帯と、その上に弧状の隆帯を貼付し両脇を各１本の沈線ではさみ、この沈線による横長の区画内に２段ＬＲ縦回転の縄文を施す。隆帯の上面には円形の深い刺突を加える。隆帯の交点にはやや大きな刺突を入れて周囲の半周を深い弧線で囲み、弧線の端部にも円形の刺突を配置する。胎土には白色細粒・石英細砂と黒色細砂を多量に含み、焼成はやや悪く軟質で、色調は淡黄色を呈し、外面に黒斑を持つ。

21は綱取式の系統に近い土器と考えられる。

４類　沈線で帯状に区画した文様を描くもの（22～29）

22・23・24は帯状の区画の中に櫛歯状工具で刺突を施すものである。図示した破片の上下方向が誤っていないとすると、右下方から左上方へ斜めに器面を引っ掻くように刺突する。櫛歯状工具は５本１組だが、４本だけしか器面に当たっていない刺突も多い。歯の先端は幅1mm強の平坦面をなす。沈線は先が丸く太い工具で描く。器外面は磨滅していて明確でないが、篦削り後に施文し、区画外を磨いたものと思われる。沈線の区画内には磨きは認められないようである。この３片は胎土・焼成・色調・文様が類似し、同一個体の可能性がある。

３片ともに淡黄色を呈し、多量の白色粒子と若干の石英細砂を含む。焼成は比較的良いが、部分的に黒斑を持ち、やや軟質気味である。

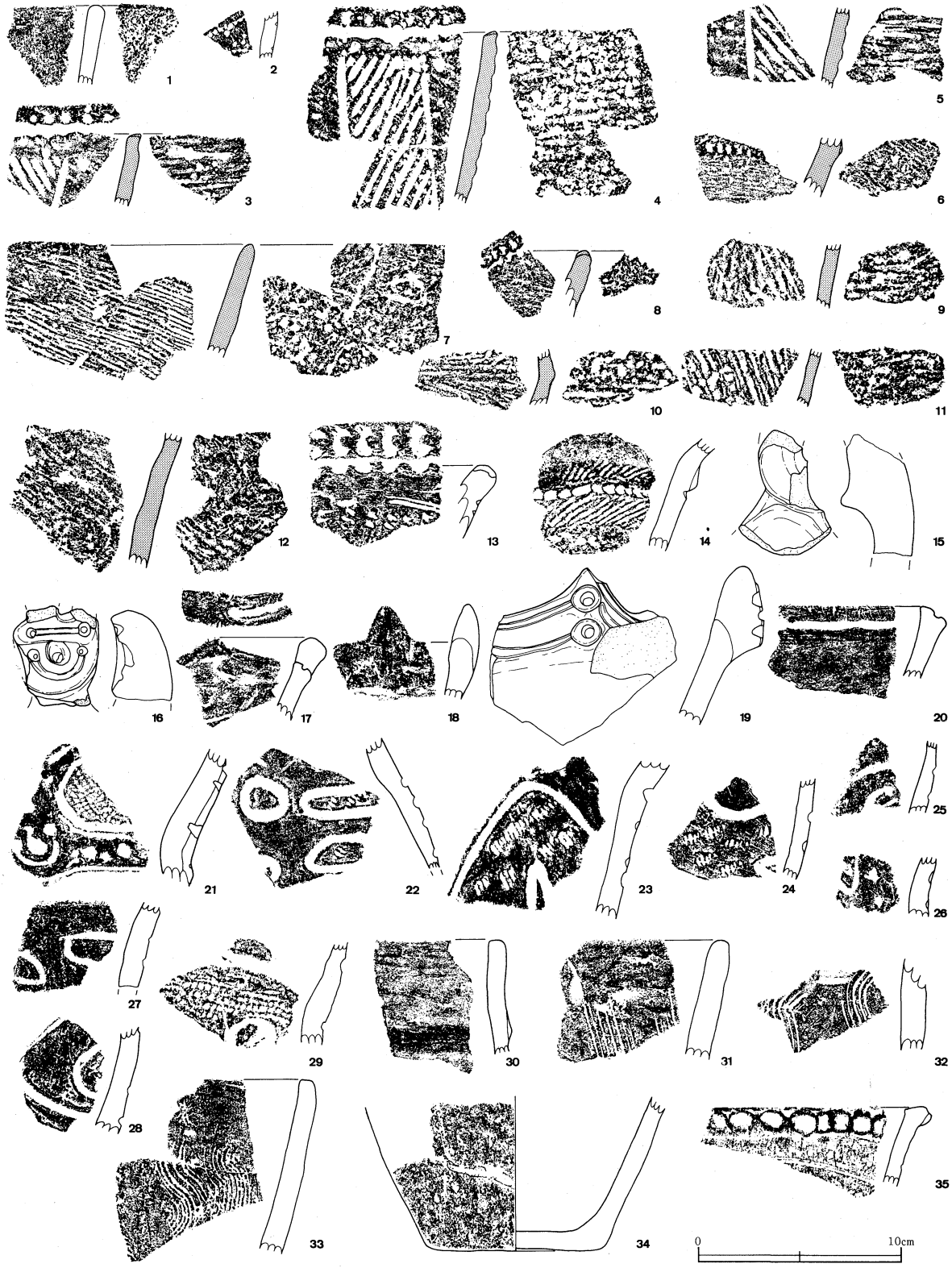
25・26は帯状に区画し、26は区画内に棒状工具で刺突して列点を施す。25は区画内に施文は認められない。25は浅黄橙色を呈し、白色細子と石英細砂をごく少量含む他には混和材が目立たず、焼成はやや軟質である。13グリッドから出土した。26は橙色を呈し、白色細粒と黒色細砂を若干含み、焼成はやや軟質である。

27は横長の区画が見られ、破片上辺部にも横位の沈線があったようである。浅黄橙色で焼成はやや軟質である。18グリッドから出土した。

28は破片右端部の沈線区画内に縄文を充填している可能性もあるが、残存部分が少ないので確実ではない。浅黄橙色を呈し、石英砂を少量含み、焼成は良く硬質である。

29は縄文を施した後に沈線で区画しているようである。沈線はかなり太く、粘土が軟らかい時点で施文している。縄文は２段ＬＲ縦回転である。淡黄色を呈し、チャートの円礫・砂と白色粒子・長石を多量に含む粗い胎土である。焼成は良い。13グリッドから出土した。

25・26は称名寺式土器であり、22～24・28も確実ではないがその可能性を持つ。27・29は称名寺式期または堀之内１式期の可能性があり、29が縄文を施文した後に区画している点は新しい要素であろう。



第９図　横倉戸館遺跡　遺構外出土遺物（縄文土器）

５類　作りが比較的粗雑な土器類（30～33）

調整が粗い、比較的粗雑なものをまとめた。

30は直立する口縁部の内外面を横位に削った後、外面に断面が三角形の低い隆帯を貼り、内外面を粗く磨く。埋甕（SK－04）の土器と同類で、頸部の隆帯は３類とも関連している。浅黄橙色で、焼成良く硬質。石英細砂を少量含む。

31・32・33は無文地に櫛歯状工具で条線文を施す。31は斜位、32・33は波状に施し、33は曲がる部分で工具をコンパス状に回している。工具の歯数は31が８本、32が５本、33が10本である。器面は、削りの後、内面全面と31・33の外面口縁部の無文部を粗く磨く。31は淡黄色を呈し、白色粒と石英の細砂を若干含む。焼成は良い。33は浅黄橙色を呈し、石英と黒色の細砂を少量含む。焼成は良く、やや硬質である。17グリッドから出土した。32はにぶい橙色を呈し、白色細粒と黒色細砂を少量含む。焼成は良い。

６類　深鉢形土器の底部（34）

34は底面のほぼ全周が残存し、底径は8.9cmである。外面は胴部を上方向、底面を多方向に削り、内面は撫で仕上げである。チャートの砂と礫が非常に多い粗い胎土である。焼成は良く、やや硬質で淡黄色を呈する。13グリッドから出土した。

第７群土器　後期加曽利Ｂ式土器（第９図35）

本群に属する土器はこの１点が確認されたのみである。

35は口縁端部に貼り付けた隆帯の上に指頭圧痕を持ち、その下部には節が大きい単節縄文をごく浅く施した後に、先端に面を持つ篦状工具で粗雑な斜線文を施す。縄文は２段ＬＲ横回転施文と思われる。内面と口縁部上面は丁寧な横位の篦磨きを施し、口縁部内面上端には幅8mmの溝状の浅い凹線が巡る。内面調整と凹線は非常に丁寧に施されている。焼成は良く非常に硬質で、にぶい橙色を呈し、白色粒子と黒色および石英の細砂をやや多く含む。

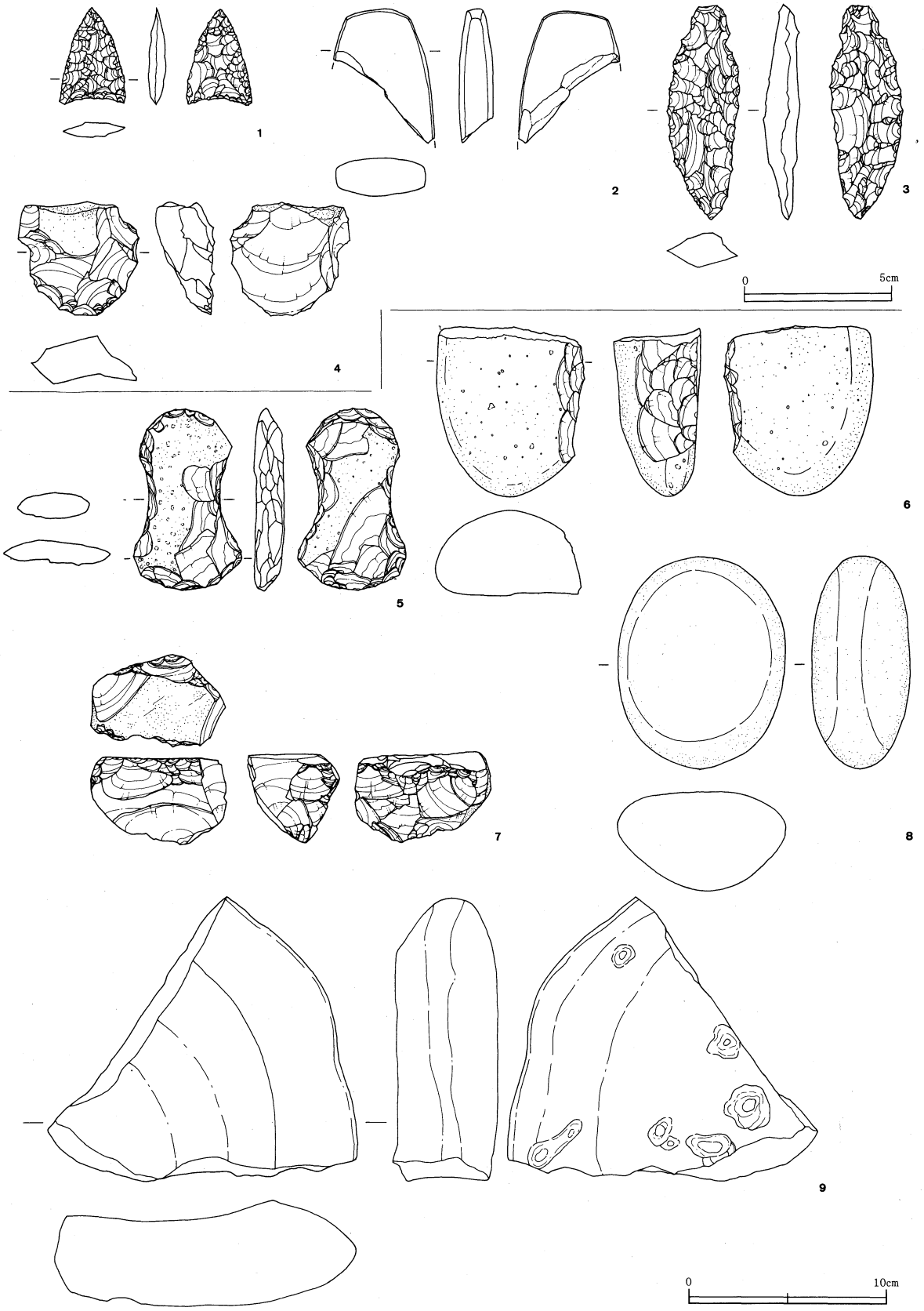
35は加曽利Ｂ２式土器の可能性がある。

石器

（第10図・写真図版14）

石鏃（第10図１）　１点が出土した。凹基無茎式で長さ3.3cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm、重さ3.3g、重心は先端から1.9cmの位置にあり、この位置での幅は1.9cmである。先端角は70°でやや鈍く、側縁が外湾し、先端部は最後に近い段階で調整するようだが、先端形状は整っていて、再生しているとは考えにくい。使用による先端の破損も見られない。抉入部は幅2.1cm、深さ0.2cmである。左図面の中央の重心付近の稜が狭い範囲で磨滅し、装着痕の可能性もあるが、反対面には認められない。素材剥片の確実な剥離方向は明らかでなく、自然面は見られない。緑灰色の緻密な珪質岩で、流紋岩の可能性がある。７グリッド出土。

磨製石斧（第10図２）　１点が出土した。底角式磨製石斧の基部破片である。残存部の計測値は、長さ4.6cm、幅3.5cm、厚さ1.3cm、重さ21.6gである。横断面は四面が凸状になる方形である。基端面を含めて残存する５面は、おおむね各面の長軸方向に研磨する。現在は風化しているが、完成時にはかなり丁寧に仕上げられていたと思われる。斑晶が比較的小さい緑色の緻密な石材で、輝緑岩または閃緑岩の可能性がある。20グリッド出土。



第10図　横倉戸館遺跡　遺構外出土遺物（縄文時代の石器）

石匙（第10図３）　１点が出土した。縦型石匙である。有茎尖頭器にも類似するが、全体や基部の形状から石匙と判断した。長さ7.5cm、幅2.5cm、厚さ1.1cm、切先角75°、重さ17.1gである。基部を除く両側縁をそれぞれ刃部として製作している。どちらも断面形は平刃で、背面側（左図の面）の方が傾斜が急になる。背面で基部を上にした場合、左側の刃部は基部主軸と約10°斜交し、長6.4cm・刃幅最大値1.2cm・刃角（刃部縁辺の断面角）45°である。右側の刃部は基部主軸と平行し、長5.8cm・刃幅最大値1.2cm・刃角55°である。刃部は全周ともに鋭利で、触れると指先に軽い痛みを与える。両側の刃部縁辺の背面側だけに微細な剥離痕が見られ、使用痕の可能性がある。基部は最大長1.8cm、最大幅1.4cmで、抉りは明確であり、付着物は認められない。腹面基部中央の剥離面がポジティブなので、縦長剥片を素材にしている可能性がある。自然面は認められない。青灰色の良質のチャートである。１グリッド出土。

スクレイパー（第10図４）　１点が出土した。長さ3.9cm、幅4.1cm、厚さ2.0cm、重さ26.3gである。原礫の平坦面を打面とするやや縦長の剥片を使い、打面をそのまま残して刃部に対する棟部とする。刃部は中心角170°の円形状で、下半部の背面側を調整剥離して長3.7cm・刃幅最大値0.5cm・刃角45°に仕上げる。刃部断面形は腹面側が平刃、背面側が凸刃形で、全体として片刃形になる。やや質の悪い灰色のチャートである。18グリッド出土。

打製石斧（第10図５）　１点が出土した。分銅形で、長さ9.3cm、幅5.5cm、厚さ1.5cm、重さ96gである。偏平な円礫の全周を調整し、上下両端を刃部とする。下刃は幅5.5cm・刃角60°、上刃は幅4.8cm・刃角55°で、上下ともに断面は不均等な両刃形をなす。石材が硬質なので磨耗痕は明瞭ではないが、上下両方の刃部の図右面側の稜がわずかに磨滅している。硬質で金属音のする、節理が明瞭な石材で、粘板岩起源のホルンフェルスの可能性がある。出土位置は不明。

礫器（第10図６）　１点が出土した。残存長8.7cm、幅7.6cm、厚さ4.5cm、残存重さ387gである。片面がやや平坦な自然の円礫の、平坦な方の面を打面として連続する剥離を行なう。平坦面と剥離面との間が75°前後の鈍い刃部になる。小形の石器を製作できるような石材ではないので、石核とは考えられない。図の上半は折損している。加工及び折損する以前に加熱を受けて赤味を帯びた灰黄色に変色している。径2mm前後の大粒の石英を多く斑晶に含む、硬質の石英安山岩。７グリッド出土。

石核（第10図７）　１点が出土した。長さ4.5cm、幅6.9cm、厚さ4.7cm、重さ142gである。上面の自然面を主な打面とするが、90°転移した面（図の背面）も打面に使用し、背面図の上下端を加撃している。背面上端の打撃は、上面に対する打面調整の可能性もある。作業面は図の正面・背面・上面の３面で、主に横長剥片を剥離している。剥片の剥離角は、正面での剥離作業では70°、背面と上面では110°である。非常に硬質で、暗灰色の硬砂石である。出土位置は不明。

磨石（第10図８）　１点が出土した。長10.8cm、幅8.6cm、厚さ5.0cm、重さ646gである。片面が平坦で反対面の中央が上下方向に長くやや高まる河原石を加工しないで使用する。平坦な面の全面と、対面の高まりをはさんだ両側の２面との、計３面を擦面として使用し、かなり平滑に磨滅しているので確実な運動方向は明らかでない。側面には擦面は見られない。また、確実な敲面も認められない。比較的緻密な安山岩。

石皿（第10図９）　１点が出土した。残存長14.5cm、残存幅15.9cm、厚さ5.2cm、残存重さ1,204gである。自然石の上面を皿部に加工し、縁部と皿部の境が比較的明瞭な稜をなす。完形時の正確な傾きがわからないが、皿部の深さは１～２cm程と思われる。裏面には大きく見て６箇所の凹部を持つ。２辺が破損し、破面の風化状況は皿面や裏面と同様で、新しい破損ではない。多孔質の安山岩である。９グリッドから出土した。

なお、石器に関する以上の記載にあたっては、町田（1996）を参考にした。

第３節　古墳時代以降の遺構と遺物

（１）古墳時代中期の竪穴建物跡

ＳＩ－０１（第11図、写真図版５～６・15～16）

14グリッドの北西に位置する。北方へわずか３mのところに、同じく古墳時代中期中葉の竪穴建物跡であるSI－02が隣接している。この２棟は西壁の位置をそろえていて、約７°振れてはいるが主軸方向も近いので、同時に存在していた可能性も考えられる。SI－01と重複する遺構はない。

平面正方形の竪穴建物跡である。この建物跡では、柱穴・入口・炉の位置が不明だが、仮に南北方向を建物主軸とすると、主軸方位はGN－7°－Eである。

建物跡の大きさは、確認面で南北3.4m×東西3.1m、床面で測ると南北3.3m×東西3.0mである。この他に、西壁中央が、幅約90cm×奥行き約50cmの範囲で外側へ張り出している。この張り出し部分には、柱穴・焼土・遺物などは特に認められていない。竪穴は浅く、現状で最も深いところでも、確認面（ローム漸移層の暗褐色土中）から下へ13cmしか残っていない。残存する壁面下端部は、約60°前後の傾斜を持って少し外へ開く。床面の標高は32.66～32.70mである。貼床の有無は不詳である。

柱穴、炉、入口施設、貯蔵穴などは見られなかった。

遺物出土状況　遺物は、竪穴の中央～東部と、北部～北東隅部から出土した。中央～東部では床面から５～８cmほど浮いて土師器小破片が数片みられた。

北東隅では高杯の脚部（２）が、横倒しになって床面から少し浮いて出土した。

北側の壁近くでは、中形壺（５）１点と、完形の高杯（３）が１点、高杯の脚部（４）１点がまとまっている。この３点は床面から10cmほど浮いた埋土中に揃えて置かれたものが倒れたような状況である。３の高杯は脚部が正立し、折れた杯部は脚の横に伏せた状態で出土した。５の壺は３の脚部付近で横に倒れている。４は横に倒れていて、出土時の脚部上面と杯部とは耕作で失われた可能性がある。

出土遺物　土師器の食器類では、椀形杯と坩が少なくて高杯が多い。

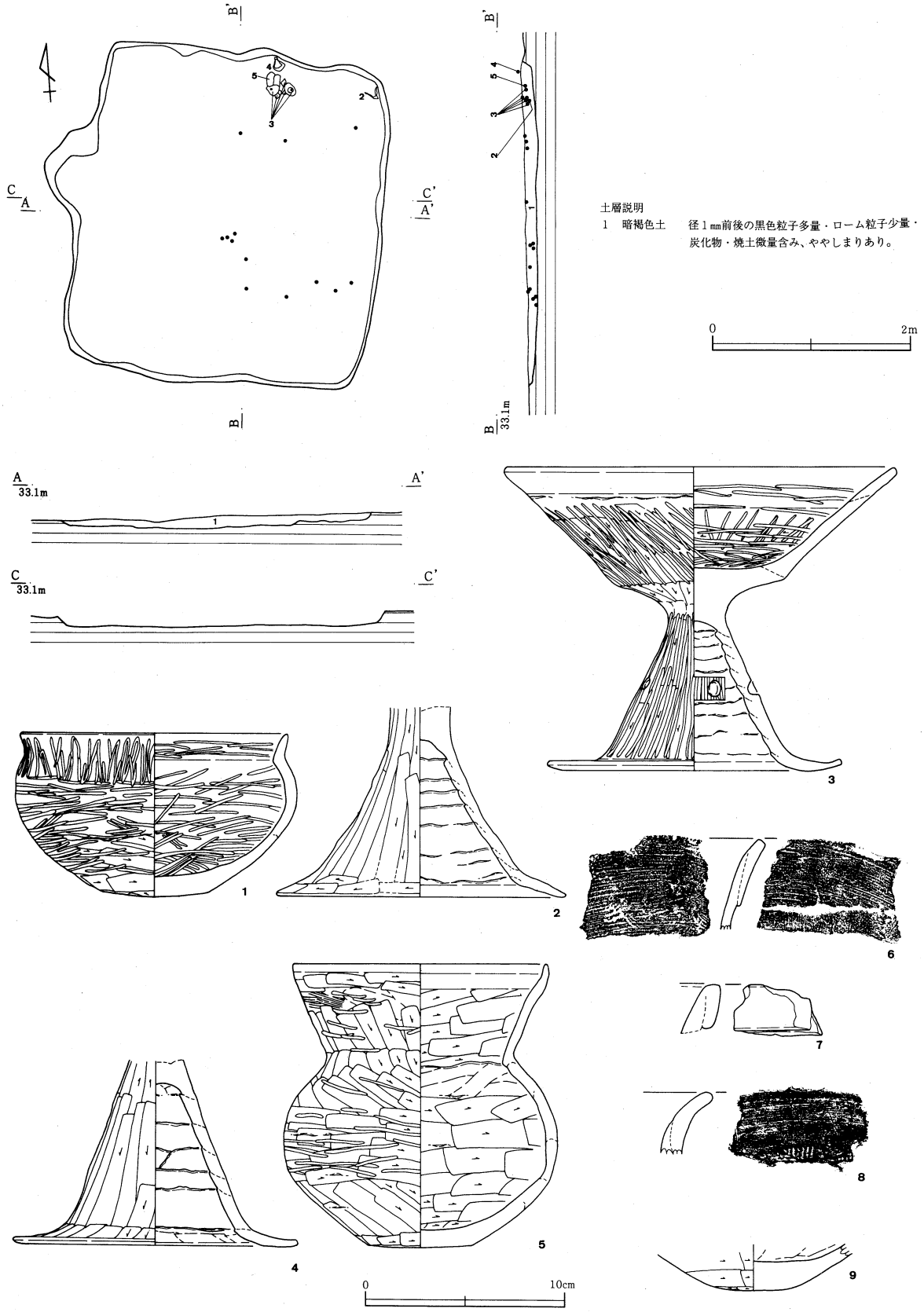
椀形杯は１だけで、この他には破片も出土していない。残念ながら出土した位置や状況がわからないが、残存率が比較的大きいので、この建物跡に遺棄された遺物なのかもしれない。底面は広くて、弱くふくらむ面をなす。他の土器とくらべると、これだけが赤味の強い胎土を使い、また、篦磨きが比較的丁寧である。高杯の篦磨きが衰退しているのに対して椀形杯を丁寧に磨く状況は、食器の主体が高杯から椀形杯に移る段階に見られる。模倣杯は１片も出土していない。

坩は１片だけあるが、小破片なので図示していない。肩部の破片で、外面は磨かず撫で仕上げである。

高杯は、完形１個体、脚部２個体、他に個体の帰属が不詳の小破片が数片ある。うち３点を図示した。３はほぼ完形である。古墳時代中期の高杯としては篦磨きがまだ多く、脚部に孔を持つ点が古い要素である。しかし、孔は脚部の内面まで貫通していない。また、孔は３個あるが、全周の1/3の位置にはなくて、配置が偏る。２と４には、篦磨きも脚部の穿孔も行なわれない。高杯は３点ともに、上端がふさがる脚部を逆さまに作って、杯部に接合するようである。連続成形後に杯部底面に粘土円盤を充填する高杯は見られない。

壺は、中形と大形のものがある。中形の壺（５）は刷毛目の後に篦削り調整を主に行い、篦磨きは体部にまばらにしか見られない。銘々の飲用器（坩）と考えるには、やや大きすぎる。大形の壺は、貼付口縁のものがある（６・７）。

甕は、口縁部破片が１片だけある（８）。「く」の字形ではなくてゆるく外反し、肩部に刷毛目を残す。甕



第11図　横倉戸館遺跡　SI－01　遺構・遺物

の底部（９）は、底面外周が不明瞭で丸底に近いもので、加熱・煮炊きした確実な痕跡は見られない。図示していない甕の破片を見ると、大半の胴部外面が篦削りまたは篦削り後撫でで仕上げている。刷毛目を残す甕は図示していない小破片が１点だけあり、体部下端を刷毛目調整した後に底面を篦削りしていて、こちらは加熱して使っているようである。

第３表　SI－01　出土遺物

番号 器種 種類	法量(cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
1 椀形杯 土師器	口 13.7 底 5.6 高 8.4 大 14.2	底面は弱い凸面で、外周の稜は明瞭。頸部内面は明瞭な稜を持って外傾する。外面は体部に右方向の横篦削りの後、口縁部～体部中位を横撫でして、体部下位以外を全面篦磨き。底面は円周方向の篦削り。内面全面は横撫で後篦磨き。赤く発色する胎土を選んで用いている。	10R5/8 赤色	やや緻密。白粒・細砂やや多量、黒・透明細砂少量。やや硬質。	不明 口1/2周 底全周
2 高杯 土師器	脚裾 復14.6 高 残 9.6	短い円柱状の粘土の上面をくぼませた上に粘土紐を積み上げてから、倒立して脚部にする。外面は脚部全体に縦篦削りの後、裾部横篦削り。撫では全く行わない。内面は積み上げたままほとんど調整しないで、脚裾部だけ横撫で。脚部上半は二次的に被熱して赤化している可能性もある。	10YR8/3 浅黄橙色	やや粗い。白・灰色・透明砂少量、白細粒やや多量。軟質。	床付近 脚上端全周 脚裾1/6周 「14」
3 高杯 土師器	口 20.0 脚裾 14.9 高 15.5	脚柱部は全周残っているが孔は３ヶ所だけで、いずれも内面まで貫通していない。対面に各１孔と、直角方向に１孔あり。脚部は下から見て反時計回りに脚裾の方へ巻き積み後、杯部と接合して外面に斜め篦削りの後に接合部を撫で。脚裾部横撫で、外面脚部縦篦磨き。杯部は別造りの後に脚部と接合して、外底面に求心方向の篦削り。外面は体部上半に雑な撫での後に下半部斜め篦削り後斜め篦磨き、口縁部横撫で。内面は底面に放射方向、体部下半に横方向の篦削りの後に口縁部横撫で、下半部多方向篦磨き。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密。白細粒と透明細砂多量、灰色細砂ごく少量。やや軟質。	底上６cm 口7/12周 脚裾2/3周 「15」～「17」と「19」～「22」が接合
4 高杯 土師器	脚裾 復14.6 高 残 9.5	脚部は倒立して成形。脚内面上端の粘土塊を指で押した後に、下から見て時計回りに粘土紐を積み上げる。脚端は少し反り上がる。外面は全体を縦篦削りの後、裾端部から7～8mm幅だけに弱い横撫で。内面は脚柱部はほぼ無調整、脚裾部は横篦撫で後に外周を横撫で。	10YR8/3 浅黄橙色	やや粗い。白細粒やや多量、白・透明細砂と赤細粒少量。軟質。	底上13cm 脚上端全周 脚裾5/12周 「18」
5 中形壷 土師器	口 12.9 底 5.3 高 14.5 大 16.1	明瞭な平底。口縁部は内面上部が外傾した後に内外面の端部が弱い稜を持って立ち上がる。外面は頸部に刷毛・撫で調整の後、全体を篦削り、底面は円周方向の篦削り。口縁端部横撫で、胴部中位と頸部に粗い横篦磨き。内面は撫での後、胴下半に円周方向、頸部に斜め方向の篦削り、口縁端部横撫で。外面胴部中位1/2周と内外面頸部1/4周に、ススまたはタールが二次的に付着。	7.5YR7/6 橙色	やや緻密。白細粒多量、透明砂・灰色細砂やや多量。やや硬質。	底上７cm 口～底全周 「17」
6 大形壷 土師器	口 復約20	外面は頸部に縦刷毛の後、口縁部に粘土帯を貼り付けて下縁を軽く指で押さえ、口縁部横撫で後に口縁端面以外に横刷毛。内面は横刷毛。	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗い。白細粒・透明細砂多量、白砂･黒細砂少量。硬質。	埋土中 口1/12周 「フク土」
7 大形壷 土師器	口 復15~20	外面は口縁部に粘土帯を貼付後、横撫で。内面と口縁端部は横撫で。	7.5YR7/6 橙色	やや緻密。黒・透明細砂多量、白細粒やや多量。硬質。	不明 口1/12周未満
8 小形甕 土師器	口 復約16	やや厚く、頸部と口縁部上半で外反する。外面は頸部に刷毛目の後、口縁部に横撫で。内面横撫で。	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや緻密。白細粒・透明細砂多量、黒細砂・赤細粒少量。やや硬質。	埋土中 口1/8周 「フク土」
9 甕 土師器	底 復4.5	底部は厚く、底面外周は不明瞭な稜を持つ。外面底部は一方向、胴部は横方向の篦削り。内面底部は横撫で。	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗い。白細粒・透明細砂やや多量、黒細砂少量。やや硬質。	埋土中 底全周 「フク土」

第４表　SI－01　古墳時代中期　出土遺物数一覧表

		椀形杯	模倣杯	高杯	坩(小形壺)	中形壺	大形壺	甕	小形甕	焼粘土塊	その他
土師器	口縁部	1		11		5	2		1		
	体部			脚柱３	1	有		有			
	底部	1		脚裾16		1		2			
椀形杯と中形壺はそれぞれ同一個体。高杯は脚柱部から見て３個体分以上あり。大形壺は図示した２片。											

ＳＩ－０２（第12～13図、写真図版７～８・16～18）

10グリッドに位置する。南方へわずか３mのところに、同じく古墳時代中期中葉の竪穴建物跡であるSI－01が隣接している。SI－01の項でも述べたように、この２棟は西壁の位置を揃え、約7°振れてはいるが主軸方向も近いので、同時に存在していた可能性も考えられる。竪穴の北壁の東寄りを江戸時代の墓壙SK－02に切られている。また、遺構の中央部は、北西から南東方向にむけて大きな攪乱で破壊されている。

平面形が方形の竪穴建物跡である。この建物跡でも、仮に南北方向を建物主軸とすると、主軸方位はGN－14°－Eである。北西柱穴と南西柱穴を結ぶ方向は、竪穴の外形からみた主軸方向とほぼ一致し、北西柱穴と北東柱穴を結ぶ方向はこれに直交している。

平面形は、南へゆくほど東西幅が広く、やや台形気味になる。建物跡の大きさは、確認面で南北5.1～5.3m、東西4.2～4.8mである。床面で測ると南北4.9～5.0m、東西3.9～4.6mである。竪穴の掘り込みは、現状で最も深いところで確認面から下へ20cm程である。壁面は、50～70°の傾斜を持って少し外へ開く。床面の標高は32.62～32.70mである。貼床の有無は不詳である。

主柱穴は４本あったと推定される。南東の１本は確認できなかったので、南東隅の大きな攪乱で破壊された可能性が高い。柱穴の大きさ・深さ・高さは、

（Ｐ１）上面径26cm、底面径10cm、床面からの深さ22cm、底面標高32.47m

（Ｐ２）上面径25cm、底面径14cm、床面からの深さ18cm、底面標高32.51m

（Ｐ３）上面径22cm、底面径11×15cm、床面からの深さ22cm、底面標高32.40m

である。

炉または焼土、入口施設、貯蔵穴などは見られなかった。南東隅の大きく攪乱されている部分に貯蔵穴があった可能性も考えられる。

遺物出土状況　遺物は、建物跡の北部と南部から出土した。図示できなかった小破片も含めて、すべての遺物は床面から10～20cm上に浮いた状態で出土している。建物が廃絶した時に遺棄されたと考えられるような完形の遺物はない。

出土遺物　土師器食器類は高杯と坩があり、椀形杯は破片もみられない。

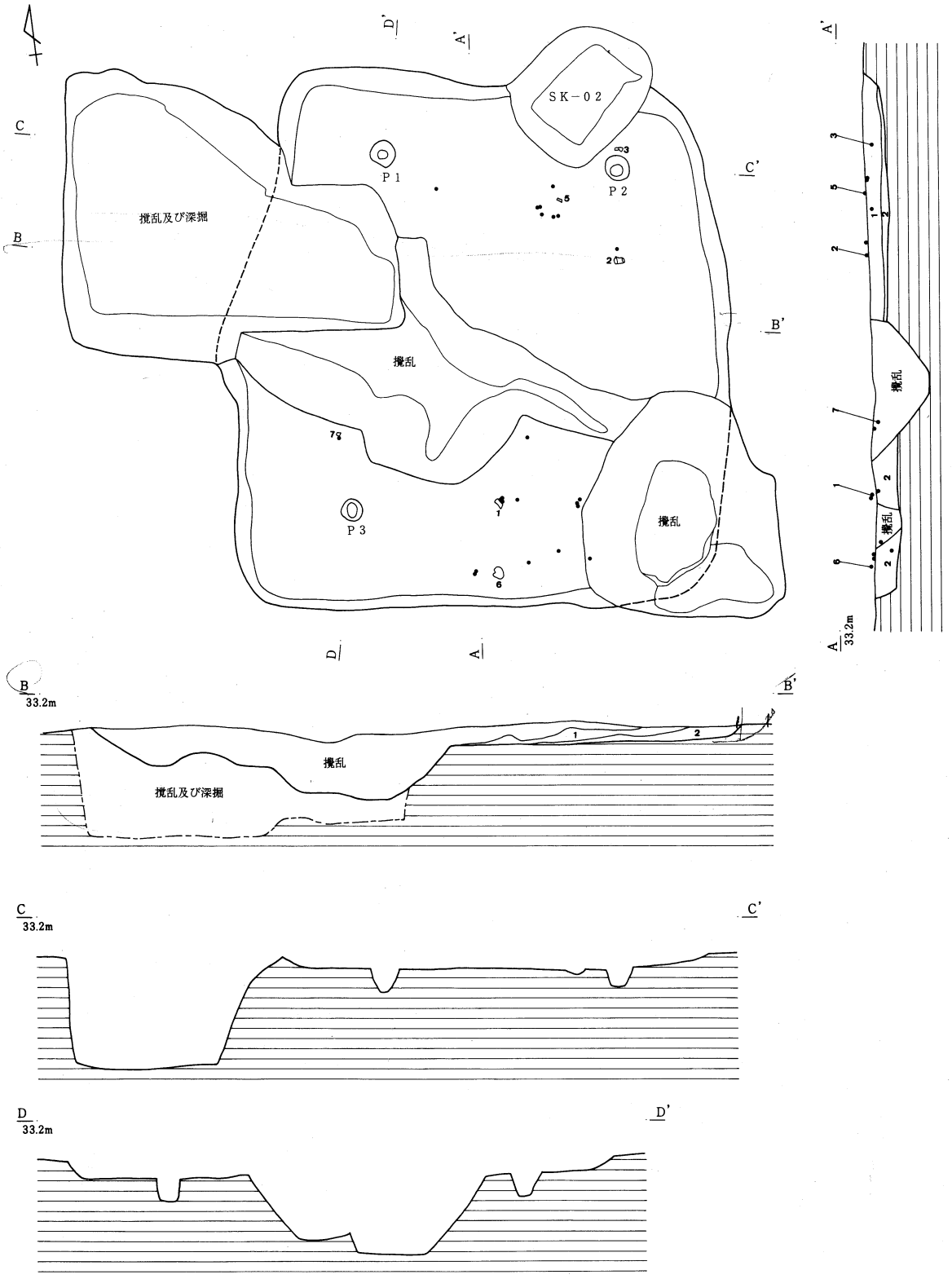
高杯は脚部３点を図示した（１・２・３）。製作法は２種がある。１と２は、上端がふさがる脚部を逆さまに作った後に、杯部に接合するようである。３は脚部上半から杯部まで連続で成形した後に粘土を杯部底に充填する。２の外面は、脚部外面に狭い幅の篦撫でを密に施して、やや篦磨きに近い仕上がりにしている。１の外面の磨きも２に少し似ていて、あまり精良な篦磨きとはいえない。

坩は、体部がほぼ完存するものが１点ある（４）。磨きは肩部付近だけで、体部の大半と底面は篦削りのままである。別個体の坩の口縁部小片がこの他に１片ある。

壺（５）は、外面は篦削りのままで、全面を削った後に口縁部に貼付帯を付ける。

甕は底面中央が緩く突出する（６）。加熱痕跡がないので、煮沸に使ったとは考えにくい。上半部の形は不明なので、壺の可能性もある。７はやや小形の甕。外面が篦削り調整のままで、磨きや撫でをしない。この他に、図示していない甕としては、口縁部の小破片が５点と胴部破片が若干ある。胴部外面は篦削りか、または篦削り後に撫で仕上げである。刷毛目を残す甕はほとんどない。

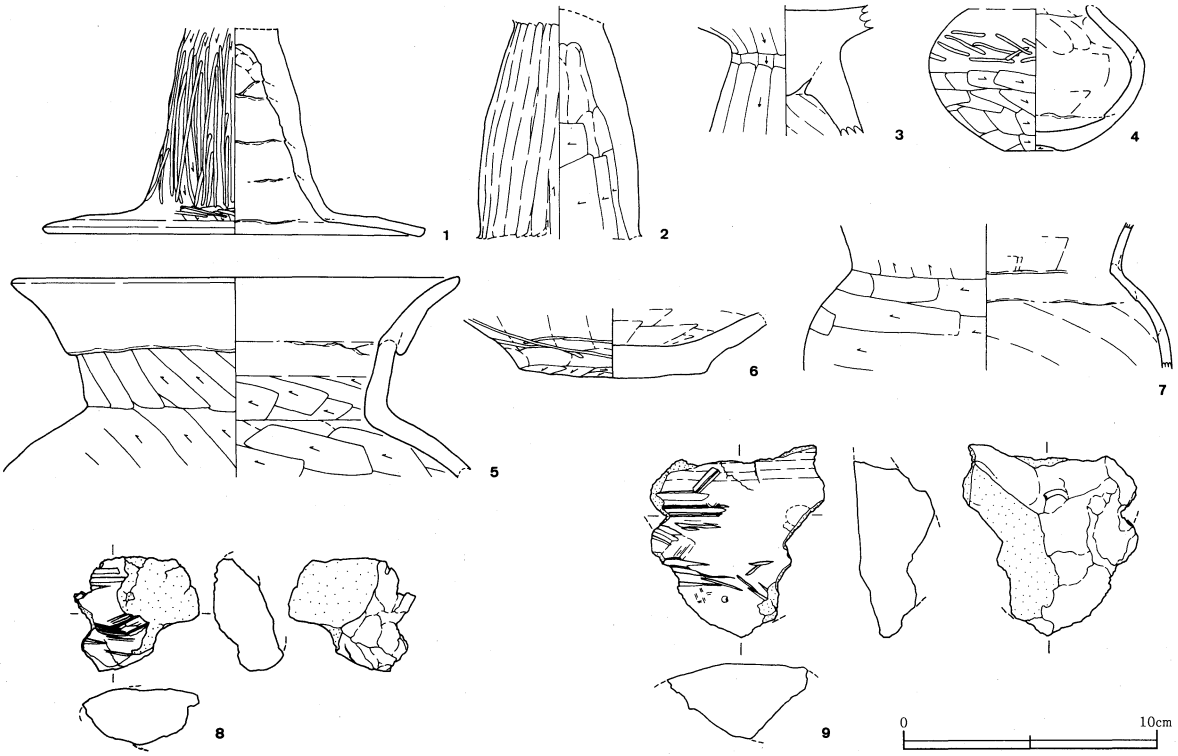
土師器以外では、焼成された粘土塊が３点ある。胎土は土師質である。接合しないが、２点（８・９）は同一個体の可能性もある。図示していない残り１点は表面が磨滅して詳細不明である。出土位置や出土状況はあきらかでなく、遺物の性格もよくわからない。



土層説明
1　暗褐色土　　ローム粒子少量含み、しまりあり。
2　褐色土　　径３～20㎜のロームブロック少量・ローム粒子微量含み、しまりあり。

0　2m

第12図　横倉戸館遺跡　SI－02　遺構



第13図　横倉戸館遺跡　SI－02　遺物

第５表　SI－02　出土遺物

番号 器種 種類	法量(cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
1 高杯 土師器	脚裾 復15.2 高 残 8.3	脚部上端内面の粘土を強くくぼませた後、下から見て反時計回りに積み上げ、倒立して脚部にする。外面は脚柱部を下へ、裾部を斜め方向に篦削りの後、裾端部に横撫で。全面を篦磨きし、脚柱部は特に密である。内面は脚柱部に指押さえ、脚裾部に横篦削りの後横撫で。	7.5YR7/6 橙色	やや粗い。白粒・細粒と透明細砂多量、白・黒細砂少量。やや硬質。	底上24cm 脚柱部全周 脚裾1/12周 「7」
2 高杯 土師器	高 残 9.2	成形時の粘土積み上げ痕を残さない。内外面に明瞭な稜を持って脚柱部から裾部が開く。外面は上へ篦削りの後、全面を下へ篦撫で。脚柱部の上下端に篦の停止痕が並んで残る。内面は上半部を強く雑に指撫で後、下半部を横篦削り。	7.5YR7/6 橙色	やや緻密。白細粒・透明細砂多量、黒細砂少量。 硬質。	底上19cm 脚柱部全周 「15」
3 高杯 土師器		おそらく脚部から杯部へ連続成形後、粘土円盤を充填。外面は全面縦篦削り。杯部内面は摩滅しているが、おそらく多方向の撫で。脚部内面は斜め指撫で。	10YR8/3 浅黄橙色	やや粗い。白細粒・透明細砂やや多量、灰色砂と黒・白細砂少量。 軟質。	底上14cm 脚柱部全周 「16」
4 小形壷 (坩) 土師器	底 2.5 大 8.6	外面は撫での後に、下半を右へ篦削り、上半部に粗い磨き。底面は円周方向の篦削りで上げ底にする。内面は下半部横篦撫で、上半部指撫で。	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗い。白細粒・透明細砂少量、白・透明砂やや少量。やや硬質。	不明 底全周 頸7/12周
5 大形壷 土師器	口 復18.0 高 残 7.8	口縁部外面の貼付帯と対応して内面にごく弱く浅い段を持つ。外面は胴部・頸部に篦削りの後、口縁部貼付・横撫で。内面は体部と頸部に斜め篦削りの後、口縁部横撫で。	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや粗い。白細粒多量、黒・透明細砂やや多量、白細砂・赤細粒少量。 やや軟質。	底上21cm 口1/8周 頸1/4周 「13」
6 甕 土師器	底 7.9	外面は胴部縦篦撫での後に胴部下端横撫で、胴部に粗い横篦磨き。底部は胴部横撫での後に、おおむね一方向の篦削り。内面は底部一方向、胴部横方向の篦撫で。積み上げ痕に沿って破損してきれいに皿状になるので、転用品の可能性もある。	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや粗い。白細粒・透明細砂多量、白・透明砂やや多量。硬質。	底上25cm 底全周 「3」
7 小形甕 土師器		外面は胴部横方向の後に、頸部縦方向の篦削り。内面は胴部に斜め撫で、頸部に横篦撫で。外面の胴～肩部にスス付着。	5YR7/6 橙色	やや粗い。白粒・細粒多量、透明砂・細砂やや多量、黒細砂少量。 やや硬質。	底上30cm 頸1/4周 「1」

番号 器種 種類	法量(cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
8 焼粘土塊 土師質	長　残5.1 幅　残5.1 厚　残2.3 重　残37.13g	不定形にこねた粘土の表面に平行線状の擦痕をつける。擦痕は端部の整わない工具？で粗くひっかくようにつける。裏面（右図）の右半部は焼成前か焼成時の破面。点描部分は焼成後の破面。	7.5YR7/6 橙色	やや緻密。白粒・細粒多量、透明細砂やや多量。 硬質。	不明 表面の1/2は焼成後の破面。
9 焼粘土塊 土師質	長　残7.7 幅　残7.0 厚　残3.1 重　残87.42g	粘土塊の左図の面を平坦な所に押しつけて不定形に仕上げる。端部の整わない工具？で粗くひっかくように平行線状の擦痕を付ける。裏面（右図）の右半部は雑にこねたままで、左半部の点描部分は焼成後の破面。	7.5YR8/4 浅黄橙色	やや緻密。白粒・細粒多量、黒・透明細砂やや多量。 硬質。	不明 裏面図の左側が焼成後の破面。

第６表　SI－02　古墳時代中期　出土遺物数一覧表

		椀形杯	模倣杯	高杯	坩(小形壺)	中形壺	大形壺	甕	小形甕	焼粘土塊	その他
土師器	口縁部			3	1		2	5	1		
	体部			脚柱３	有		有	有		3	
	底部			脚裾１	1			1			
坩は２個体。高杯は脚柱部から見て３個体分以上あり。大形壺は１個体が割れたもの。											

（２）近世の土坑と墓

ＳＫ－０１（第14図、写真図版９）

平面形が隅丸長方形の土坑である。後で述べるSK－02を参考にすると、江戸時代の墓壙と考えられる。

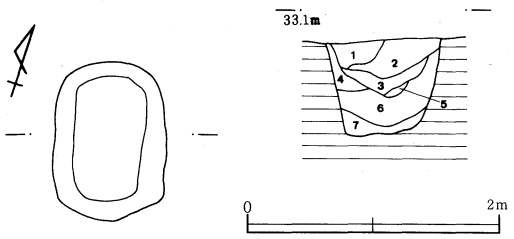
位置は調査区北半部の東寄りで、14グリッドの南部に所在する。北へ16mのところに、類似した土坑のSK－02がある。

北北西から南南東の方向（GN－15°－W）に長軸を持つ。遺構確認面での規模は長径128cm、短径92cmであり、土坑底面の規模は長径100cm、短径58cmである。確認面から底面最深部までの深さは75cmである。

断面形は逆台形で、土坑壁面の傾斜は75～80°であり、かなり急である。土坑底面には、大きな傾きや凹凸はない。底面外周部の標高は西壁際を除いて32.15mである。底面中央から西壁際にかけての部分は、それよりも３～４cmほど低くて、32.12m前後である。

埋土は、中央が低いレンズ状の層序になっている。３層と６層は径１cmを超えるローム塊を含み、１・２層にはそれが見られない。ひとつの解釈としては、３層以下が土坑を掘ってからあまり長い時間を間にあけないで埋め戻した土に由来する層であり、１・２層は内容物の腐朽に伴って上方から陥没・流入した土であると考えることもできる。埋土はすべてしまりが弱いので、それほど古い時代の遺構とは考えられない。

遺物は全く出土しなかった。SK－02と土坑の形状が似ているので、これも同じく江戸時代の墓壙である可能性が高い。



土層説明
ＳＫ－０１

1	褐色土	ローム粒子・黒色粒子多少量含み、ややしまりなし。
2	褐色土	黒色粒子多量・ローム粒子少量含み、ややしまりなし。
3	褐色土	ローム粒子・ロームブロック・黒色粒子少量含み、ややしまりなし。
4	褐色土	ローム粒子・黒色粒子少量含み、ややしまりなし。
5	黒褐色土	黒色粒子多量含み、ややしまりなし。
6	褐色土	ローム粒子・ロームブロック少量含み、しまりなし。
7	褐色土	ローム粒子少量含み、しまりなし。

第14図　横倉戸館遺跡　SK－01　遺構

ＳＫ－０２（第15図、写真図版10・18）

平面形が隅丸方形の土坑である。底面から寛永通寶が６枚出土しているので、江戸時代の墓壙と考えられる。

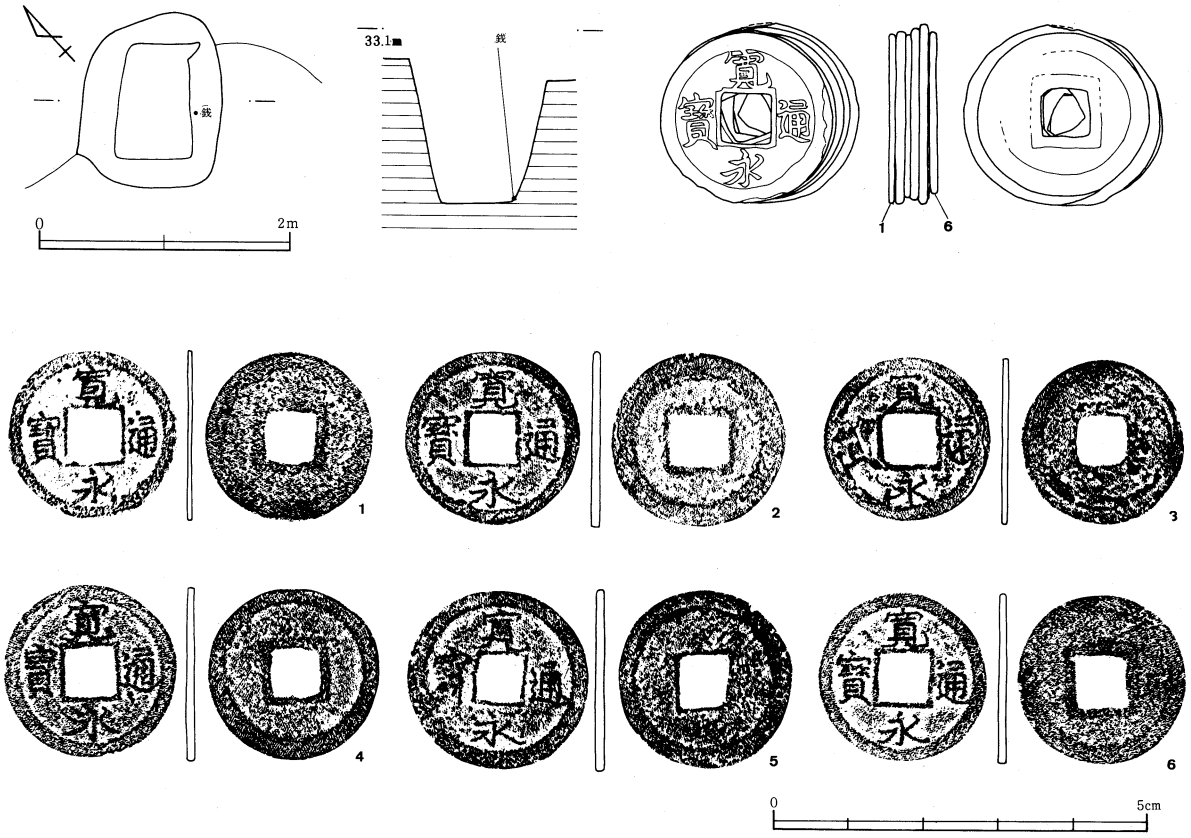
土坑の位置は、10グリッドのやや北寄りである。南へ16mのところに、同じく江戸時代の墓壙の可能性がある、類似した土坑のSK－01が所在する。SK－02の南半部は、古墳時代中期の竪穴建物跡SI－02の埋土を掘り込んで作られている。

土坑は、北東から南西の方向（GN－50°－E）に長軸を持つ。遺構確認面での規模は長径142cm、短径112cmである。底面の平面形は確認面にくらべるとよりはっきりした長方形になり、底面での規模は長軸92cm、短軸56cmである。遺構確認面から土坑底面最深部までの深さは123cmである。

土坑の断面形は逆台形で、土坑壁面の傾斜はかなり急で75～80°である。土坑底面には大きな凹凸や傾きはなく、ほぼ水平である。底面中央部から少し南西に寄った部分が標高31.67mでやや低く、中央からやや北東に寄ると31.70m、底面の外周部は31.69～31.74mでほぼ一定している。

埋土の特徴は、残念ながら土層断面の図・写真・記録等がないので、明らかでない。

出土遺物　寛永通寶が６枚重なったまま錆着して、土坑底面南東部の壁面下端付近から出土した。この他には、遺物は認められなかった。第７表１～６の銭のうち、どれが上面に向いて出土したのかは不明である。



第15図　横倉戸館遺跡　SK－02　遺構・遺物

第７表　横倉戸館遺跡　出土銭

番号	銭名	銭径（mm）（縦）	（横）	外縁内径（mm）（縦）	（横）	銭厚（mm）	量目（g）	錆着順序・方向
［SK－02出土］								
第15図１	寛永通寶	22.80	22.85	18.60	18.60	0.70～1.00	2.19	１枚目　表が上
第15図２	寛永通寶	23.55	23.45	19.45	19.30	1.25～1.30	3.09	２枚目　表が上
第15図３	寛永通寶	22.00	22.15	18.00	17.85	0.90～0.95	2.11	３枚目　表が上
第15図４	寛永通寶	23.20	23.15	18.85	18.75	0.95～1.05	2.56	４枚目　表が上
第15図５	寛永通寶	24.30	24.30	19.25	19.15	1.30～1.35	3.31	５枚目　表が上
第15図６	寛永通寶	22.75	22.65	18.80	18.75	0.95～1.05	2.12	６枚目　表が上
［遺構外　G－８出土］								
第16図22	寛永通寶	24.45	24.45	19.25	19.20	1.25～1.30	3.13	な　し

（３）遺構外出土の遺物

（第16図、写真図版18～22）

遺構外から出土した古墳時代以降の遺物について説明する。遺物の種類と量は、第９表に示した。古墳時代中期の遺物が多く、古墳時代前期、平安時代、中～近世の遺物も少量ある。

１～６は古墳時代前期の土師器である。高杯と器台は篦磨きをほとんど行わず、刷毛目調整が目立つ。１と２はかなり粗雑で、所により外面に粘土積み上げ痕跡を残す。２は杯部底面に篦削りをそのまま残している。３は脚柱の半周近くが残るが、残存部には穿孔は見られない。６の甕は特徴のある器形。作りはかなり粗雑で、口縁部は外面上端だけしか横撫でせず、刷毛目を残す。口縁端部は肥厚しないで、むしろごく弱く外反気味である。

７～15は古墳時代中期の可能性がある土師器と石製品である。11は貼付口縁の壺で、しばしば須恵器模倣とする意見が述べられる類のものかもしれない。12は底面が円盤状に突出する。13も同様だが、胴部もかなり厚手で胎土も粗いので、これは縄文土器の深鉢の可能性もある。14は石製模造品の剣形品。頭部に孔があればそこを通って破損する可能性が高いが、現状の破損面には穿孔の痕跡がみられない。側面の研磨は縦方向に近い斜め方向で、図示した側面の下半部では研磨面が２面に分割される。遺物の時期がSI－01やSI－02に近い可能性がある。15は紡錘車。滑石ではなく、磨くと光沢のある良質の石材なので、古墳時代中期の遺物とは限定できない。しかし、古墳時代後期～平安時代の出土遺物は、全くないか非常に少ないので、中期の遺物の可能性がある。

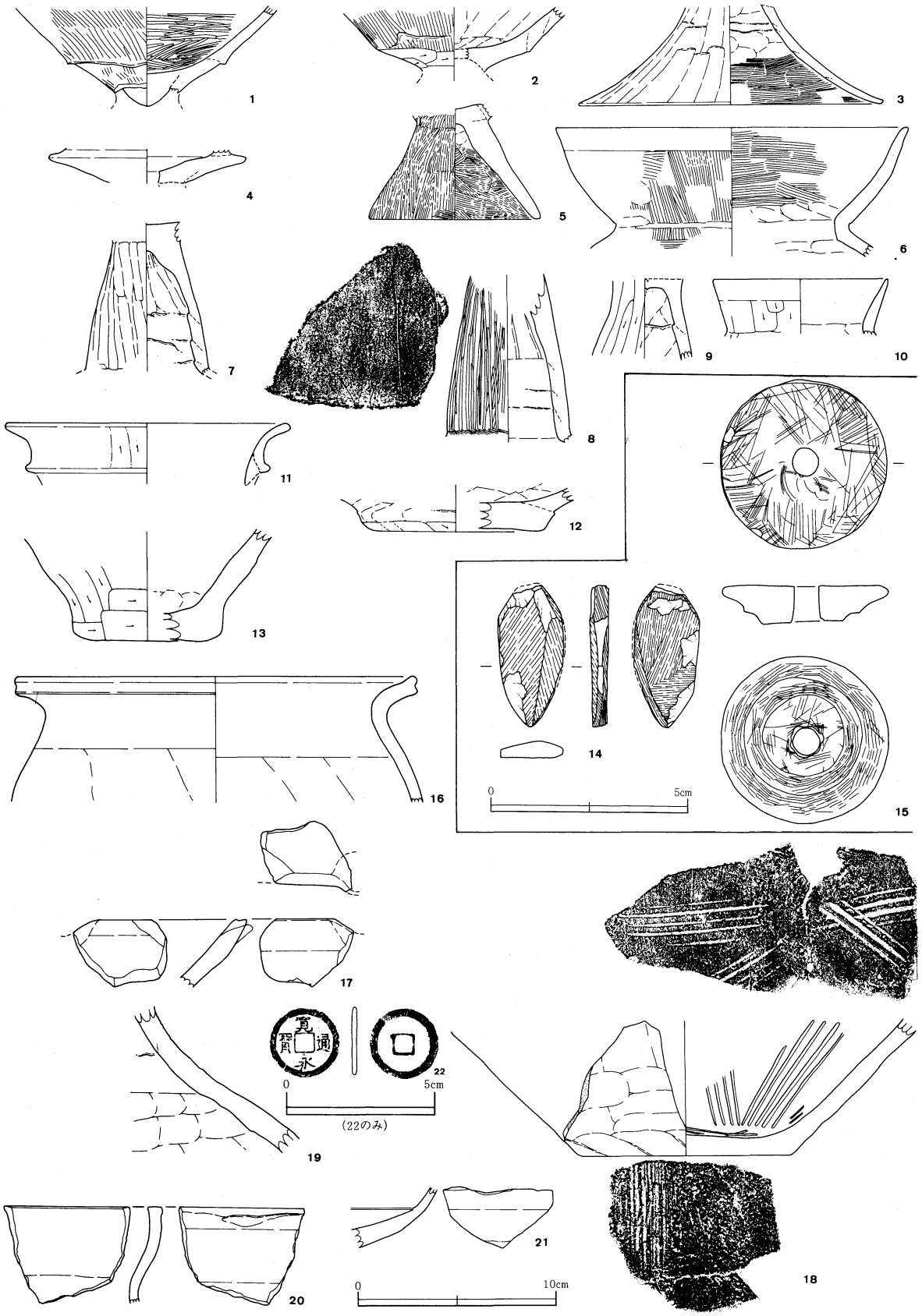
16は平安時代の土師器甕である。胎土中には白細粒と黒細砂・透明細砂が多いが雲母を含まない。平安時代の遺物は、この他には、内面篦磨き後に黒色処理をするロクロ成形の土師器杯椀類の破片が７片ある。

17～21は中世およびそれ以降の土器・陶器である。17～20は中世の可能性が高い。17と18は瓦質の擂鉢。17は片口部の破片で、破面にくらべると表面が少しいぶしたような暗色である。18は内面に擂目を持ち、焼成は軟質の還元炎焼成（瓦質）であるが、外面側はごく僅かに褐色味を帯びる。底面は工具を引きずった擦痕状の調整が観察されるが、あるいはこれは乾燥時に置いた場所と係わる板目等の圧痕であるのかもしれない。19は常滑産の大甕である。20は金色に発色した黒雲母片を非常に多く含む土師質の鍋。横倉戸館遺跡に隣接する横倉遺跡（小筆1995）や横倉宮ノ内遺跡（岩上・亀田・斎藤1995）の同質胎土・同種の品から見て、中世の内耳土鍋と考えられる。この土鍋は、図示した他に口縁部・胴部各１片が出土した。21は、見込みが丸く深い陶器皿で、近世以降の可能性がある。

第８表　遺構外出土遺物

番号 器種 種類	法量（cm）	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
1 高杯 土師器		杯部成形後、底部に粘土を充填。杯部外面にやや不整な稜を持つ。外面は杯底部に斜刷毛後、軽い撫で。杯部斜刷毛。刷毛目は深く鋭い。内面はやや雑な篦磨き。	5YR6/6 橙色	やや緻密。白粒・細砂多量、黒・透明細砂やや多量。硬質。	遺構外出土 杯底1/6周 「G－13」
2 高杯 土師器		外面は胴部に粗く深い刷毛目の後、脚部の周囲を横篦削り。内面は多方向の篦撫でで、浅い刷毛目の可能性もある。	10YR6/2 灰黄褐色	粗い。透明細砂・白細粒多量。やや硬質。	遺構外出土 杯底1/3周 「G－9」
3 高杯 土師器	裾　復15.6	外面は下へ縦篦撫で。内面は上半部横撫で後、下半部に下から見て時計回り方向の横刷毛。全体に二次焼成を受けて赤化している。	7.5YR7/6 橙色	やや緻密。白細粒多量、白砂・透明細砂やや多量。やや軟質。	遺構外出土 脚裾1/9周 脚柱5/12周 「G－9」

番号 器種 種類	法量(cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
4 器台 土師器	受部 復10.2	脚部～受部底中央まで成形後に外面に縦刷毛を施してから、受部底外周より上を成形。摩滅していて調整不詳だが、内外面ともに横撫での可能性がある。貫通孔の内面は最後に横篦削りする。	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや緻密。白細粒・細砂やや多量、黒・透明細砂少量。やや硬質。	不明 受部1/3周 番号なし
5 脚台付甕 土師器	裾　復8.8 脚高　5.0	脚部成形後、脚上端部から胴部を成形してゆく。外面は裾部横篦削りの後に、縦刷毛を施してから胴部を成形。脚内面は上端部横撫での後に中位以下横刷毛。脚底面は平坦で無文。外面側から加熱で赤化。	7.5YR7/3 にぶい橙色	やや緻密。白細粒と透明細砂やや多量、白・黒細砂少量。軟質。	不明 脚裾1/3周 番号なし
6 甕 土師器	口　復18.0	頸部内面に内傾する面を持つ。口縁端部は弱く外反し、内面は全く肥厚しない。全体として調整が雑。外面は縦刷毛の後、肩部に横刷毛、頸部に工具の角を用いた横篦撫で、口縁部に横撫で。内面は胴部に撫で、頸部に横撫で、口縁部は横刷毛の後に、下半部斜め撫で。	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや粗い。白粒・細粒多量、白・透明砂と黒細砂少量。やや軟質。	不明 口1/12周 頸1/8周 番号なし
7 高杯 土師器		脚部は倒立して成形。脚裾部と柱部の境に明瞭な稜を持つ。外面は上方向の篦撫で。内面は脚上半部に下方向の指撫でと脚上端にシボリ目。その後に脚下半の粘土を積み、雑な指押さえ。杯部内面は丁寧な撫で。	7.5YR8/6 浅黄橙色	やや粗い。白粒・細粒と白砂・透明細砂多量。軟質。	遺構外出土 脚上半の全周 「Ｇ－9」
8 高杯 土師器		脚中位が少しふくらむ。脚柱部から裾部へ明瞭な稜をもって開く。外面は脚柱部に縦篦磨きの後、脚裾部に斜め篦磨き。脚柱部に焼成前の縦位の沈線が現存二条。沈線は細くてやや鋭い。内面は脚柱部の上半にやや強い縦撫での後、下半部に雑な横撫で、脚裾部に丁寧な横撫で。	7.5YR6/6 橙色	やや緻密。白粒・細粒と透明細砂多量、黒細砂少量。硬質。	不明 脚柱部5/6周 番号なし
9 高杯 土師器		外面は縦篦削り。内面は脚部上端を指で強く撫でた後、脚部中位以下の粘土を積む。二次焼成を受けたらしく、内外全面が赤化している。	5YR8/4 淡橙色	やや緻密。白細粒多量、白粒・透明細砂やや多量。軟質。	遺構外出土 脚上部全周 「Ｇ－9」
10 小形壷 (坩) 土師器	口　復9.0	外面は頸部・胴部ともに縦篦削りの後に口縁部横撫で。内面は体部撫で、口～頸部横撫で。	10YR8/3 浅黄橙色	やや緻密。白細粒やや多量、黒・透明細砂少量。やや軟質。	遺構外出土 口1/12周 頸1/5周 「Ｇ－9」
11 中形壷 土師器	口　復14.4	口縁部は外面に粘土帯を貼り付けて成形。貼付部の下端は突帯状になる。外面はカーブに合わせて少し抉るように縦篦削りの後、横撫で。内面は横撫で。	10YR8/4 浅黄橙色	やや粗い。白粒・細粒やや多量、黒・透明細砂少量。軟質。	遺構外出土 口1/8周 「Ｇ－20」
12 甕 土師器	底　復8.8	底部外面は一方向の篦削り、胴部外面は指撫での後、下端を斜め篦削り。内面は多方向の篦撫で。	10YR8/3 浅黄橙色	やや緻密。白細粒多量、透明細砂やや少量。軟質。	遺構外出土 底1/4周 「900731」
13 甕 土師器	底　復7.6	厚く、底部の中心部はやや上げ底気味。内面は剥離が著しく調整不詳だが、底部付近は下へ指押さえ。外面は縦方向の篦削りの後、胴部下端に横方向の篦削り。縄文土器の可能性もある。	7.5YR7/4 にぶい橙色	粗い。白砂・細砂・細粒、透明細砂多量。やや軟質。	遺構外出土 底1/3周 「Ｇ－20」
14 剣形品 石製模造品	長　残3.7 幅　1.7 厚　0.45 重　残4.34g	穿孔を持たない可能性がある。やや丁寧に研磨して、浅く擦痕を残す。表面は明瞭な鎬の左右をそれぞれ一方向、裏面は平坦な面を三方向に、それぞれ研磨する。側面は縦方向に近い斜方向に研磨し、図示した長側面の下半部では２面に縦に分割して磨く。切削成形時の剥離面を残す部分がやや多いので、未製品の可能性もある。	5BG5/0.5 青灰色	劈開が発達し、雲母を多量に含む片岩。	遺構外出土 ほぼ完形 上端と右側面は破損の可能性あり 「Ｇ－8」
15 紡錘車 石製品	最大径　4.2 下面径　2.1 高　1.0 重　23.69g	下面側（段のある側）から穿孔。初孔径8.3㎜、終孔径7.6㎜。上面は多方向に研磨して、細い条線状の擦痕が著しい。下面は、上面よりやや粗くて深い条線状の擦痕を残すように、円周方向に研磨して２段状に仕上げる。下面の軸孔の周囲には、孔の外周の接線の方向に伸びる擦痕が多い。外周部や下面の稜の部分は摩滅して丸味を持ち、擦痕が消えて光沢を持つ。	2.5GY2/1 黒色	緻密。均質で光沢を持ち、少し緑色を帯びる。蛇紋岩か？。	表面採集 完形 「Ｇ－8表採」
16 甕 土師器	口　復20.6 大　残21.2	胴部径が口径よりもわずかに大きい。口縁部は内面に弱い稜を持ってつまみ上げ、外面端部下位に明瞭な凹線を持つ。外面は肩部に方向の不明瞭な丁寧な撫での後、頸部以上に横撫で。内面は体部撫での後、頸部以上に横撫で。外面肩部にススが少々付着。	10YR7/4 にぶい黄橙	緻密。白細粒と黒・透明細砂と白砂色が少量。やや硬質。	遺構外出土 口1/4周 「Ｇ－20」
17 擂鉢？ 瓦質		口縁部を外へ押し広げた片口部のつけねが一部残る。内外面ロクロ撫で。破面に比べて器表内外面が少しいぶしたように暗い色。	7.5YR4/1 褐灰色	緻密。白細粒やや少量、透明細砂少量。軟質。	不明 口1/12周未満 番号なし



第16図　横倉戸館遺跡　遺構外出土遺物（古墳時代以降）

番号 器種 種類	法量(cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
18 擂鉢 瓦質	底　復10.6	成形に回転を用いない。外面は体部下端に強い斜め撫で、体部下半にやや雑な指押さえ、体部上半に縦撫で。底面は製作台から切り離さないではずした後、一方向の撫でおよび刷毛目状の擦痕。内面は底面多方向、体部横方向の撫での後、３～５本が１組の工具で、底部二方向、体部放射状の擂目。体部の擂目は底面から高さ6cmまで。内面体部下端付近が使用により摩滅。外面図左端の割れ口に黒色有機質がやや厚く付着し、接合補修の可能性あり。	10YR6/3 にぶい黄橙色	緻密。白細粒・透明細砂少量、黒・白細砂ごく少量。軟質。	不明 底5/12周 番号なし
19 大甕 陶器		外面は丁寧な撫でで、撫で方向不詳。内面は胴部がやや雑な凹凸面で、頸部横撫で。外面肩部に自然釉と灰がまばらに付着。内面無釉。 常滑産。	内2.5Y5/2 暗灰黄色 外5Y5/2 灰褐色	緻密。白細砂少量。硬質。	不明 頸部小片 番号なし
20 鍋 土師質	口　復約30	内面下半は回転を利用しない横撫で。他はロクロ撫で。口縁端面は水平に仕上げる。外面全面にスス付着。	7.5YR5/4 にぶい褐色	粗い。金色に発色した黒雲母の細片が多量。半透明の白礫やや多量。やや硬質。	不明 口1/12周未満 番号なし
21 皿 陶器	高　残3.0 大　復18以上	体部上半は薄く、底付近は厚くなる。内面に浅い段を持つ。内外面ロクロ撫で後、釉を施す。外面は底部付近が無釉で、体部は白色のやや薄い長石釉。内面は褐色のやや薄い鉄釉。	10YR6/4 にぶい黄橙色	緻密。硬質。	不明 体1/10周 番号なし

※ 22は第７表を参照（P.39）

第９表　遺構外出土遺物数一覧表（古墳時代以降）

器質	部位	古墳前期				古墳中期					平安時代		中世		中世以降					時代不明
		高杯	甕	台付甕	器台	椀形杯	高杯	坩	壺	甕	杯・椀	甕	擂鉢	大甕	瓦	鍋か焙烙	かわらけ	皿	碗	器種不明
土師質	口縁部	1	1			1	7	2	3	8	3	1				4				10
	体部	2	14		1		脚柱９	2		有	4					1				
	底部	3		2			脚裾６	1		25							1			
瓦質	口縁部												2							
	体部												4		1					
	底部												2							
陶器	口縁部																			
	体部													2				1	1	
	底部																			
						剣形石製模造品の未製品１点。 石製紡錘車１点も古墳時代中期か？									寛永通寶１点					

第４章　まとめ

第１節　旧石器時代

旧石器時代の遺物が７点だけ確認されたが、遺物集中地点は確認されなかった。10グリッドで、古墳時代および近世の遺構であるSI－02・SK－02から出土している遺物については、この付近に遺物が包含されていた可能性もある。

遺物出土層位は不明である。横倉戸館遺跡では標準土層を説明できる記録がないが、同じ台地上ですぐ北に隣接する横倉遺跡（小筆編1995）と大きな違いはないものと考えられる。それによると、鹿沼軽石層より上に厚さ約１ｍのハードローム層があり、このほぼ中央に厚さ約25cmの暗色帯がみられる。

横倉戸館遺跡で古墳時代の竪穴建物跡SI－02に重複する攪乱・深掘部分の壁面のローム層を写真で判断すると、暗色帯よりも上にSI－02が掘り込まれているように見られる。しかし、SI－02の柱穴とSK－02およびこれらと重複する攪乱は、暗色帯ないしその下まで掘り込まれている可能性があるので、旧石器時代文化層の層準を推定することは難しい。

遺物は剥片と石核だけで、製品は出土していない。石材は黒曜石・珪質頁岩・流紋岩がある。珪質頁岩と流紋岩は縦長剥片が目立ち、10グリッドに見られた。黒曜石製の遺物は３点で、高原山産と信州産があり、信州産も各々の産地が異なるようである。

第２節　縄文時代

縄文時代の遺構は、後期前葉の埋甕を２基調査した（SK－03・04）。SK－03は称名寺式でも新しい段階のものである。土器の系統は全く異なるが、SK－04もそれほど離れない時期のものと考えられる。２基の埋甕に伴う集落は、表面採集で確認されている遺跡の範囲（第３図）から見て、今回の調査区よりも東側に広がっていたのであろう。

遺構に伴わない縄文時代の遺物としては、縄文時代早期から後期までの各時期の遺物が出土した。これらの遺物は、北側に隣接する横倉遺跡（小筆編1995）と関連する集落として理解できる部分も多いようである。

早期～中期の遺物は少量しか見られない。通常は普遍的に見られる加曽利Ｅ式期の遺物も、従来の分布調査でも今回の発掘調査でも出土していない。この間の集落は、横倉遺跡のほうに中心があったようである。

後期前葉の、称名寺式の新しい段階から堀之内１式にかけての時期の遺物が、今回の調査では最も多く出土した。これは、埋甕の時期ともほぼ一致する。この時期の遺物は横倉遺跡でも多く見られる。

横倉戸館遺跡は従来から加曽利Ｂ式土器が多く散布している集落として知られていた（竹澤1981）。しかし、今回の調査で出土したこの時期の遺物はわずか１片だけしかない。また、横倉遺跡でも知られていない。横倉戸館遺跡の東半部の台地先端寄りに、この時期の集落が形成されていたものと考えられる。

第３節　古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴建物跡を２棟調査した（SI－01・02）。出土した土師器からみて、２棟とも古墳時代中期中葉の建物である。この２棟は主軸をおおよそ揃えていて、同時に存在していた可能性も考えられる。

遺跡の時期　横倉戸館遺跡の周辺地域の古墳時代中期の土師器の変遷を、集落名で代表させると、五料遺跡（中山・片柳・片根1993）→溜ノ台遺跡（竹澤他1990）→塚崎遺跡（岩上他1994c）→田間東道北遺跡（岩上他1994b）の順序を考えることができる。中期の終末は、古市・百舌鳥古墳群と剣・鋲留短甲の生産が衰退するTK-47型式期までとし、特定地域の須恵器模倣土師器杯の出現をもって区切る立場はとらない。代表的な遺構・一括遺物を次に示す。

五料遺跡段階……五料SI－28

溜ノ台遺跡段階……溜ノ台１・41・44号住居跡

塚崎遺跡段階……塚崎SI－002・004・007, 向野原SI－01（川原他1985), 宮内２号墳周溝斜面（鈴木1985）

田間東道北遺跡段階……田間東道北SI－005・008・009, 喜沢海道間５・８号住居跡（野口1986）

横倉戸館遺跡の竪穴建物跡の土師器は、このうちの溜ノ台遺跡の段階に該当すると考えている。

五料遺跡の段階から続く要素を次に挙げる。１）飲用器・食用器の主体が小形壺と高杯で、椀形杯や鉢類は少ない。２）高杯が古い特徴を持つ。具体的には、篦磨きを多用し（第17図23・31)、脚部に穿孔し（23)、脚部中位が膨らむもの（32）をまだ残している。３）貼り付け口縁の壺（27・29・36）が多い。

横倉戸館遺跡に見られる新しい要素には次の点がある。１）深身の椀形杯（安永1992）を含む（22)。２）小形壺の磨きが省略されて粗くなり、体部が偏球形につぶれたもの（34）がみられる。３）SI－01・02ともに磨かない高杯の方が多くなり（24・25・33)、SI－01の高杯（23）は脚の孔が退化して貫通していない。脚部の孔が貫通しない高杯の例は、栃木県赤羽根遺跡第26号住居跡にもある（岩淵他1984)。

つづく塚崎遺跡の段階になると、１）高杯と小形壺が減り、椀形杯（39～50・70～75）を主な食器として使うようになる。これは、手持飲食兼用器（椀形杯）が置食器（高杯）と手持飲用器（小形壺）を駆逐している状況である（内山1997)。２）初現的な模倣杯が加わる（38・69)。これは、外面に稜を持って口縁部が内側へ折れる、平底か上げ底の杯が多い。さらに田間東道北遺跡の段階には、TK-23～TK-47型式の須恵器杯を忠実にまねた模倣杯（82・83・116等）や、短脚高杯（103～106）が現れ、長脚高杯は衰退する。これらの状況は、横倉戸館遺跡にはまだ見られない。

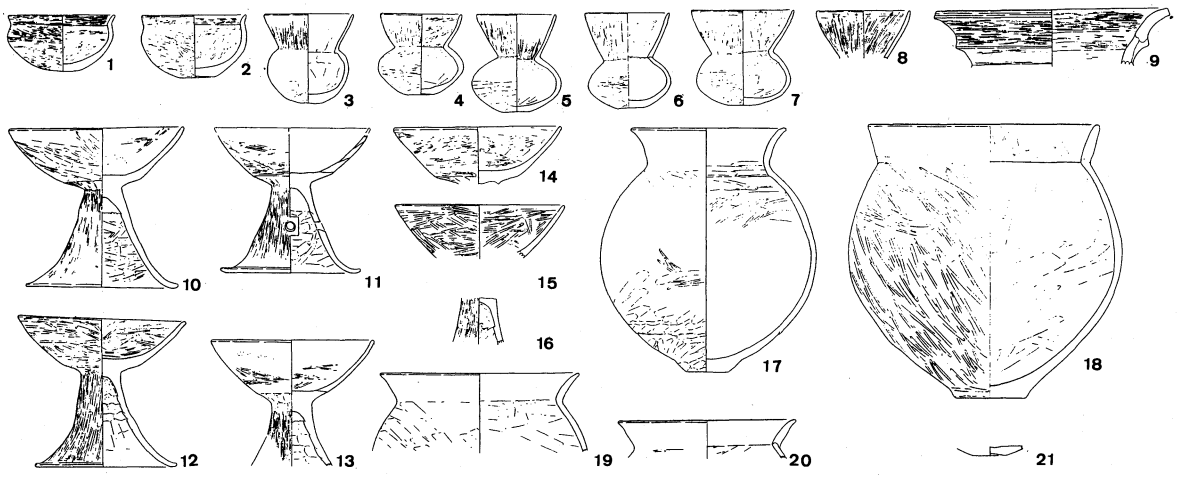
以上の点や、椀形杯が丸底化していないこと（坂口1987,安永1992）から判断して、溜ノ台遺跡44号住居跡や、栃木県岩舟町赤羽根遺跡のⅣ期（岩淵他1984)、栃木県宇都宮市権現山北遺跡の２号・５号住居跡（大島編1979,安永1992）に近い段階に横倉戸館遺跡のSI－01・02を位置づけたい。

横倉戸館遺跡SI－01・02の時期は、須恵器が倭に現れる頃か、それに少し遅れる時期と考えられる。並行する権現山北遺跡２号住居跡にはTK-73またはTK-216型式、後続する向野原遺跡SI－01と宮内２号墳（68）にはTK-208型式の須恵器が伴っている。

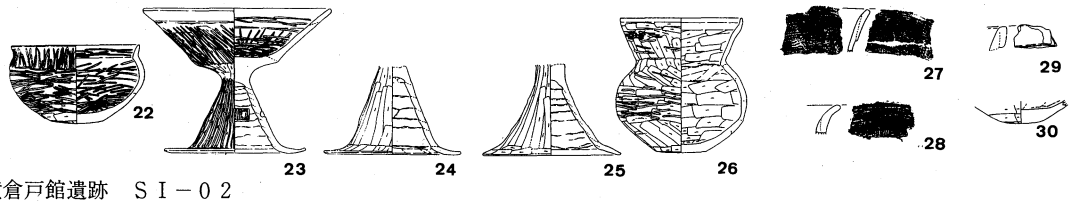
集落の性格　古墳時代中期の横倉戸館遺跡は、大規模な集落ではなかった可能性がある。竪穴埋土中の遺物が少なく、調査区内に同時期の遺構が他になく、調査前には古墳時代中期の遺物が知られないで前期・後期の遺跡とされていたことから推定できる。調査区のすぐ東側に横倉戸館７号墳が隣接していることや（第３図)、横倉戸館古墳群を「それほど新しい時期の古墳群ではない」（森田1981,p.568）と考える意見を参考にすると、SI－01・02と古墳群との間に何らかの関係を想定することもできるが、横倉戸館古墳群や７号墳の内容を明らかにできないうちは、想定にとどまる。

横倉戸館遺跡の周辺には、古墳時代中期前～中葉の遺跡は少ない。五料・溜ノ台・横倉戸館遺跡の他に、亀屋遺跡の滑石製模造品工房SI－01・02があげられる（野口他1991)。亀屋遺跡のSI－02には、須恵器を模倣した口縁部を持つ小形壺がすでに現れているので、溜ノ台遺跡の段階に並行する可能性がある。今のところ、

溜ノ台遺跡　第４４号住居跡

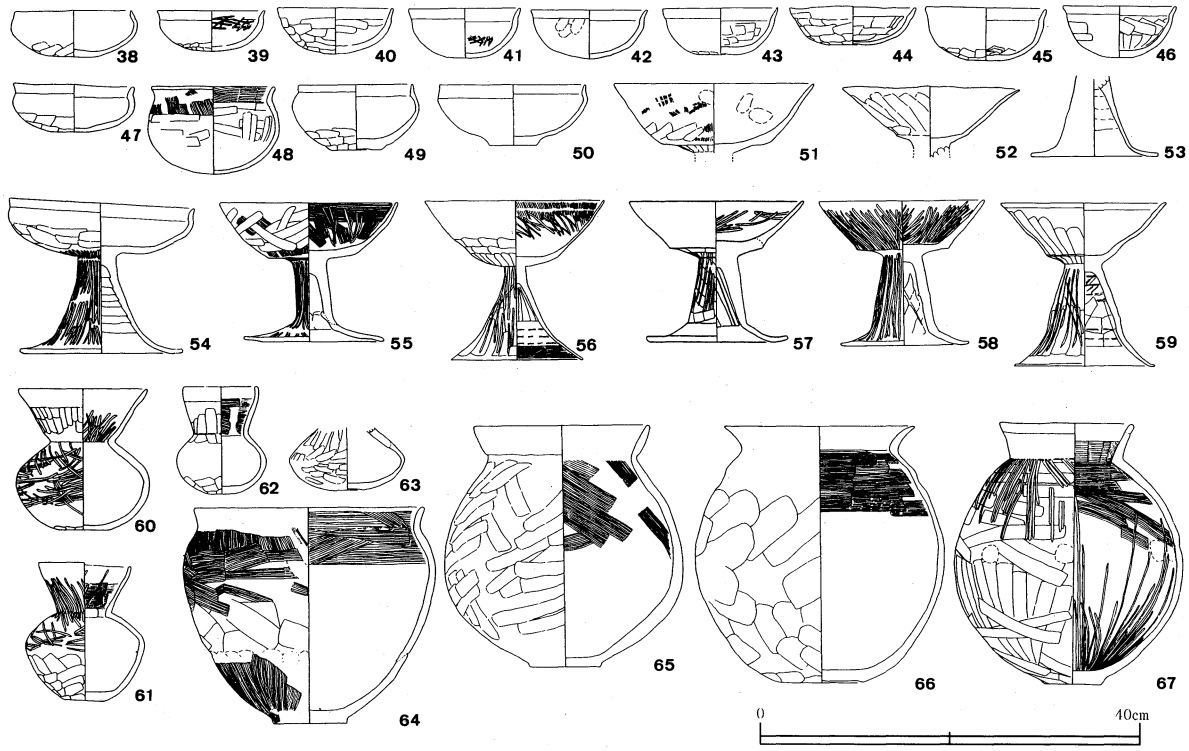


横倉戸館遺跡　ＳＩ－０１



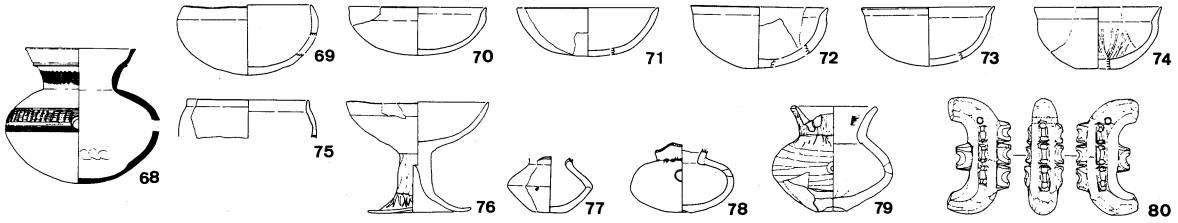
横倉戸館遺跡　ＳＩ－０２

塚崎遺跡　ＳＩ－００７

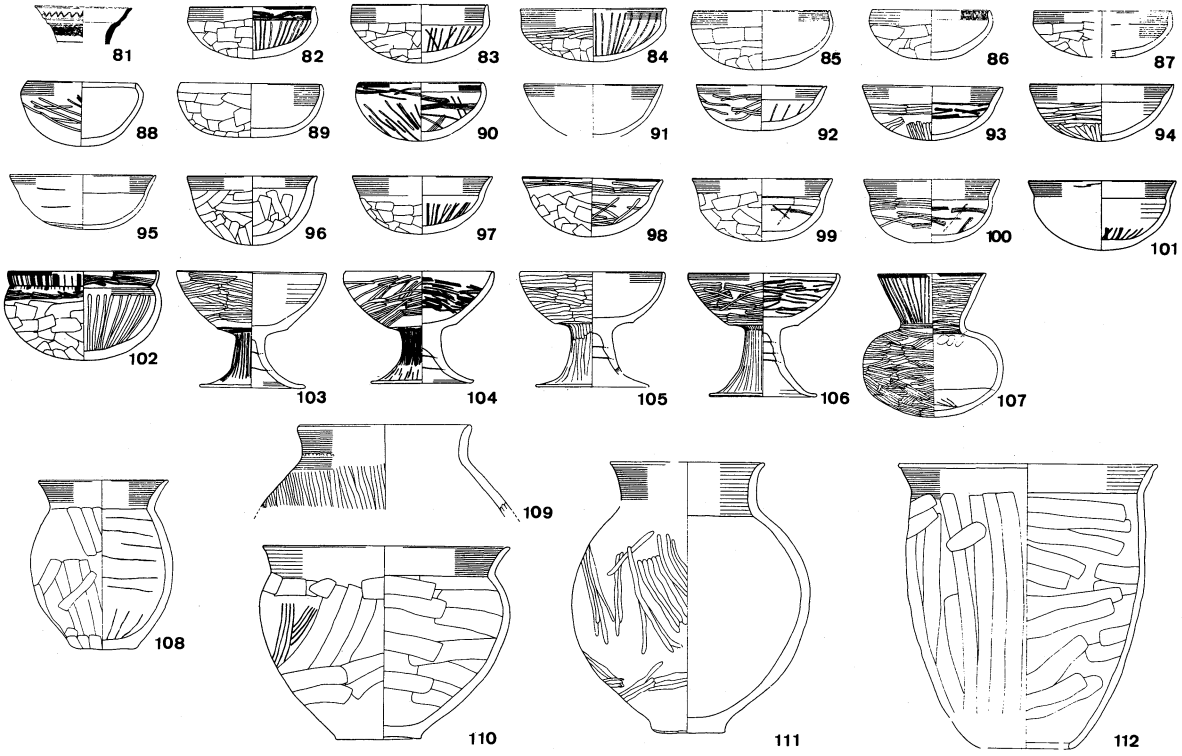


第17図　古墳時代の土器比較図（１）

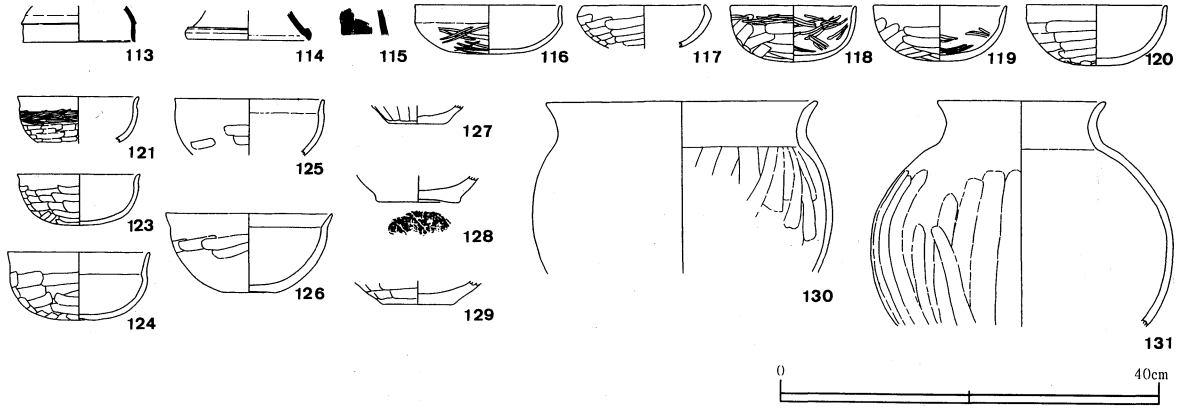
宮内２号墳



喜沢海道間遺跡　８号住居跡



田間東道北遺跡　ＳＩ－００８



第18図　古墳時代の土器比較図（２）

小山市周辺の模造品製作遺跡では亀屋遺跡が最も古い。横倉戸館遺跡も、集落が増加する以前の、この段階の状況を示している。

中期後葉である塚崎遺跡の段階からは集落数が増える。滑石製模造品製作遺跡も増えて江川（西仁連川）の流域に集中し、向野原（川原他1985）・西山（秋山1988）・八幡根（内山他1997）・善長寺（和田1989）・田間東道北（岩上他1994b）・田間前畑（p.13参照）・西裏（斎藤1996）・塚崎（岩上他1994c）・金山（津野1994,1996）の各製作遺跡が成立する。これらの遺跡では、塚崎遺跡の段階（向野原・西山・塚崎遺跡、善長寺遺跡5号工房、西裏遺跡の一部、金山遺跡のⅣ区・Ⅹ区）から、中期末葉の田間東道北遺跡の段階（八幡根・善長寺・田間東道北・西裏の各遺跡）まで滑石の搬入（篠原1996）と加工を続ける。後期からは粘板岩製模造品に移行し、八幡根遺跡SI－49Aにその製品が見られる。

模造品生産の盛行期の大形古墳は付近に見られない。滑石製子持勾玉（第18図80）を出土した宮内２号墳（墳径28m）は西に5km、滑石製刀子を出土した向原富士見浅間塚古墳（墳径46m）は東に4.5km離れている。おそらく田間東道北遺跡の段階になってから、北西に約10km離れて、墳長120mの摩利支天塚古墳が現れるが、まもなく滑石の搬入と加工は衰退する。有力古墳を造らない状況は、７世紀前半の八幡根遺跡の土師器生産でも同様である。手工業生産を管理する人物の性格を反映する現象である（浅香1971, p.８）。

横倉戸館遺跡のSI－01・02では石製模造品を製作していない。８グリッドの出土遺物に穿孔のない剣形品が１点あるが、遺構に伴うものではない（第16図の19）。隣接する横倉遺跡でも大形の未製品が採集されている（小筆編1995, p.114）。これらの遺物は、横倉の台地上でも、石製模造品工房が営まれていた可能性を示している。

第４節　古代以降の調査成果

古代・中世の遺構は、今回の調査区内では認められなかった。遺物が少量出土しただけである。

平安時代の土師器は、９世紀代の遺物と考えられる。口縁部を明瞭に立ち上げる常総型甕（第16図16）と、ロクロ成形で内面篦磨き・黒色処理の杯が見られる。

遺構に伴わないで出土した中世の遺物には、在地産の瓦質土器（第16図17・18）・土師質土鍋（第16図20）と、常滑産の大甕（第16図19）がある。横倉戸館遺跡の土師質土鍋は、北方にある横倉遺跡（小筆1995, pp.53-54,106）や、南方にある横倉宮ノ内遺跡（岩上・亀田・斎藤1995）から出土している内耳土鍋と同種である。両遺跡の年代は15～16世紀と考えられる。これらは、体部の上位を内彎させ、口縁端面を平坦に仕上げ、金色に発色した黒雲母を多量に含む。ある時期に常陸かその周辺で生産された可能性がある。

関東の在地系の瓦質焼成の鉢（第16図18）が擂目を持つことや、内耳鍋が残存するらしいことから、浅野・服部（1995, pp.39-40）の第８期（15世紀中葉～16世紀後葉）のうちでも、16世紀中葉までに相当する遺物の可能性がある。横倉遺跡や横倉宮ノ内遺跡の集落や墓地とかかわるものかもしれない。

近世の遺構としては、江戸時代の墓壙２基を調査した（SK－01・02）。そのうち１基（SK－02）は底面に寛永通寶６枚を伴うが、他には遺物が見られない。この他に、遺構外から陶器皿破片が出土している。

〔参考文献〕

秋山　隆雄　1988　『西山遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第21集　小山市教育委員会

阿久津　久　1992　「猿島郡三和町尾崎浜ノ台窯跡調査報告」『三和町史』資料編　原始・古代・中世

浅井　哲也　1992　「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」『研究ノート』創刊号　茨城県教育財団　水戸 pp.81-110.

浅井　哲也　1993　「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」『研究ノート』２　茨城県教育財団　水戸 pp.145-192.

浅香　年木　1971　『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局 pp.１-12

浅野晴樹・服部実喜　1995　「Ⅱ 各地の土器様相 ３.関東」中世土器研究会編　『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　京都 p.39

今井　　堯　1980　「古墳時代の結城地方」結城市史編さん委員会『結城市史』第四巻　古代中世通史編　結城市

岩上照朗他　1988　『一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過』栃木県埋蔵文化財調査報告第95集　財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗他　1989　『一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過（昭和63年度）」栃木県埋蔵文化財調査報告第103集　財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗他　1990　『一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過（平成元年度）」栃木県埋蔵文化財調査報告第110集　財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗他　1991　『一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過（平成２年度）」栃木県埋蔵文化財調査報告第120集　財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗・津野　仁・斎藤　弘　1993　『大境遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第136集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗他　1994a『寺野東遺跡―発掘調査概要報告―』栃木県埋蔵文化財調査報告第152集　栃木県教育委員会・小山市教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗・篠原祐一・亀田幸久・太田嘉彦・斎藤　弘　1994b　『田間東道北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第149集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗・篠原祐一・斎藤　弘　1994c　『塚崎遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第150集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗・亀田幸久・斎藤　弘　1995a　『横倉宮ノ内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第161集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

岩上照朗・仲山英樹　1995b　『長福城跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第158集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

岩淵一夫・田代隆他　1984　『赤羽根』栃木県埋蔵文化財調査報告第57集　栃木県教育委員会

内山　敏行　1997　「手持食器考」『Hominids』001　ＣＲＡ

内山敏行・飯塚俊昭・亀田幸久・岩上照朗　1997　『八幡根遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第189集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

大金宣亮・石橋知明・中山　晋・塚本師也・篠原祐一　1993　『成沢遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第138集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

大島和子編　1979　『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第５集　宇都宮市教育委員会

小山市史編さん委員会　1981　『小山市史』史料編　原始・古代　小山市

小山市史編さん委員会　1980　『小山市史』史料編　中世　小山市

小山市史編さん委員会　1984　『小山市史』通史編　自然・原始・古代・中世　小山市

小山市史編さん委員会　1984　『小山市史』通史編１　史料補遺編　小山市

小山市教育委員会社会教育課編　1978　『小山市遺跡分布図・地名表』小山市文化財調査報告書第４集 pp.68,95.

亀田幸久編　1996　『八幡根東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第181集　栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団　宇都宮

川角　寅吉　1897　「汀家漫録」『東京人類学会雑誌』13-140　東京人類学会 pp.67-74.

川原由典・初山孝行・芹澤清八・藤田典夫　1985　『鷹の巣前遺跡・本郷前遺跡・向野原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第70集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

小筆一成編　1995　『横倉遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第182集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

斎藤　弘編　1996　『西裏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第180集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

坂口　　一　1987　「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』４　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.28-48.

坂口　　一　1991　「土師器型式変化の要因――群馬県における出現期の須恵器模倣土師器の様相――」『研究紀要』８　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.53-62.

篠原　祐一　1995　「臼玉研究私論」『研究紀要』３　財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.17-49.

篠原　祐一　1996　「剣形模造品の製作技法」『研究紀要』４　財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター pp.1-20.

鈴木　一男　1985　『宮内北遺跡緊急発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第16集　小山市教育委員会

鈴木　一男　1993　『小山の遺跡２―10年間の発掘成果―』小山市立博物館

鈴木　一男　1994　「宮内５号墳墳形確認調査」『小山市立博物館報』11　小山市立博物館

竹澤謙・塚原孝一・阿部　茂・野崎　進・後藤信祐　1990　『溜ノ台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第107集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

田熊　清彦　1988　『下野国府跡Ⅷ　土器類調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告第90集　栃木県文化振興事業団

田熊清彦・梁木　誠　1990　「栃木県の黒色土器――奈良・平安時代を中心に――」『東国土器研究』３　東国土器研究会　浦和 pp.41-54.

竹澤　　謙　1981　「戸館遺跡」『小山市史』史料編　原始・古代　小山市 pp.559-561.

津野　仁編　1993～1997　『金山遺跡』Ⅰ～Ⅴ　栃木県埋蔵文化財調査報告第135・148・160・179・187集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

鶴見貞雄・安田厚子　1980　「原始時代の結城地方」結城市史編さん委員会『結城市史』第四巻　古代中世通史編　結城市

鶴見貞雄・竹内　照　1995　「原始 古代」結城の歴史編さん委員会『結城の歴史』結城市 pp.9-83.

栃木県教育委員会事務局文化課編　1992　『栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔平成２年度〕』栃木県埋蔵文化財調査報告第122集 p.90.

栃木県教育委員会事務局文化課編　1982　『栃木県の中世城館跡』栃木県教育委員会

永井久美男編　1994　『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会　尼崎 pp.9-12.

中山　晋・石川　均・橋本澄朗・田代　隆　1981　『下都賀郡国分寺町柴工業団地内遺跡調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告第43集　栃木県教育委員会

中山　晋・片柳　茂・片根義幸　1993　「五料遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報17　平成５年度(1993)』栃木県埋蔵文化財調査報告第153集　栃木県教育委員会 p.22.

野口　静男　1986　『喜沢海道間遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第17集　小山市教育委員会

野口静男・三沢正善・篠原祐一　1991　『亀屋・西黒田遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第27集　小山市教育委員会

平井　聖・村井益男・村田修三編　1979　『日本城郭大系』第４巻　茨城・栃木・群馬　新人物往来社　東京 pp.163-306.

福田定信・三沢正善・秋山隆雄・野口静男　1992　『下犬塚遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第29集　小山市教育委員会

町田　勝則　1996　「石器の研究法――報告文作成に伴う観察・記録法１――」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター pp.139-171.

三沢　正善　1982　『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告書第11集　小山市教育委員会

三沢正善・大塚昌彦　1987　『乙女不動原北浦遺跡Ｂ地点発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第18集　小山市教育委員会

三沢　正善　1990　『八幡根東遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第24集　小山市教育委員会

南河内町史編さん委員会　1992　『南河内町史』史料編１　考古　南河内町

森田　久男　1981　「戸館古墳群」『小山市史』史料編　原始・古代　小山市 pp.561-568.

安永　真一　1992　「二宮町高田出土の古墳時代中期の土師器」『栃木県考古学会誌』第14集　栃木県考古学会　宇都宮 pp.101-118.

結城市教育委員会　1984　『結城市遺跡分布図・地名表』結城市文化財調査報告書第２集

結城市史編さん委員会　1980　『結城市史』第四巻　古代中世通史編　結城市

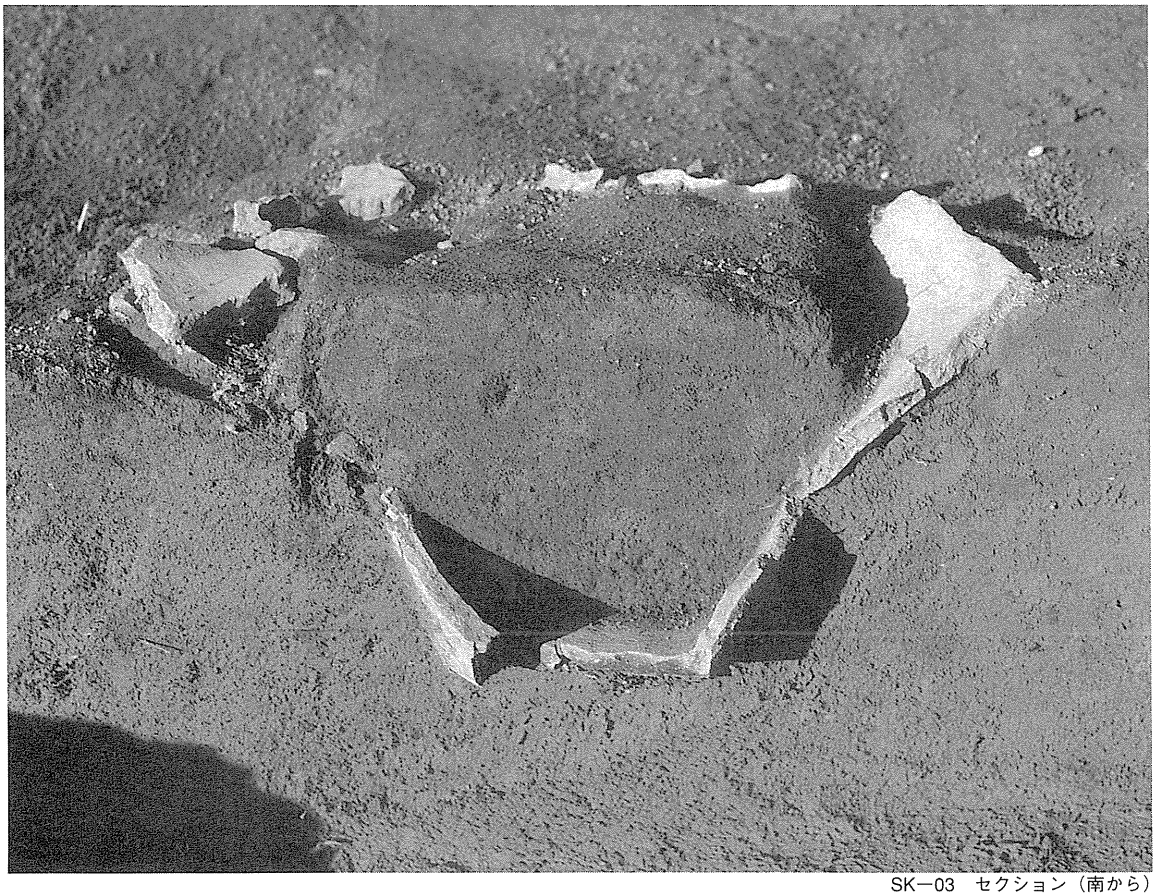
結城の歴史編さん委員会　1995　『結城の歴史』結城市

鷲城・祇園城跡の保存を考える会　1995　『鷲城・祇園城・中久喜城』随想舎　宇都宮

和田　雄次　1989　「善長寺遺跡」『一般国道４号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書２　結城地区　本田遺跡・善長寺遺跡・小田林遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第51集　財団法人茨城県教育財団 pp.31-255.

写　真　図　版

SK−03　遺構確認状況（北西から）



SK−03　セクション（南から）

図版2　縄文時代　埋甕

SK−03　遺物出土状況（南から）

SK−03　完掘（南から）

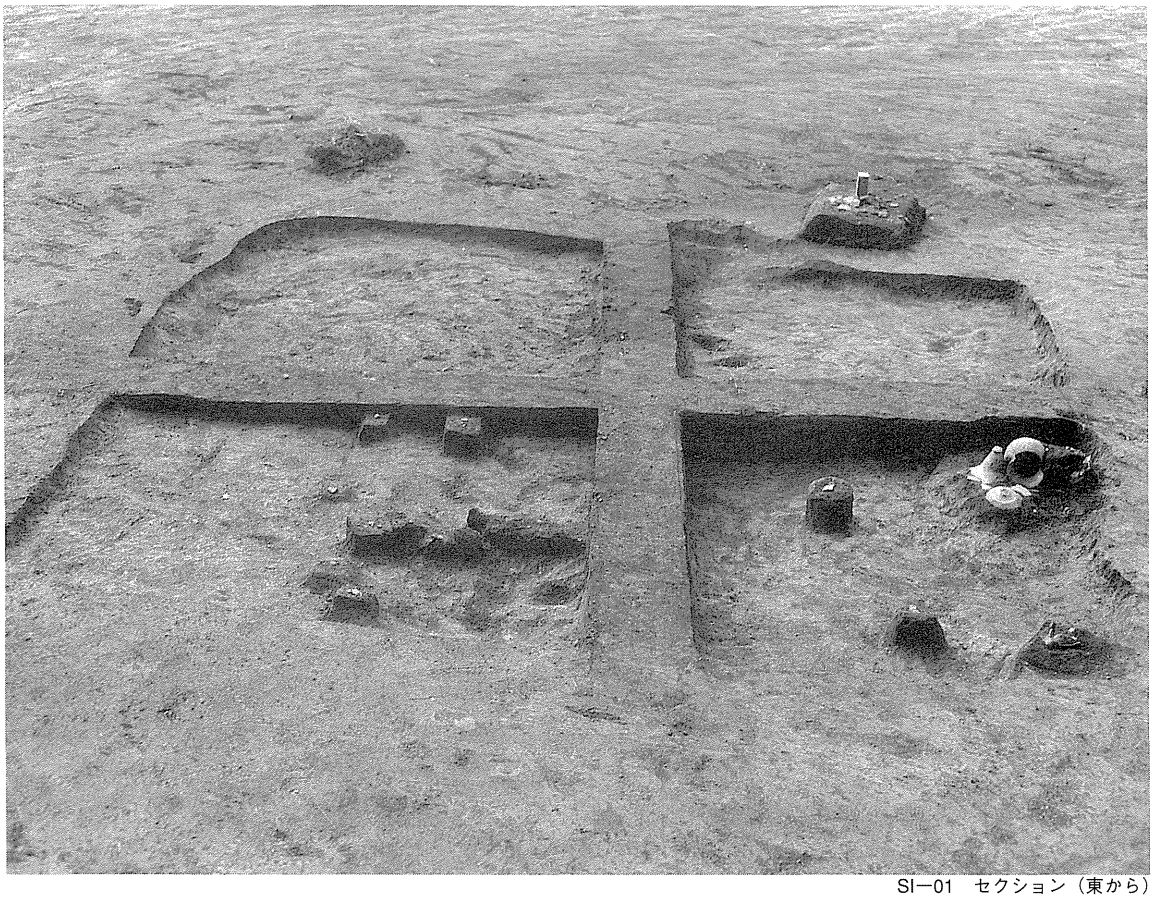
SK−04　（北東から）

SK−04　セクション（北東から）

図版4　縄文時代　埋甕

SK－04　遺物出土状況（北東から）

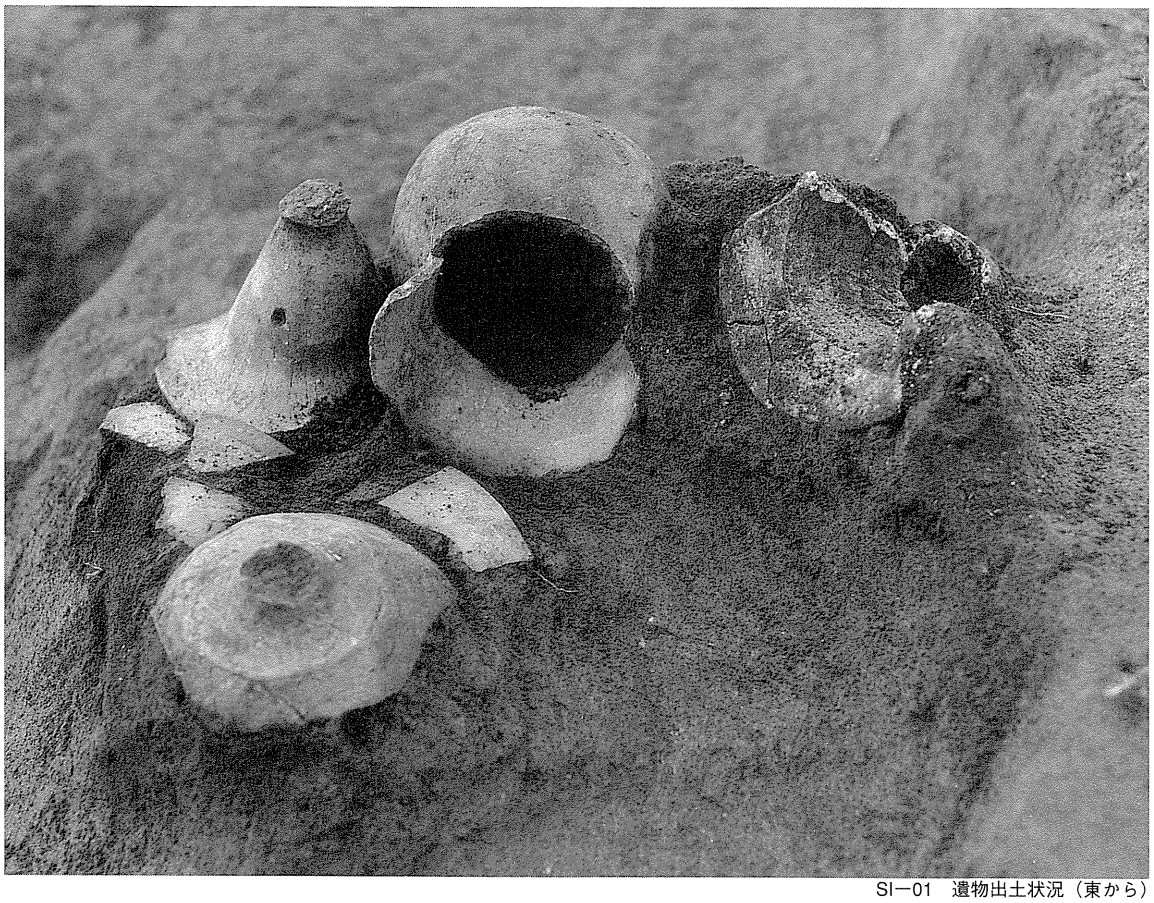
SK－04　完掘（北東から）



SI−01　セクション（東から）

SI−01　遺物出土状況（東から）

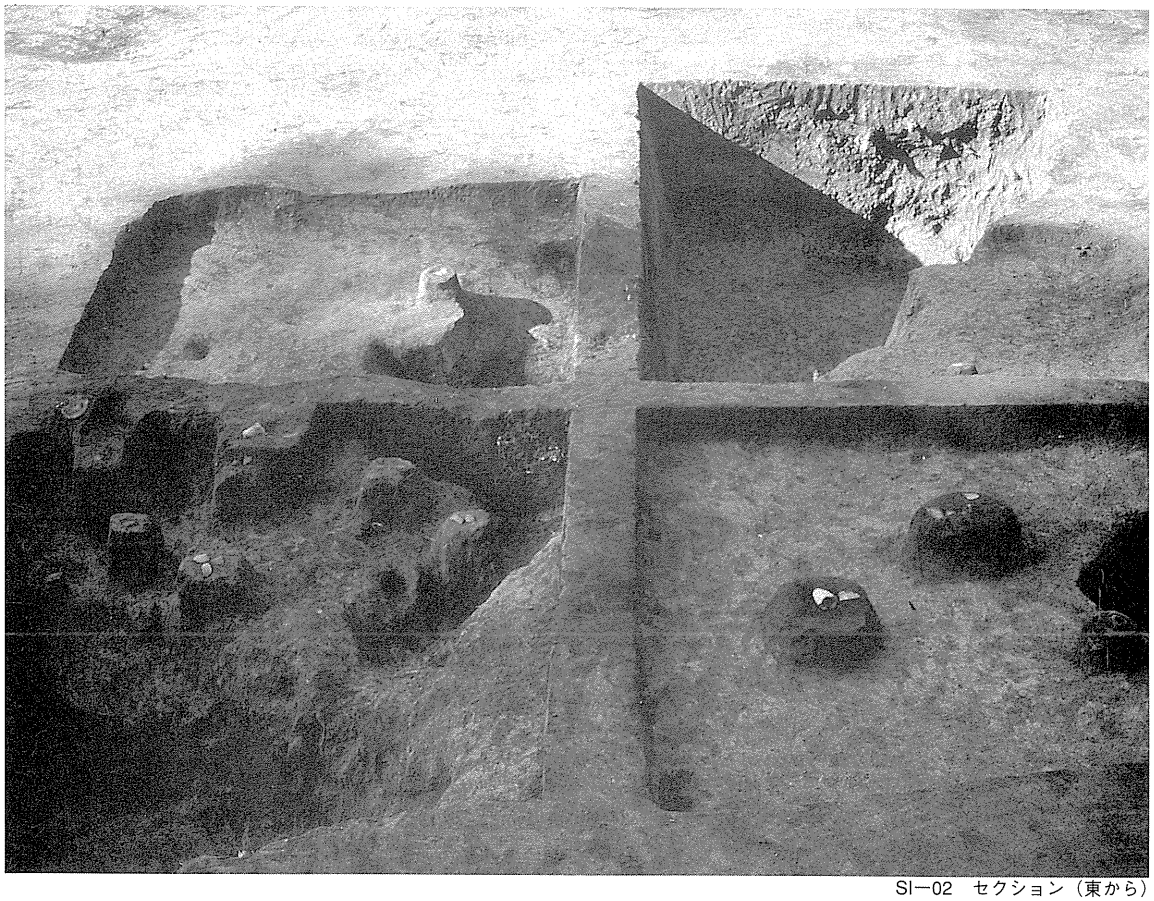
図版6　古墳時代　竪穴建物跡



SI−01　遺物出土状況（東から）

SI−01　完掘（東から）

SI−02　セクション（北から）



SI−02　セクション（東から）

図版8　古墳時代　竪穴建物跡

SI−02　セクション（北から）

SI−02　完掘（東から）

SK−01　セクション（南東から）

SK−01　完掘（南東から）

SK－02　遺物出土状況（南東から）

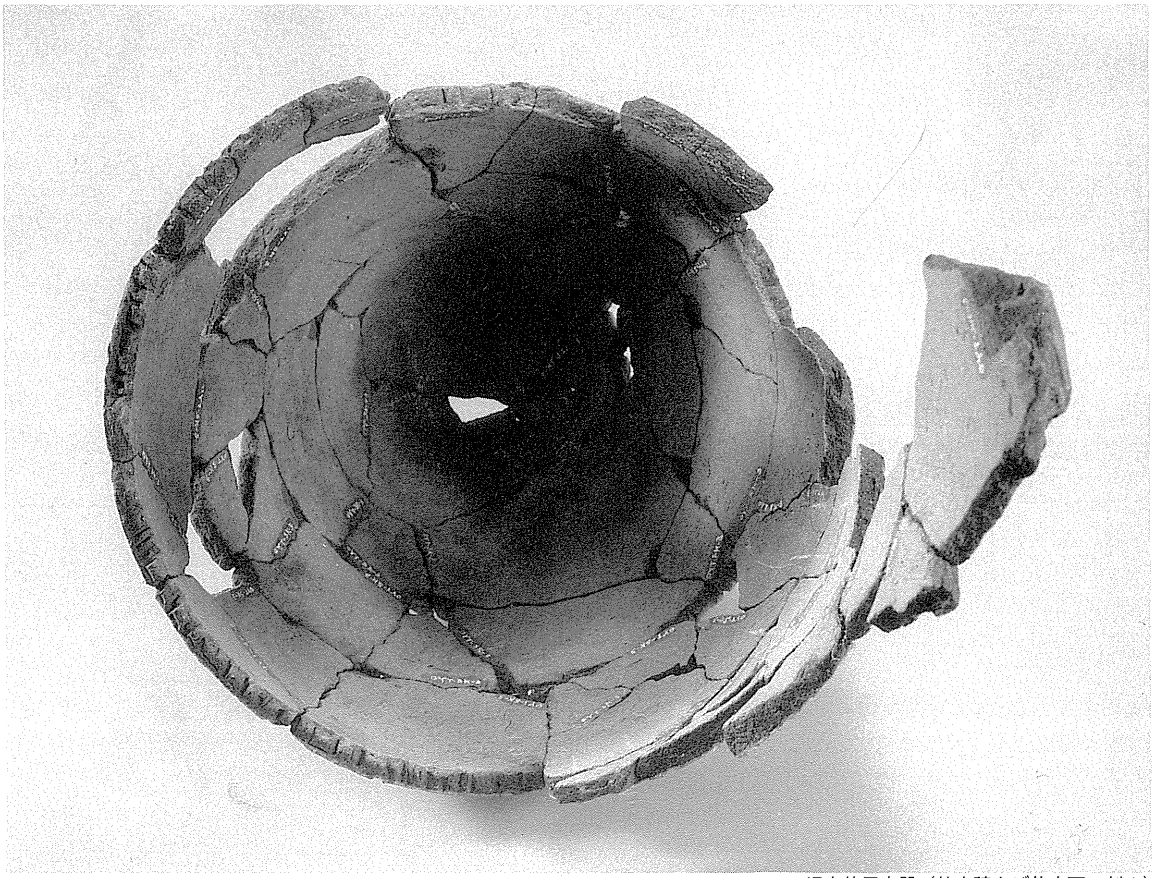
SK－02　完掘（南西から）

図版11　旧石器時代　出土遺物　縄文時代　埋甕使用土器

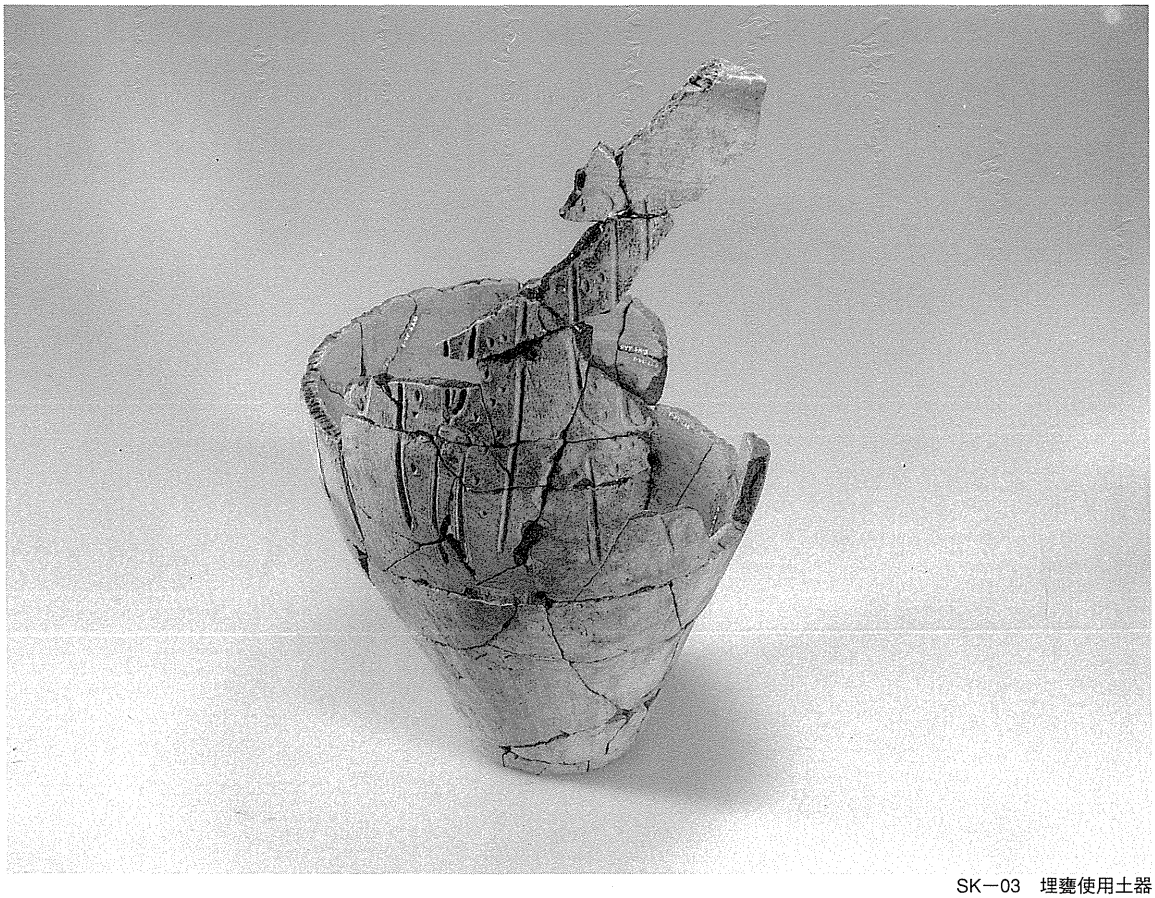
旧石器

SK－04　埋甕使用土器

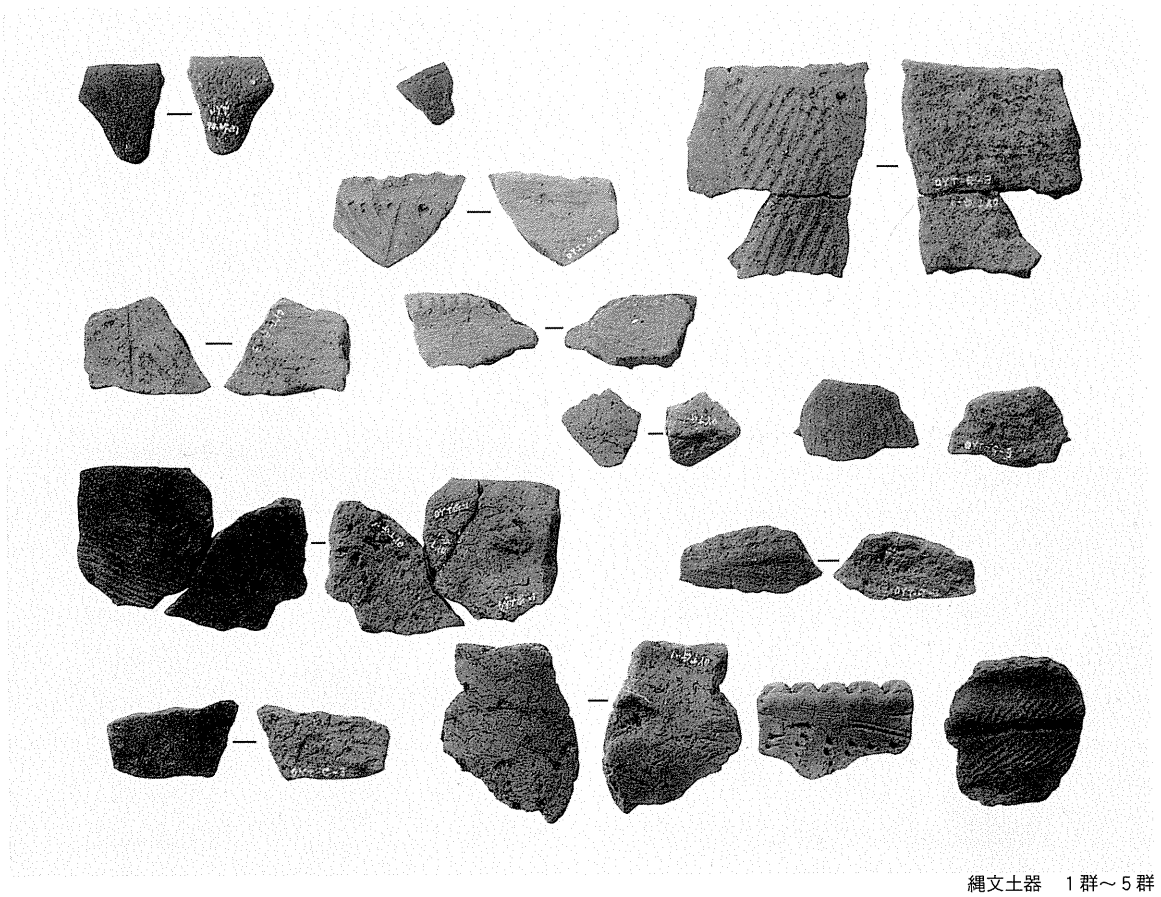
図版12　縄文時代　埋甕使用土器



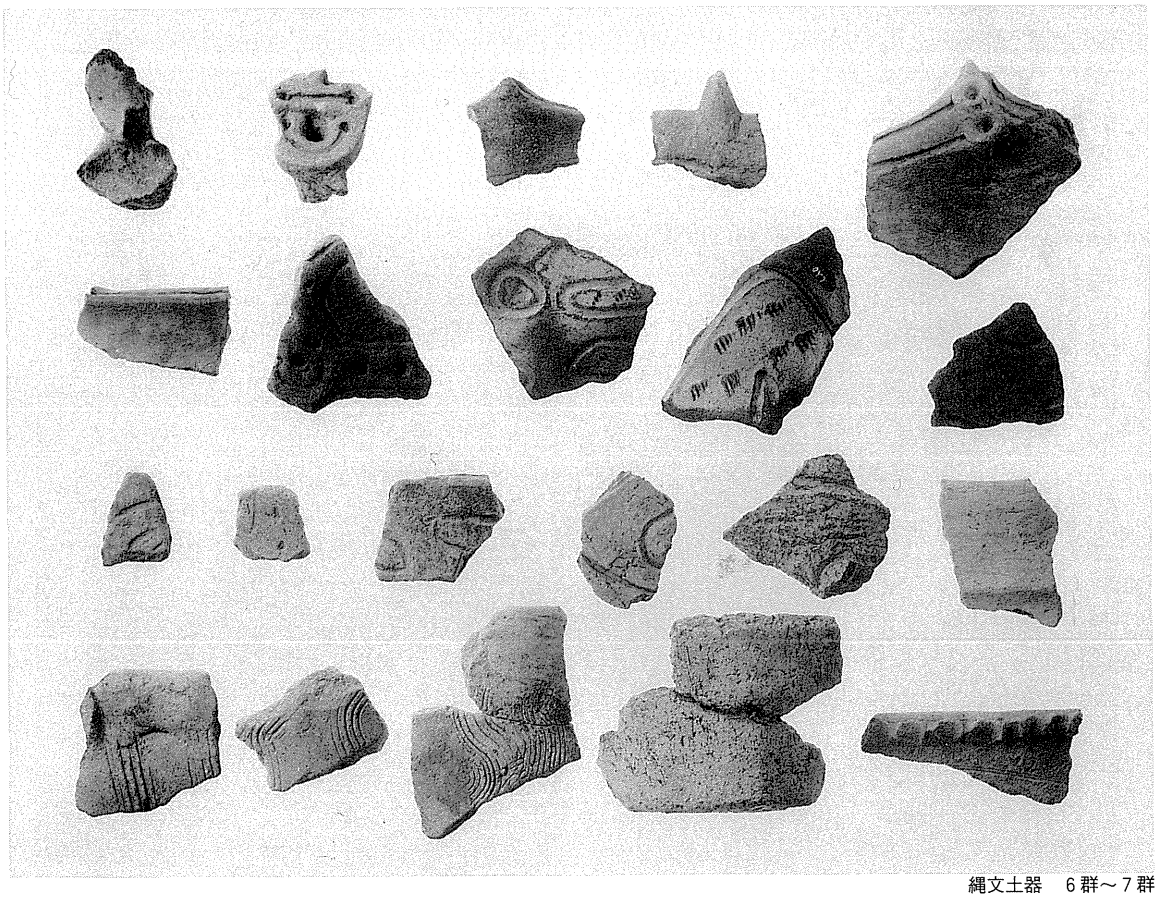
SK－03　埋甕使用土器（粘土積上げ休止面の刻み）



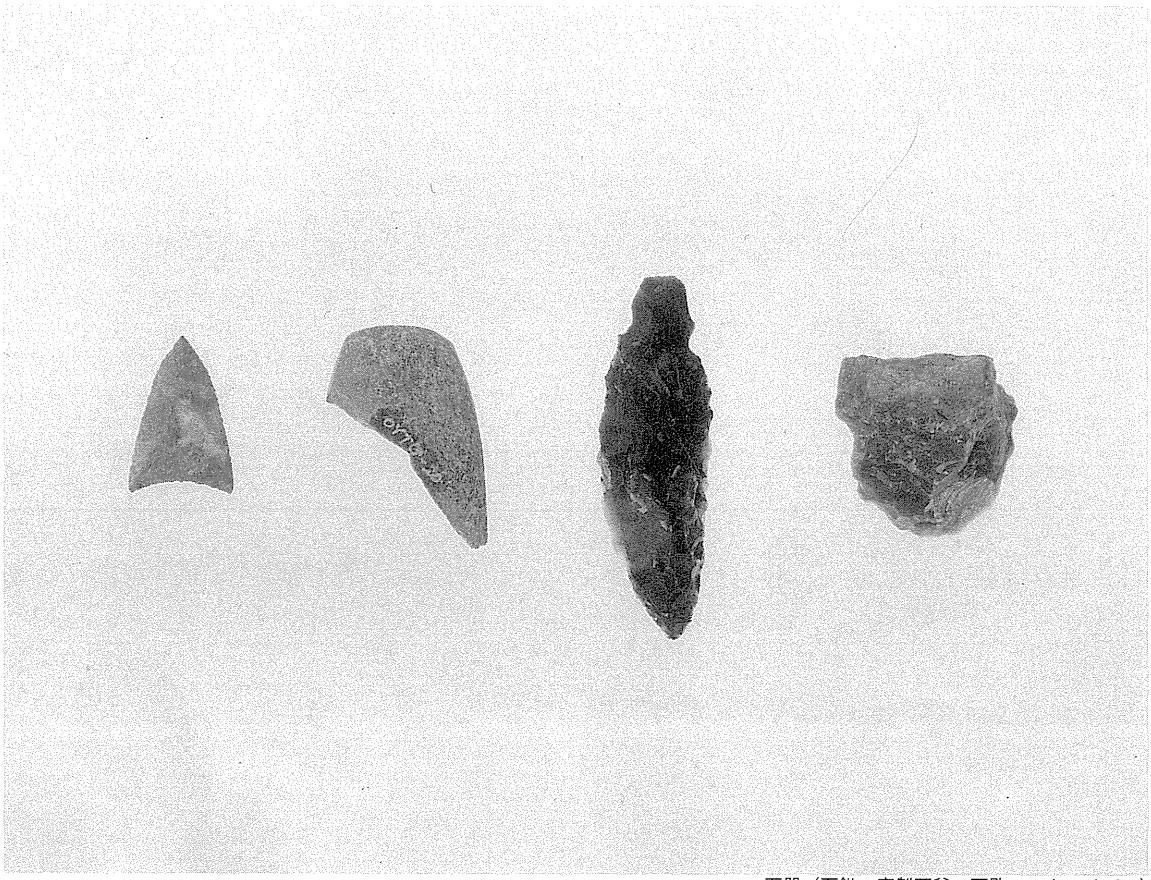
SK－03　埋甕使用土器



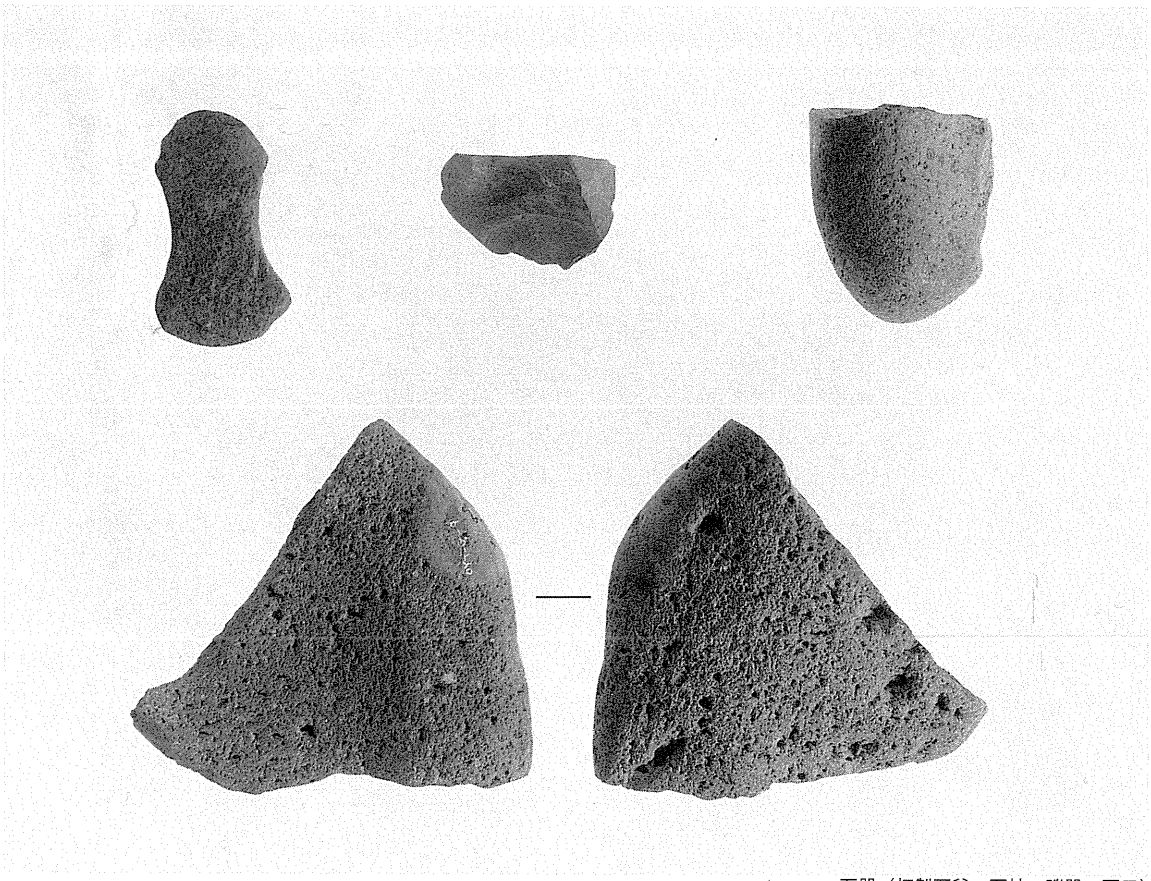
縄文土器　1群～5群



縄文土器　6群～7群

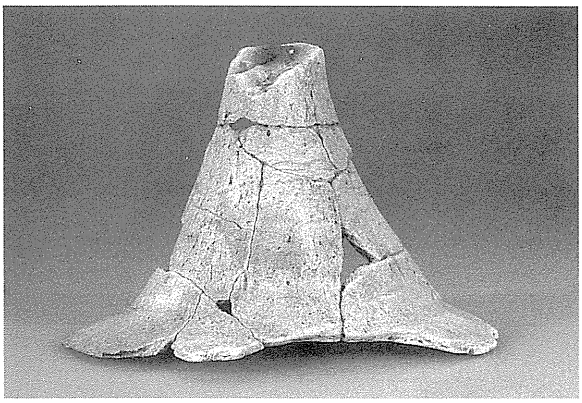


石器（石鏃・磨製石斧・石匙・スクレイパー）



石器（打製石斧・石核・礫器・石皿）

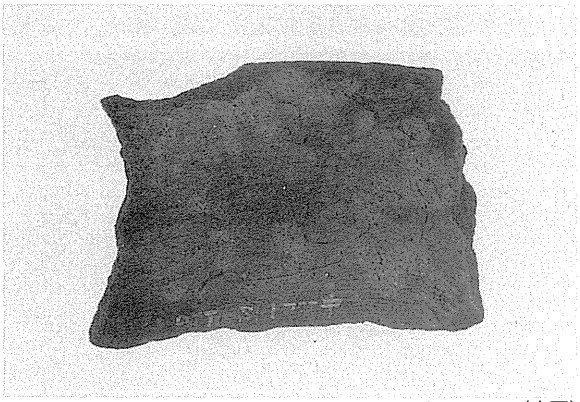
SI－01－1



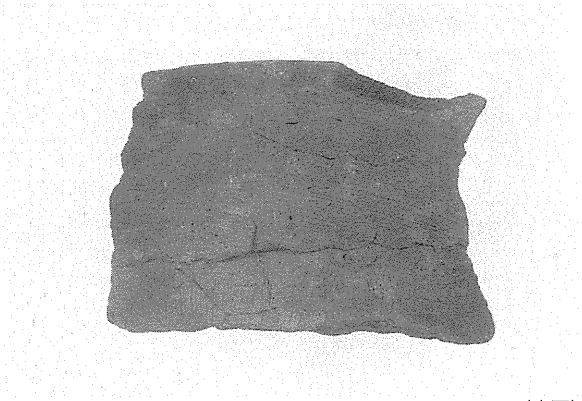
SI－01－2

SI－01－3

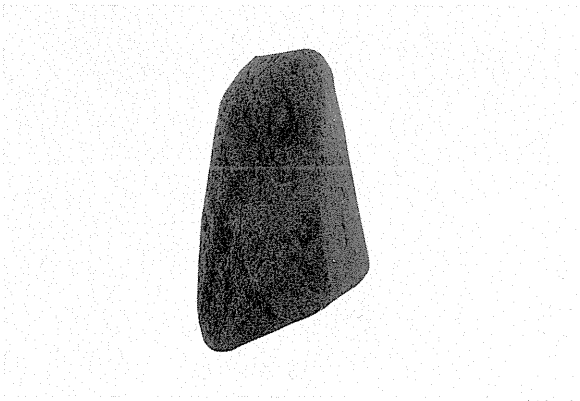
SI－01－4



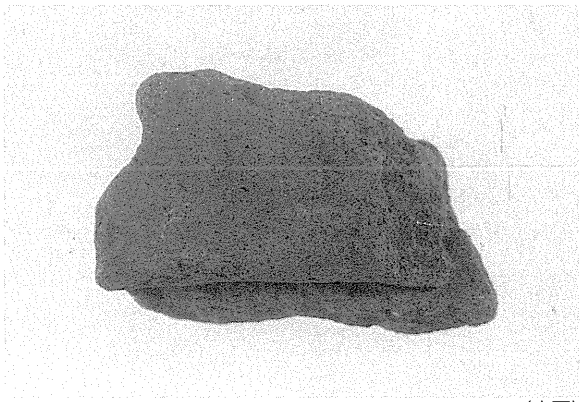
SI－01－6（裏面）



SI－01－6（表面）

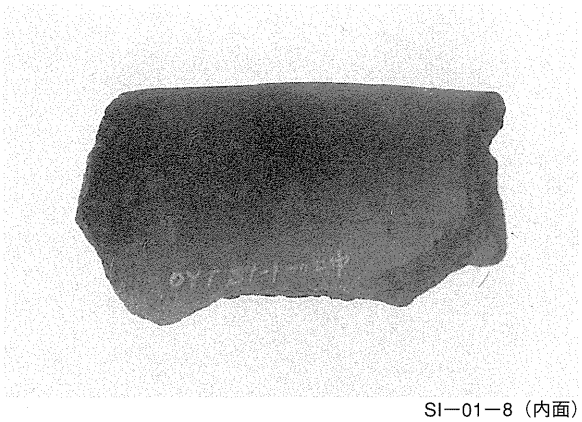


SI－01－7（断面）

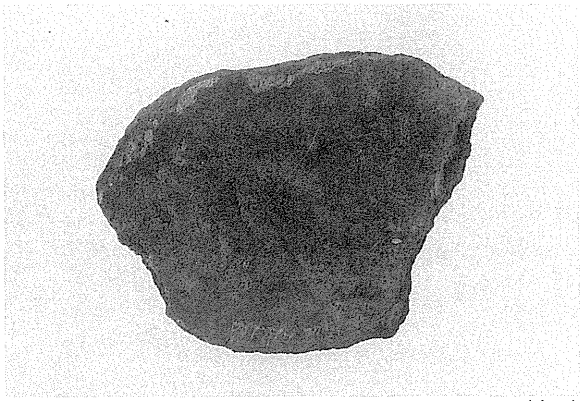


SI－01－7（表面）

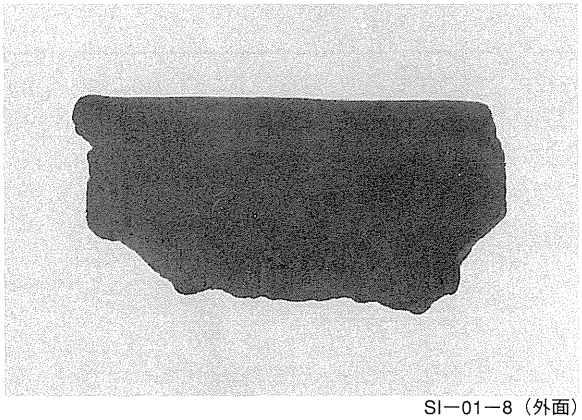
図版16　古墳時代　遺構出土遺物



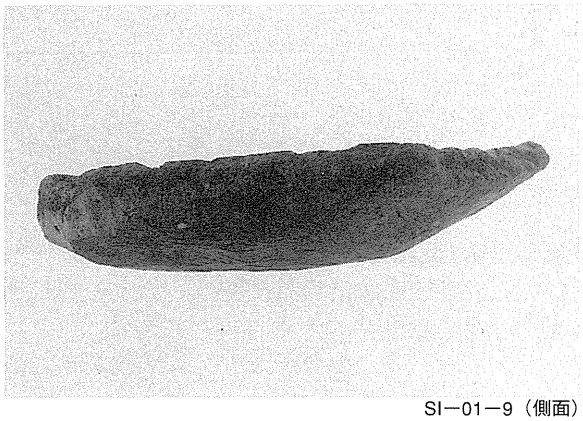
SI－01－8（内面）



SI－01－9（内面）

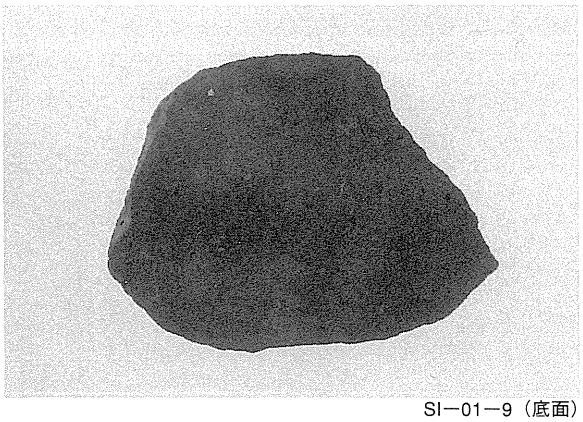


SI－01－8（外面）

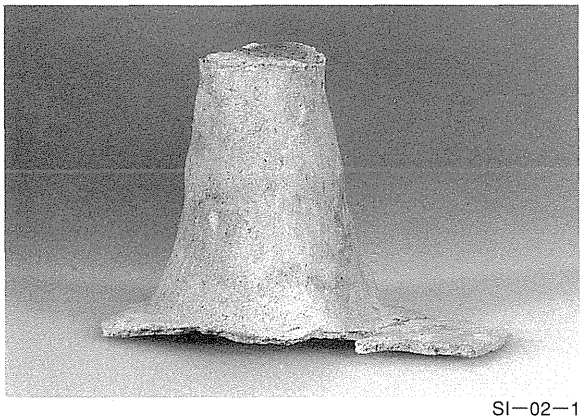


SI－01－9（側面）

SI－01－5

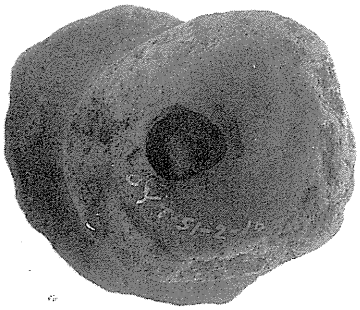


SI－01－9（底面）

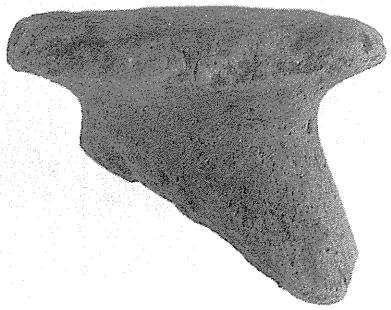


SI－02－1

SI－02－2



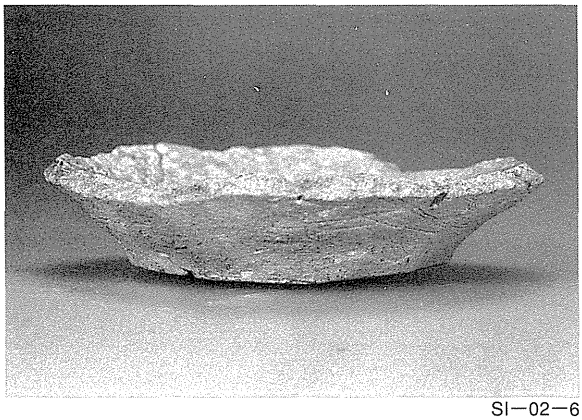
SI－02－3（脚部内面）



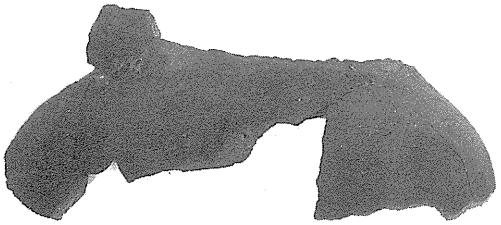
SI－02－3（側面）

SI－02－4

SI－02－5



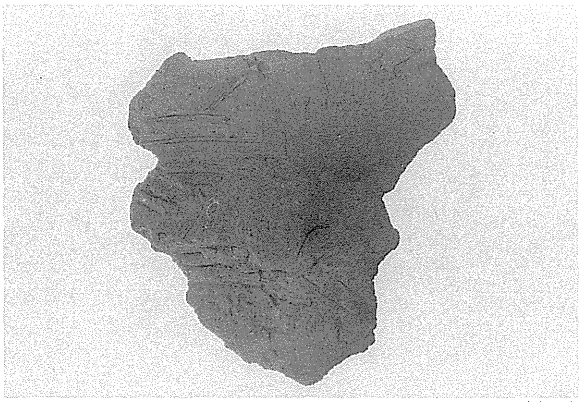
SI－02－6



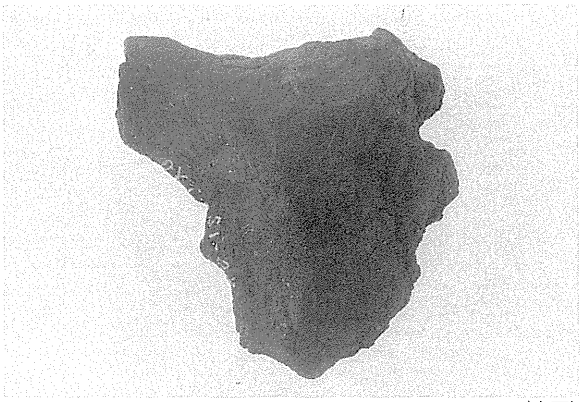
SI－02－7

SI－02－8（表面）

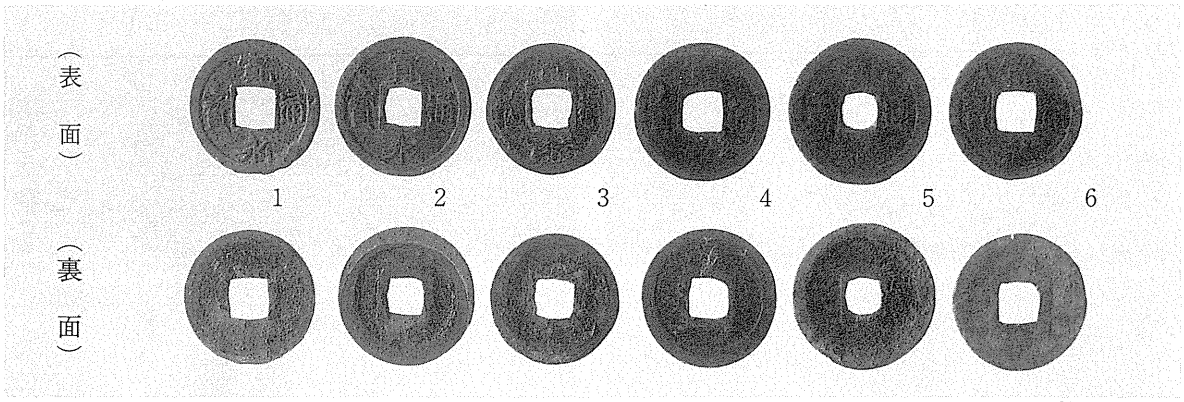
SI－02－8（裏面）



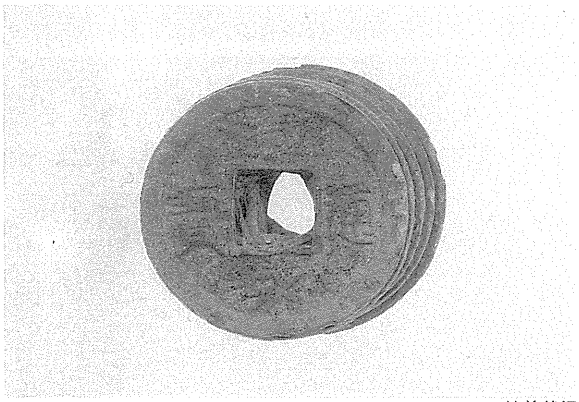
SI－02－9（表面）



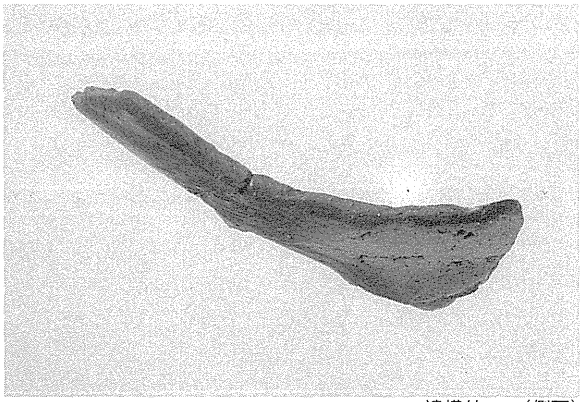
SI－02－9（裏面）



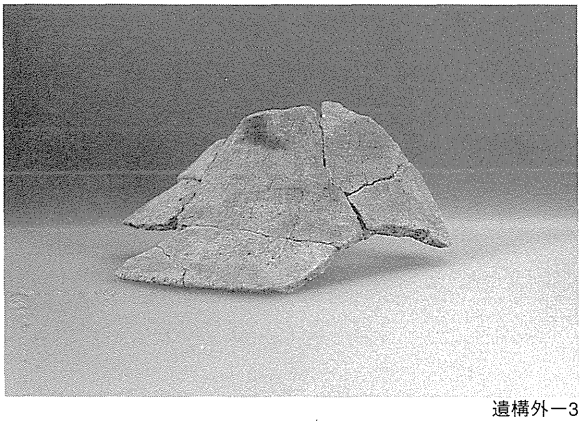
SK－02－1～6



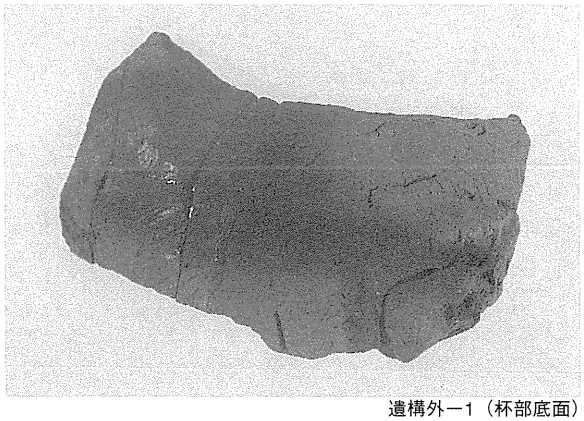
SK－02－1～6錆着状況



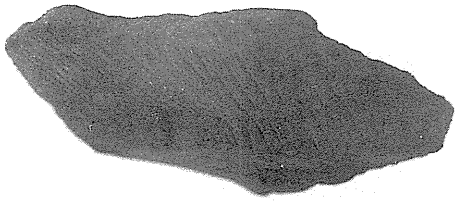
遺構外－1（側面）



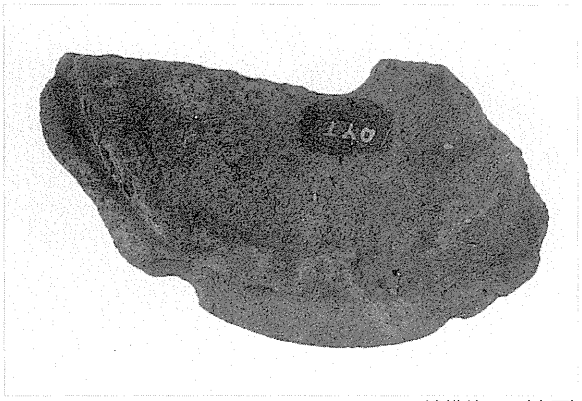
遺構外－3



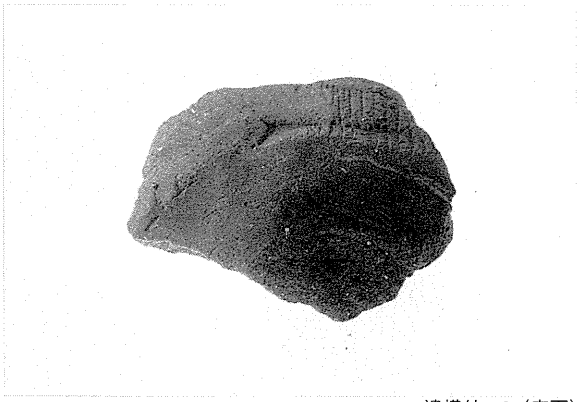
遺構外－1（杯部底面）



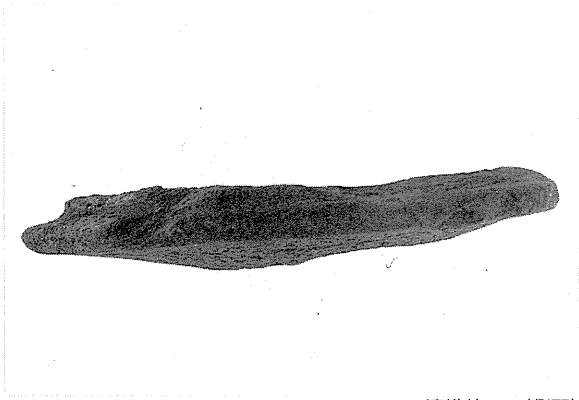
遺構外ー2（側面）



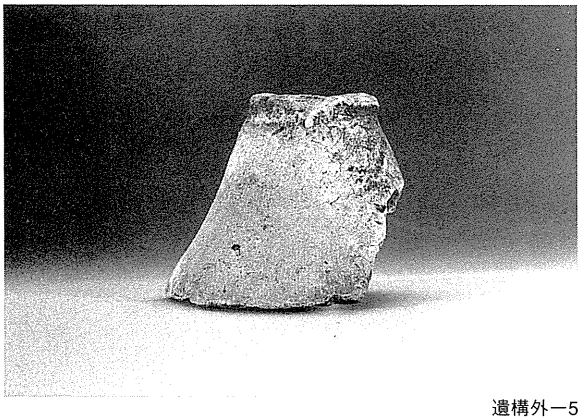
遺構外ー4（内面）



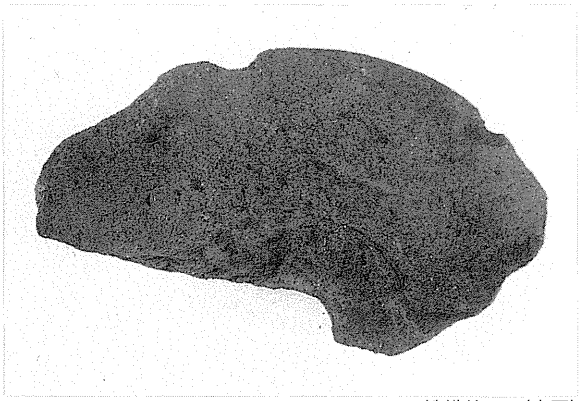
遺構外ー2（底面）



遺構外ー4（側面）

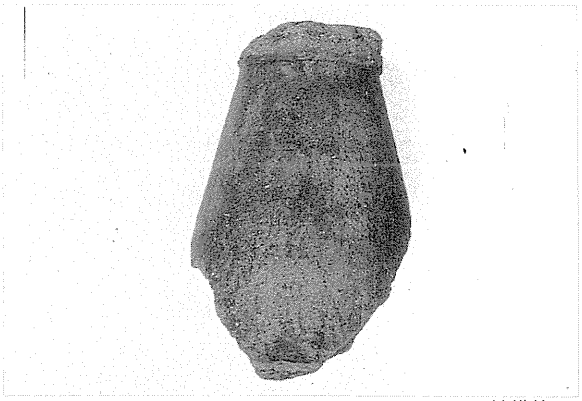


遺構外ー5



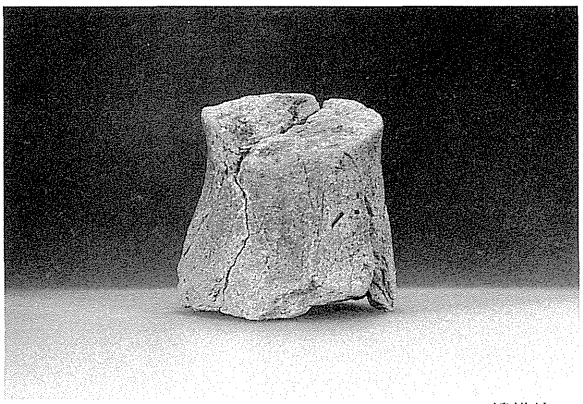
遺構外ー4（底面）

遺構外ー6

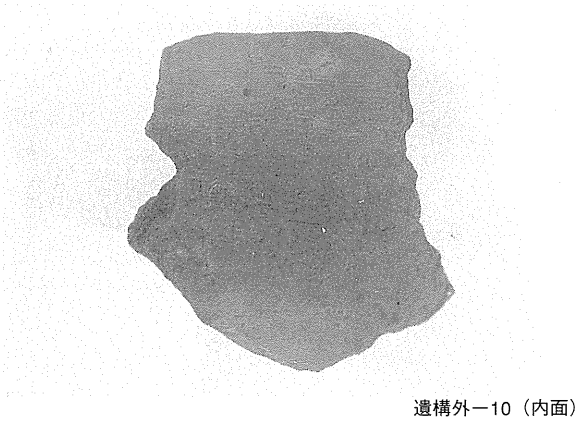


遺構外ー7

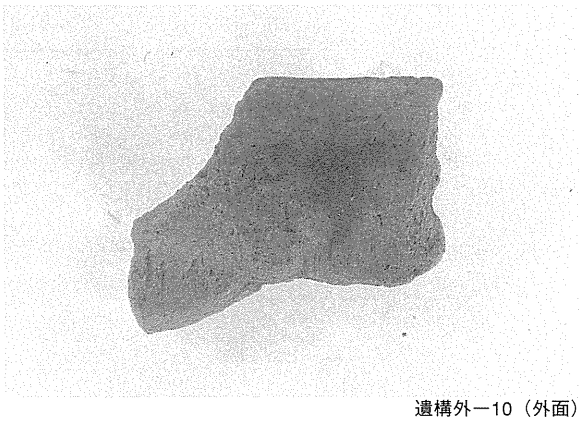
遺構外ー8



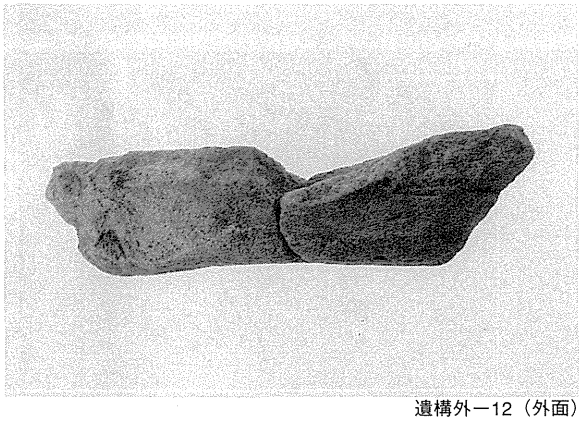
遺構外ー9



遺構外ー10（内面）

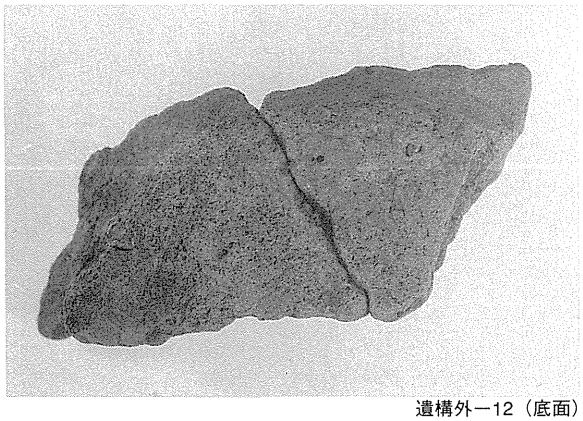


遺構外ー10（外面）



遺構外ー12（外面）

遺構外ー13（外面）



遺構外ー12（底面）

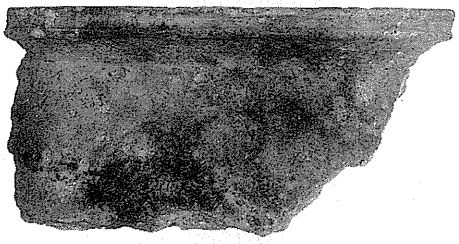
遺構外ー13（底面）

遺構外ー14（表面）

遺構外ー14（裏面）

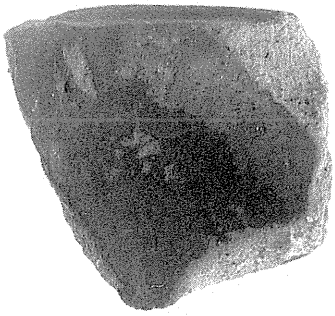
遺構外ー11

遺構外ー15（上面）



遺構外ー16

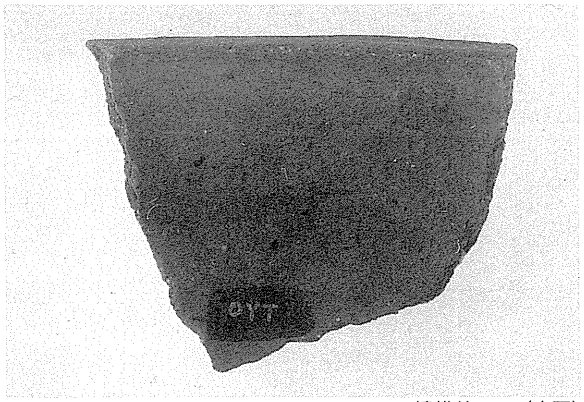
遺構外ー15（下面）



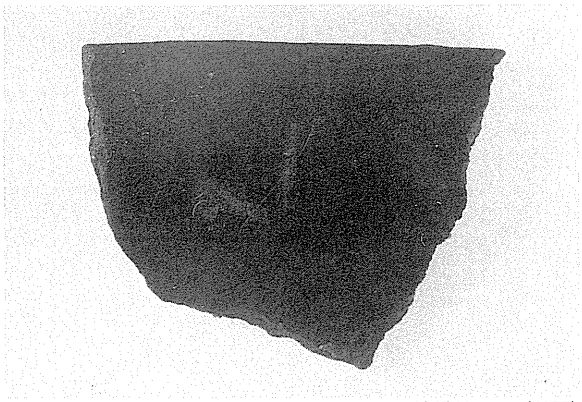
遺構外ー17（内面）

遺構外ー17（外面）

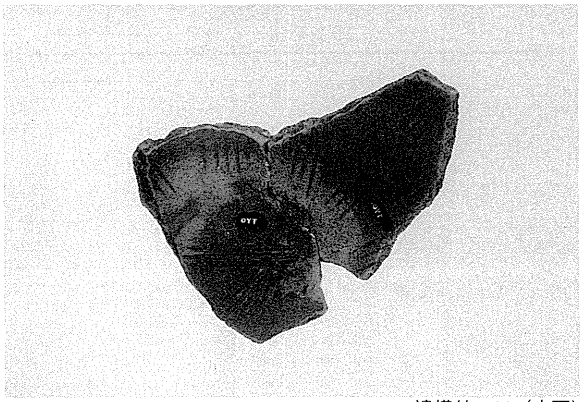
図版22　中世・近世　遺構外出土遺物



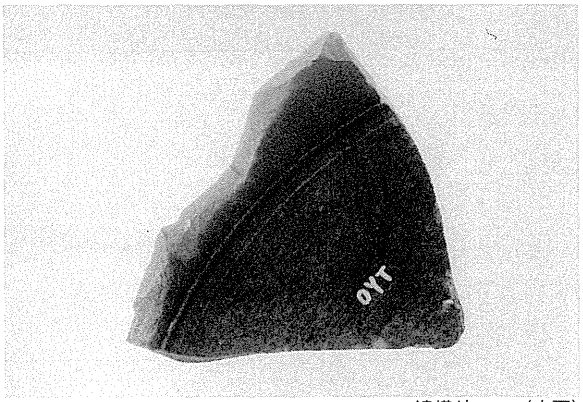
遺構外ー20（内面）



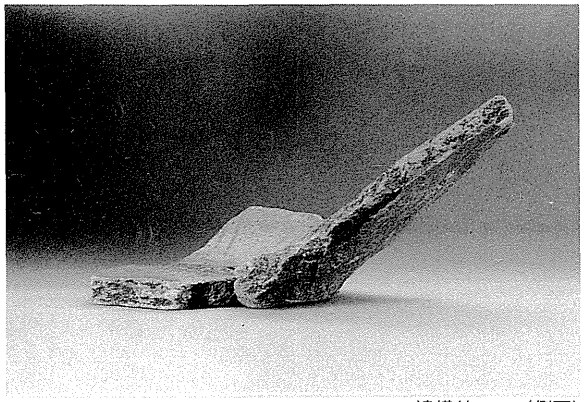
遺構外ー20（外面）



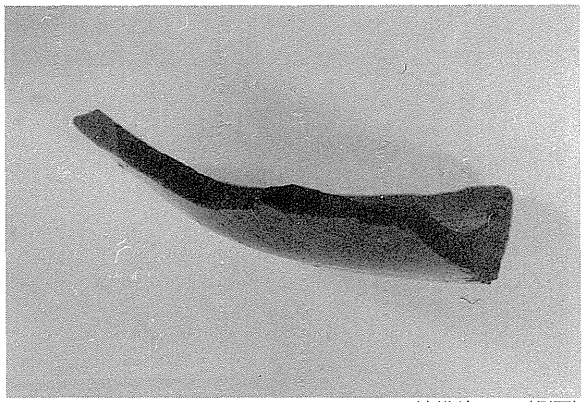
遺構外ー18（内面）



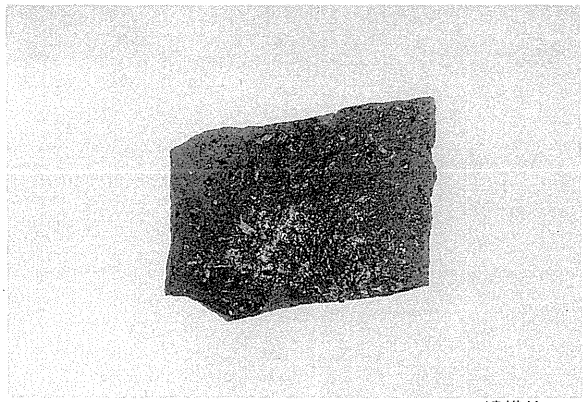
遺構外ー21（内面）



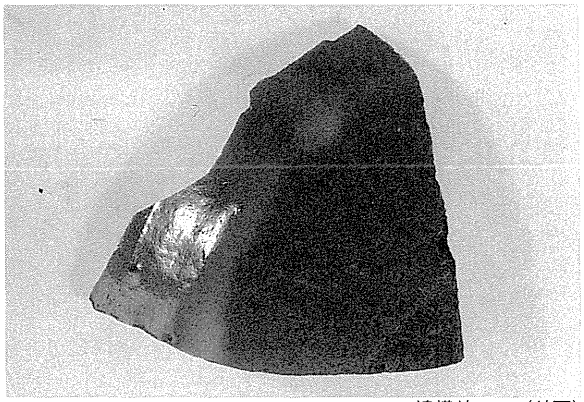
遺構外ー18（側面）



遺構外ー21（側面）



遺構外ー19



遺構外ー21（外面）

報告書抄録

ふりがな	よこくらとだていせき
書名	横倉戸館遺跡
副書名	一般国道４号（新４号国道）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第190集
編著者名	内山敏行・亀田幸久・岩上照朗
編集機関	財団法人栃木県文化振興事業団　埋蔵文化財センター
所在地	〒329-04　栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474　TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会　財団法人栃木県文化振興事業団
発行年月日	西暦　１９９７年３月２５日　（平成９年３月２５日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よこくらとだて 横倉戸館	とちぎけんおやまし 栃木県小山市 おおあざよこくら 大字横倉 あざとだて 字戸館	09208	349	36度 16分 32秒	139度 50分 14秒	19900402～ 19910331	5,000	国道４号線バイパス設置に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横倉戸館	集落跡	旧石器	なし	旧石器	
	墓	縄文	埋甕　２基	縄文土器（早期・前期・中期・後期）	埋甕は後期
		古墳	竪穴建物　２棟	土師器（前期・中期） 石製模造品 石製紡錘車	竪穴建物は中期
		平安	なし	土師器	
		中世	なし	土師質土器・瓦質土器	
		近世	墓　２基	土師質土器・陶器・寛永通寶	

栃木県埋蔵文化財調査報告第190集
横 倉 戸 館 遺 跡
一般国道４号（新４号国道）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査
発行　栃 木 県 教 育 委 員 会
宇都宮市塙田１－１－20
TEL 028（623）3424
財団法人栃木県文化振興事業団
宇都宮市桜４－２－２
TEL 028（621）1611
平成９年３月２５日発行
編集　財団法人栃木県文化振興事業団
埋蔵文化財センター
下都賀郡国分寺町大字国分乙474
TEL　0285（44）8441
印刷　下野印刷株式会社